

靈界物語 第三卷 海洋萬里 午の卷

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第三一卷』愛善世界社

1999(平成11)年08月22日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onido.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

第三章 救世神〔八六九〕

第四章 不知戀〔八七〇〕

第五章 秋鹿の叫〔八七一〕

第六章 女弟子〔八七二〕

第二篇 紅裙隊

第七章 妻の選舉〔八七三〕

第八章 人獸〔八七四〕

第九章 誤神託〔八七五〕

第一〇章 尊の影〔八七六〕

第十一章 賣言買辭〔八七七〕

第十二章 冷い親切〔八七八〕

第十三章 姉妹教〔八七九〕

第三篇 千里萬行せんりばんかう

第一四章 樹下の宿じゆか やど〔八八〇〕

第一五章 丸木橋まるきばし〔八八一〕

第一六章 天狂坊てんきやうぼう〔八八二〕

第一七章 新しき女あたらし をんな〔八八三〕

第一八章 シーズンの流ながれ〔八八四〕

第一九章 怪原野くわいげんや〔八八五〕

第二〇章 脱皮婆だつびば〔八八六〕

第二一章 白毫の光びやくがう ひかり〔八八七〕

第四篇 言靈將軍ことたましやうぐん

第二二章 神の試かみ ためし〔八八八〕

第二三章 化老爺（八八九）

第二四章 魔違（八九〇）

第二五章 會合（八九一）

（ ）

序歌

綾部の聖地を後にして

（綾部）

吾家を「伊豆」の温泉場

幽邃閑雅の山村

（山家）

狩野の流に臨みたる

湯ヶ島温泉湯本館

何に利くか「和知」らね共

（和知）

一度は來たれと信徒が

送る玉章細「胡麻」と

（胡麻）

見るも嬉しき吾思ひ

教主「殿」をば「田」ち出でて

（殿田）

松村眞澄、佐賀伊佐男

「園」ほか「部」の伊豆信者

（園部）

杉山當一林彌生

【八木】つく様な夏空を

(八木)

静かに進む汽車の上

【壽も長き【龜岡】の

(龜岡)

瑞祥祝ふこの旅行

【嵯峨】しあてたる好避暑地

(嵯峨)

言葉の【花】や教の【園】を

(花園)

【二】人の幹部と諸共に

只一と【條】に勇み行く

(二條)

【丹波】綾部に名も高き

出【口】

の神の御教を

(丹波口)

【京都】、大坂、東京の

(京都)

三大都市を始めとし

【山科】里に至るまで

(山科)

皇【大】神の大道を

【津】多へ擴むる神司

(大津)

堅き心は【石山】の

(石山)

月照り渡る如く也

青人【草】を【津】々がなく

(草津)

【守】りたまへと祈りつつ

(守山)

【山】【野】を【州】々みて【篠】すすき

(野州)

露野が【原】も乗

りこえて (篠原)

いつかは日の出の神の代に

【近江】の國や【八幡】宮 (近江八幡)

嚴の御前にぬかづきて

浦【安土】の心やすく (安土)

守り玉へと太【能】里【登】

宣る言靈は速【川】の (能登川)

水瀬の音と聞ゆ也

【稻】穂は榮【枝】て黄金の

(稻枝)

波漂はす【河】の【瀬】や

(河瀬)

國の御祖の永遠に 守り玉へる豊秋津

根別の國の八百【米】は 高天【原】に天照らす (米原)

皇大神のみことのり 天の下なる人草の

食ひて生くべきものなりと その神勅をひるも夜も

尊み眼も【醒ヶ井】の (醒ヶ井) 神の恵みに【近江】路や

御代【長】かれと祝ふなる 龜のよはひの龜【岡】に (近江長岡)

教の庭を開きつつ 打つ【柏】手の音も清く

高天【原】と鳴り渡る (柏原) 神と鬼との【關ヶ原】 (關ヶ原)

恵の露も【垂井】驛 (垂井)

世の【大】本は青【垣】の (大垣) 山をば四方に廻らして

神の鎮まる靈場と
數多の人々我一に

先を争ひ木曾川や
（木曾川）
神の光に仰岐阜し
（岐阜）

【尾張】に近き暗の世を
救ひ玉へと眞心を

【一】つに固めて本【宮】山
（尾張一ノ宮）
遠き山路も【稻】みなく

いと【澤】々に寄り来る
（稻澤）
神の經綸ぞ畏けれ

天の眞奈井の【枇杷】の湖
（枇杷島）
竹生の【島】に顯れませる

神の猛びを【名古屋】めつつ
（名古屋）
【屋】間登御魂の神人が

【熱】き心を【田】向け行く
（熱田）
神徳【大】くいや【高】き

（大高）

皇【大】神の生れまして
清き神【府】と定めてし
（大府）

世の大元は爰婆【刈】
豊葦原の中國【谷】
（刈谷）

【安】全地帯ぞ金【城】と
（安城）
尊み敬ひ許々太久の
【岡】せし罪を悔い乍ら
御靈【崎】はへ坐しませと
（岡崎）
赤き心のまめ人が
【幸】願ぎ奉り【田】のむ也
（幸田）

【蒲】の亂れの【郡】集を
（蒲郡）
皇大神の【御】仁慈の

清き【油】を濺がれて
（御油）
【豊】に渡る神の【橋】
（豊橋）

【二川】三河の水清く
（二川）
小雲の川や玉水に

身そぎ被ひて神徳を
信徒たちが【鷺津】神
（鷺津）

舊きを捨てず【新】しく
居所を定むる神の【町】
（新居町）

心も勇みて【辨天】の
（辨天島）
女神の前に眞心を

つく【島】つりし音楽や
【舞】曲も清くさはやかに
（舞坂）

御代の【坂】えむ瑞祥を
【濱】の【松】風音もなく
（濱松）

世は平らけく【天龍】の
心の【中】に靈【泉】の
神代を祝ふぞ尊けれ

勢強く【川】登り
（中泉）
甘露は盡きず湧き出でて
（天龍川）

【袋井】首に【掛川】の
（袋井・掛川）
貧しき人も神の道

悟りて欲を【堀ノ内】
（堀ノ内）
誠の教を守りなば

富貴も權威も【金谷】せぬ
（金谷）
神の御教を敷【島】の
（島田）

大和心を【田】鶴ぬれば
薰り目出度き白梅の

花【藤】答【枝】よ惟神
（藤枝）
醜の仇草【焼】鎌の
（焼津）

敏がまや【津】留岐ぬき【用】て
（用宗）
【宗】打ち拂ひ【静】々と

風雨雷電【岡】しつづ
（静岡）
誠の道【江】一散に

【尻】に帆かけて進み行く
（江尻）
あゝ惟神々々

御靈幸倍ましませよ

昔の元の大神が 現はれまして太元の

救ひの道を【興】し【津】々々 (興津)

【由比】所の深き【蒲生】の原

(由比・蒲原)

開きて根本靈場を 【岩】秀の如く彌固く

【淵】なす深き經綸を (岩淵) 【富士】の御山のいや高く (富士)

立てて天地の神人が 生言靈の鳴り渡る

五十【鈴】の【川】の川水に (鈴川) 【原】ひ清めて朝露の (原)

干【沼】の池に照る【津】岐の (沼津) 影も涼しく神の世を

開き玉ふぞ尊けれ

三月三日の桃の花

五月五日の【桃】實に

比すべき靈界物語

故【郷】の土産と瑞月が

(桃郷)

心も清く住の【江ノ】

【浦】安國の神寶と

(江ノ浦)

語る出【口野】神の教

(口野)

【天皇山】に祭りたる

(天皇山)

皇大神の御守りを

嬉しみ尊み神勅を

【北條】【南條】畏みて

(北條・南條)

【田】舎男や【京】わらべ

(田京)

遠き耳にも入り易く

解き明かしたる神の書

迎への人の親切も

酒の泉の【吉田】郷

(吉田)

車を止めて杉原家

殊更厚き待遇に

三伏の暑を打忘れ

心も深き眞清水の

湯槽に浸り汗水を

流して西瓜の腹つづみ

誠まことの信徒しんとも【大仁おほひと】や (大仁) 【瓜生野うりふの】の里さとも打過うちすぎて (瓜生)

野)

堅たてと【横よこ】との五十鈴いすず川がは (横瀬) 言靈車ことたまぐるま【瀬せ】を速はやみ

國常くにとこ【立野たちの】【大おほ】神かみが (立野・大平) 【平へい】和わの御世みよを【松ヶ瀬まつがせ】

や (松ヶ瀬)

【青羽あをば】の【根ね】配くばりいや廣ひろく (青羽根) 茂しげる稻田いなだの富貴草ふうきさう

【出で口ぐち】の王仁おにの一行いっかうは (出口) 早はやくも伊豆いづに【月ヶ瀬つきがせ】や (月

ヶ瀬)

天津御空あまつみそらの神かみ【門野のとの】 開ひらけ行ゆくてふ玉たまの【原はら】 (門野原)

天あめの八重雲やへくも搔かき分わけて 救すくひの神かみも【嵯峨澤さがさは】の (嵯峨澤)

今日けふの旅行りょかうぞ樂たのしけれ 木々きぎに囀さへうる蝉せみの聲こゑ

【市いち】なす【山やま】の片かたほとり (市山) 東とう【西さい】南北風なんぼくかぜ清きよく (西平)

【平へい】和わの里さとと【湯ヶ島ゆがしま】の (湯ヶ島) 狩野かのの流ながれに浴あみ乍なら

漸やうやく【安藤あんどう】の宅たくにつき (安藤) 心こころよりなるもてなしに

歡よろこび勇いさみ湯浴ゆあみして またもや例れいの物語ものがたり

口述こうじゆつ如來にょらいの「瑞月ずいげつ」が 安全あんぜん椅子いすによりかかり

淨じやうじ寫や菩薩ぼさつの松村まつむら氏し 腕うでに撚よりかけスラスラと

海洋かいやう萬里ばんり 午うまの卷まき いよいよ爰ここに述のべ寫うつす

あゝ惟かむながら神靈たま幸ちは倍は坐ま世せ

述のべつ寫うつしつ、暑あつさに堪たえし休養きゆうやう日を幸さいひ、筆ふでのすさびのいと永なが々と記ししておく。
『海洋ばんり萬里』 卯うの卷まき四日よつか間かん、同辰どうたつの卷まき三日みつか、同巳どうみの卷まき三日みつか、前後ぜんご合あせて十日と間かん。

大正十一年八月十七日 於湯ヶ島温泉 口述著者

總說そうせつ

本卷ほんくわんは秘露ひるの國くにアラシカ山麓さんろくのウラル教けうの宣傳使せんでんしの娘むすめエリナの家いへに、國依別くによりわけの宣傳使せんでんしが四し日に間かん滞たいざい在ざいの上うへ、楓別命かへでわけのみことのヒルの神館かむやかたに進すすむ途上とじやう、大地震だいちしんに出會であひ、

紅井姫の危難を救ひたる事より、ウラル教の日暮シ山の岩窟に於て、ブル一派を歸順せしめ、エスの危難を救ひ、それより紅井姫、エリナをエスに一任しおき、安彦、宗彦の二人を伴ひ、ブラジル峠の谷間を越え、シーズン川に於て、秋山別、モリスの二人の生命を救ひ、屏風山脈の最高地、帽子ヶ嶽に登り、言依別に邂逅し、茲に兩雄は協心戮力、アマゾン川及び時雨ノ森の邪神を言向け和せ、鷹依姫の一行を始め高姫一行を救ふ策源地と定めたる所まで口述せる、珍らしき古代の物語であります。

大正十一年八月二十日（舊六月二十八日）

於湯ヶ島温泉

第一篇 千状萬態

第一章 主一無適〔八六七〕

千早振遠ちはやぶるとほき神代かみよの昔むかしより 珍うづの都みやこのエルサレムに

天津御神あまつみかみの神言みこともて 國治立大神くにはるたちのおほかみは

普あまねく世人よびとを救すくはむと 野立彦のだちのひこと現あらはれまし

豊國とよくに姫ひめの神御靈かむみたまは 野立のだちのひめ姫あと現あらはれて

天あめと地つちとを兼かね玉たまひ 百ももの神人かみびと草木くさきまで

安やすきに救すくひ助たすくべく 心こころを千ち々ぢに配くばりまし

埴安彦はにやすひこや埴安はにやすひめ姫あの 貴うづの命みことと現あらはれて

黄金山わうごんさん下にあ三五なひの 神かみの教をしへを樹たて玉たまひ

救ひの道を宣り玉ふ

此御教を朝夕に

守り玉へる天教山の

木の花姫を始めとし

日の出神の珍御子が

神素盞鳴大神の

瑞の御靈の神業を

輔け玉ひて世に廣く

開き玉ふぞ尊けれ

豊葦原の瑞穂國

根別の國と名に負ひし

自轉倒島の中心地

綾の高天の靈場に

國治立大神は

暫し隠れて四尾山

國武彦と名を替へて

五六七の御世を來さむと

桶伏山の片ほとり

嚴と瑞との神御靈

玉照彦や玉照姫を

錦の宮の神司と

定め玉ひて三五の

教の庭を開かせつ

言依別の瑞御靈を

錦の宮の教主とし

西の神都はエルサレム

東の神都は桶伏の

靈山會場の神の山

ふと 太く建てたる神柱 緯の御霊と聞えたる

ことよりわけのみこと 言依別命をば 道の教主と任せ玉ひ

かみ 神の司を養ひて 自凝島を初とし

くに 國の八十國八十島を 皇大神の御恵みの

ひか 光りに照らし露あたへ 曇り切つたる現世を

じやくくわうじやうと 寂光浄土の天國に 造り成さむと千萬に

いそしみ玉ふ有難さ 教司の其一人

なか 中にも清き神司 國依別の宣傳使は

けうしゆ 教主の後に従ひて 自凝島を出立し

かみ 神のまにまに和田の原 荒浪分けてやうやうに

うみ 海に浮べる高砂の テルの港に上陸し

よ 夜を日に繼いで三倉山の 國魂神を祀りたる

ほくら 祠に二人は參拜し 飢に迫りし國人を

すく 救ひ助けて人々に 救ひの神と崇められ

教主言依別命は 袂を分ちウツの國

末子の姫の現れませる 都をさして出でて行く。

後に残りし國依別は 輕生重死のウラル教が

無道極まる迷信を 打破し盡して潔く

此場を立ちてヒルの國 櫻の花もチルの里

夜の荒シの森蔭に 辿りて息を休め居る

時しもあれやウラル教 亂れ散りたる信徒を

集めて再び出で來り 國依別を十重二十重に

圍みて生命を奪ひ取り 三五教を根底より

殲滅せむと襲ひ來る 醜の魔神を悉く

珍の神術に蹴散らし 皇大神の御前に

感謝し奉る折もあれ キジとマチとの二人の男

國依別の神徳を 慕ひて茲に走せ來り

師弟の約を結びつつ 日暮シ河の土堤の邊に

進む折しもウラル教の アナン、ユーズの兩人は

數多の部下を引率し 劍や竹槍を携へて

ヒルの都に三五の 教を傳ふ神司

楓別命の靈場を 夜陰に紛れて蹂躪し

打破らむと進み來る 此一隊に出會し

キジとマチとの兩人は 國依別の司より

鎮魂歸神言靈の 幽玄微妙の神力を

完美に委曲に授けられ 勇み進むで河の邊を

進みて來る魔軍に 向つて言靈打出せば

不意を打たれて敵軍は 雲を霞と逃げて行く

茲に三人は夜の道を スタスタ進みアラシカの

險しき峠を攀登り 東北指して降り行く

道の片方の古社 楠の古木の天を摩し

聳り立ちたる木下蔭 額づき拜む人影を

認めて近づき伺へば
ウラルの道の神司

エスの娘と聞きしより
キジは言葉も柔かく

親切こめて問ひ糺し
茲に様子を詳さに

明め盡し兩人は
國依別に相別れ

日暮シ山の岩窟に
囚はれ苦しむエスの身を

一日も早く助けむと
勇み進むで出でて行く

國依別の神司
エスの娘に従ひて

アラシカ山の麓なる
エスが館に立ち向ひ

暫くここに逗留し
神の教を宣べ傳へ

ヒルの都に立寄りて
楓別に面會し

キジ、マチ二人を助けむと
日暮シ山の岩窟に

進みてプールの神司
言向け和し驍名を

高砂島は云ふも更
豊葦原の國中に

轟かしたる物語
狩野の溪流眺めつつ

初秋しよしうの風かぜを浴あび乍ながら 安樂あんらく椅子いすに横よこたはり

敷島しきしま煙草たばこをくゆらしつ 淨寫じやうしや菩薩ぼさつと立向たちむかひ

いよいよ靈界れいかい物語ものがたり 三十一みそまりひとつの卷始まきはじめ

言靈車ことたまぐるま轉ころばしぬ あゝ惟神かむながらかむながら々々

御靈みたま幸さちはひましませよ。

國くに依別よりわけはエリナに導みちびかれ、エスの家いえに漸やっやく着つきぬ。エリナの母ははは思おもひの外ほかの重ぢうび

病やうにて、殆ほとんど人事じんじ不省ふせいの體ていなり。國くに依別よりわけは取とる物ものも取敢とりあへず、草鞋わらぢをとくとく座敷ざしき

に驅かけ上あがり、直ただちに天津祝詞あまつのりとを奏上そうじやうし、天あまの數歌かずうたを稱となへあげ、鎮魂ちんこんを施ほどこし、いろいろ

雜多ざつたと丹精たんせいをこらしめて、病氣びやうき回復くわいふくの途みちを謀はかりける。されど如何いかにせしか、病人びやうにんは

少しも快方くわいはうに向むかはずして、日ひに日ひに衰弱すあく甚はなはだしく、最早もはや絶望ぜつぼうの域みきに進すすみたり。エ

リナは一生懸命いつしやうけんめいに水垢離みづごうりを取とり……、

三あな五なひ教けうの大おほ神かみ國くに治はる立たち命の様さま、常世とこよし神しん王わう様さま、何卒なにとぞ々々なにとぞ父ちちの危難きなんを遁のがれさせ玉たまへ、母ははの難病なんびやうを今いま一度いちど救すくはせ玉たまひて、夫婦ふうふ親おや子こが假令たとへ一いち日にちなり共とも、嬉うれしく樂たのしく、互たがひに

顔を見合せ、恵の露にうるほひまする様……」

と、我れを忘れて祈願を凝らし居る。されどエリナの心中は未だ主一無適の精神には成り得ず迷ひあり。其理由は、國治立命は果して善神なりや？ 但は常世神王の方が善神なるや？ 國治立神を念じなば、常世神王の神怒に觸れて、益々母の病は重り、父の大危難は愈深くなり行くには非ざるかとの疑念が、頭腦の中に往來しゐたるが故なり。

國依別はエリナの心の中を推知し、四五日茲に逗留して、いろいろ雑多と善惡不二、顯幽一本の眞理を説き諭したれども、父母の災厄に周章狼狽したる若き娘の事とて、千言萬語を盡しての國依別の教示も、容易に頭に入らず、唯一日も早く父の危難を救はれ、母の重病の癒やされむことにのみ餘念なく、一心不亂になり乍ら、信仰上の點に於て非常に迷ひ苦しみ居たり。それ故に神徳充實したる國依別命の鎮魂も、言葉も功驗を現はすには至らざりける。

凡て信仰は迷ひを去り、雑念を拂ひ、理智に走らず、只何事も神意に任せ奉り、主一無適の心にならなくては、如何な尊き神人の祈念と雖も、如何に權威ある言

靈と雖も、容易に其效の顯はれざるは當然なり。要するにエリナの信仰は二心にして、悪く言はば内股膏藥的信仰に墮し居たり。幼少の頃より宇宙間に於て常世神王に優る尊き神はなく、又常世神王に勝るべき權威はなし、萬一常世神王の忌憚に觸れむか、現界は云ふも更、靈界に於ても無限の苦しみを受け、且つ嚴罰に處せらるべしとの信仰を深く心の底より植ゑ付けられ居たるが故に、誠の神の教を喜びて聽聞し乍らも、不安の雲に包まれ、煩悶苦惱を續け居たるなりける。

國依別は容易にエリナの信仰の動かざるを悟り、且つ彼の母の病氣は到底救はれざることを悟りて、いよいよ此處を立去り、ヒルの都に向う決心なしたりける。

國依別はエリナに向ひ、

「エリナさま、永らく御世話になりましたが、貴女の御信仰は何うしても徹底致しませぬ。それも無理のなき事とせう。就いてはお母アさまの御病氣も最早絶望ですから、其お積りで居て下さい。又エスさまを救ひ出さむとして、日暮シ山の靈場に向つたキジ公、マチ公の兩人が未だ歸つて來ないのも、何か神界に於て深き思召しのある事とせう。父を救ひ、母を救はむとのあなたの眞心は實に感服の

至りですが、斯かる場合には、あなたの日頃信ずる常世神王様に、主一無適の眞心を捧げて御願ひなさる方が却て御神力が現はれるでせう。三五教の主神國治立命様は、あらゆる萬民の苦みを助け下さる有難き神様なれど、あなたの信念力が二つに割れて居りますから、神様も救ひの御手を伸べさせ玉ふ事が出来ませぬ。斯う申せば、國治立神は餘程氣の狭い偏狹な神様だと思はれるでせうが、決して左様な不公平な神様ではありません。只あなたが神様は元は一株だから、常世神王様を念じても、國治立の神様は決して御怒りなく、又國治立命を何程一心に念じたとして、常世神王様が御立腹遊ばすものでないと云ふ事が御分りにならなくては、信仰は駄目です。神様の方では左様な小さい障壁や區畫はありません。女の心の中に區畫をつけたたり深き溝渠を穿つたり、いろいろと煩悶の雲が包んであるから、何程神様が御神徳を與へやうと思召しても、お前さまの方に感じないのだから仕方がありません。それ故あなたの最も信ずる、常世神王様に御祈願をなさつた方が、却て御安心でせう。私は是から御暇を致します。ここ暫くの間は、ヒルの都の楓別命の神館に逗留の考へでムいますから、御用があつたら、國依別

と云つてお訪ね下さいませ。何時でもお目にかかります。又幸ひにエスさま始め
キジ、マチの兩人が歸つて來られたら、國依別はヒルの都に逗留して居るからと、
傳言を願ひます。左様ならばエリナさま、御病人様を大切になさいます。』
と立出でむとするを、エリナは周章で引とめ、

『モシモシ宣傳使様、どうぞさう仰有らずに、暫く御逗留遊ばして下さいませ。』

これから心を入れ替へて、あなた様の仰せに従ひ、信仰を致しますから……』

心の底から發根と分つての信仰でなければ到底駄目です。神様は仁慈無限の御
方故、別に頼まず共、助けてやりたいと思召し、種々と力を御盡し遊ばしてゐる
のですが、あなたの中の執着と云ふ曲鬼が神徳を遮つて居るのです。其曲鬼
をあなた自ら追出さねば到底駄目ですよ。國依別が別れに臨むで、御注意申上げ
ておきます。左様ならば……』
と後に心を残しつつ、國依別は此家を立出でヒルの都を指して進み行く。

(大正一一・八・一八 舊六・二六 松村眞澄録)

第二章 大地震（八六八）

國依別の立去つた後のエリナは、掌中の玉を何者にか奪はれたるが如き心地し乍ら、門に立出でて、宣傳使の姿の廣き原野に見えなくなる迄打見まもり、

「ア、御親切な御方であつたナ。どうぞモウ暫く居て下さればよかつたのに……」

俄に御機嫌を損ねたと見えて、とうとう歸つて了はれた。最早此上は三五の神様に見放されたに違ない。ヤツパリ昔から信仰して來た常世神王様を、一心不亂に信仰致しませう。お父さまが日暮シ山の牢獄に囚はれて、あるにあらぬ責苦に會ひ、お苦しみ遊ばすのも、其元を尋ねれば、ウラル教の神司であり乍ら、ブルの教主様が常に異端とし、外道としてお嫌ひ遊ばす三五教の宣傳使を吾家に泊めたり、又ウラル教の信者に對し、異端外道の教を御勧め遊ばした天罰が酬うたのであらう。何程誠の教でも、常世神王様に仕へて居る以上は、二心を出して他の神様を信仰すれば、神罰が當るのは當然だ。ア、是から心を改めて、常世神王様に對し、心の底よりお詫びを致し、主一無適の信仰を捧げませう。……あゝ常

世神王様、吾々教子の重々の罪、何卒御赦し下さいませ」

と言ひ乍ら、家に入り、母親の枕許に進み寄り見れば、母親は少しく頭を擡げ、ニコニコと笑ひ初めた。

「ア、お母アさま！ 大變に御氣分がよささうに御座いますなア。こんな嬉しい事は御座いませぬ」

「お前は餘り兩親を大切に思ふ真心より、遂にウラル教の有難い事を忘れ又お父さまの様に三五教の宣傳使を吾家に連れ歸り、外道の神様を信仰なさるものだから、私も又もやブールの大將に睨まれ、お前と私とが、再びお父さまの様に、水牢の責苦に會はねばならぬかと、それが心配になつて、病氣はだんだん重る計り、心の中で……常世神王様、どうぞ一時も早く宣傳使が歸つて呉れます様……と、祈願をこらして居りました。おかげに依つて外道の宣傳使、吾家を立出で、姿を見せなくなつたので、ヤツと安心し、俄に氣分も良くなつて來たのよ。モウ是からどんな事があつても、外道の宣傳使を吾家へ連れて歸ることはなりませんぞや。お前は親を助けようと思つて焦り、却て、外道に迷ひ、親を苦しめる様な

事ことになるから、どうしても斯こうしても常世神王様の教をしへを疎外そぐわいし、外道げだうに迷まよはぬ様やうに心得こころえて下くだされや。おかげは忽たちまち此この通りだから、神様かみさまが種々いろいろとして、吾々われわれ親子おやこの信仰しんかうの厚薄こうはくを御試おためし遊あそばすのだから、チツとも油斷ゆだんはなりませぬぞえ」

「ハイ、現當利益げんたうりやくと言いひ、お母アさまのお言葉ことばといひ、只今ただいま限りスツパリと心こころを改あらため、決けつして外ほかの道みちへは迷まよひませぬから、御安心ごあんしん下さいませ」

「あゝそれを聞きいて母も安心あんしんしました。サア早はやく常世神王様とこよしんわうさまに御禮おれいを申上まをしあげてお呉くれ！」

「ハイ、只今ただいま直すくに感謝かんしゃの詞ことばを捧ささげませう」

と直ただちに、庭先にはさきを流ながる細谷川ほそたにがはに身みを清きよめ、衣類いるぬを着替きかへ、恭うやうやしく感謝祈願かんしゃきぐわんの祝のり詞とを奏上そうじやうし居ゐる。

かかる所ところへ日暮ひぐらシ山のブルの使つかいとして、アナンは四五人しごにんの部下ぶかを引ひきつれ、此この家やに荒々あらあらしく入來いりきたり、いとも聲高こゑだかにエリナに向むかひ、

「オイ、エリナとやら、貴様きさまは又またしても、三五教あななひけうの神司かむつかさを吾家わがやに引ひき入れ、朝夕あさゆふ…親おやの病氣びやうきを直なほさうとか、父ちちの危難きなんを遁のがれさせ玉たまへとか云いつて、祈いのらして居をつた

ではないか？ 近所の者の注進によつて、何も彼もスツカリと教主の耳に這入つ

てゐるぞ！ それにも拘はらず、三五教の亂暴者キジ、マチの兩人を差向け、聖

場を蹂躪せむと致した圖太き代物……サア教主の命令だ、尋常に手を廻せ。日暮

シ山の館に連れ歸り、其方もエスの様に水牢に投込み、戒めてやらねばならぬ」

と鼻息荒く呶鳴りつける。母親はアナンの聲を聞いて又もや心を痛め、猛烈なる

癩氣を起し、其場に「ウン」と倒れて人事不詳の體なり。エリナは身も世もあら

れぬ心地し乍ら、こわごわ手を仕へ、

「これはこれはアナンの大將様、能くこそ御入來下さいました。御存じの通り、

父は館に囚はれ、跡に残つた一人の母は此通りの大病、今私が引つ立てられて參

りますれば、あとに誰が母の世話を致す者が御座いませう。是非行かねばならぬ

者なれば潔く參りますが、どうぞ此母の病氣が直りますまで、御猶豫を願ひます」

アナンは烈しく首を左右に振り、

「あゝイヤイヤ、其事許りは罷り成らぬ。一時も早く汝を召捕來れよとの嚴命、

到底吾々の獨斷にて其方に猶豫を與へる事は出来ない。何と云つても引捉へて歸

らねば、此方の役目が濟まぬ。そうして三五教の宣傳使は何時此處を立つたか？」

「只今御立ちになりました」

「さうだらう。最前歌を歌つて行きよつたのが、神力無雙の國依別だらう。彼奴が居やがると、チツと此方も都合が好くないのだ。二三日前から、此家を遠巻きに巻いてゐたのだ。サアもう斯うなる上は、泣いても悔むでもおつつかぬ。キリキリと手をまはさぬか」

エリナは自棄氣味になり、容を改め、悪胴を据ゑ、

「コレ、アナンさま！ お前さまも餘程良い腰拔だなア。日暮シ河では脆くも一人の宣傳使に追ひまくられ、又たつた一人の國依別が恐ろしうて、二晩も三晩も、此暑い、蚊の喰うのに、頼みもせぬ私の家の夜警をして下され、澁茶の一杯も進ぜるのが道かは知りませぬが、餓鬼にやる茶があつても、お前さま等に吞ます茶はありませぬワ。そこに谷川の水が流れてゐるから、それなつと吞むで、モウ一きり御講演を願ひます。ラツパ節でも法螺貝節でも構ひませぬワ。お母アさまの冥途の土産に、一つ力一杯吹き立て下さい」

アナンはクワツと怒り、巨眼を見開き、

「コリヤ女！ 譬へがたなき汝の雑言無禮、最早聞捨はならぬぞ」

「お父うさまはお前達悪人の爲に囚へられ、お母アさまは此通りの重病、たつた今の先、餘程快方にお向ひ遊ばし、ヤツと安心する間もなく、お前がここへふみ込んで大聲を出し、お母アさまを最早取返しのならぬ様な重態におとして了ひよつた以上は、お母アさまの御壽命も今日一日が保ちかねる。さうならば此エリナは最早自棄くそだ。たかが男の五匹や十匹、何が恐ろしい……國依別の宣傳使より神變不思議の神力を授かり、最早立派な三五教の女宣傳使だ。指一本でも觸へるなら、見事觸へて見よ」

と呶鳴り立て、睨み付けたる。其權幕に流石剛情我慢のアナンも辟易し、エリナの顔を見つめて稍不安の念に沈みある。母親は「キヤツ」と一聲悲鳴をあげた儘、

「お母アさま！ モ一度物を言うて下さいませ……エリナで御座います」

と死骸に取付き、あたり構はず泣き叫ぶ。アナンは今こそと、手早く捕繩を取出

し、エリナの首にひっかけようとする一刹那、俄に轟々ガタガタと凄じき物音聞え來たりければ、アナンを始め一同は驚き戸外に驅出す刹那強烈なる大地震起り、アナンを始め一同は生命カラガラ、轉けつまるびつ、常世神王の祠の前を指して、四這となり逃げて行く。

地震は益々烈しさの度を加へ來たる。エリナは母親の死體を抱へて外へ飛出さうとする途端、家はメキメキと音を立て、バサリと打ち倒れける。エリナは止むを得ず、身を以て逃れたるが、忽ち火を失ひ、エリナの家は火煙濛々として立上り、母親の死體は惟神的に火葬に附せられりぬ。上下動の激震は刻々に烈しく、エリナは松の木一株にシカと抱付き、目を塞ぎ、地震の歇むのを待ち乍ら、一心不亂に『國治立大神守り玉へ幸はひ玉へ……』と祈念をこらしける。……漸くにして地震は止まり、エリナはホツと一息し乍ら、ここに居つては又何時捕手の襲ひ來るやも計られずと、俄に國依別の宣傳使が戀しくなり、ヒルの都を指して一目散に走り行く。

ヒルの都を遠く見下ろせば、大激震の爲火災起り、火は天に冲し、空の雲迄眞

赤かに染そまり、所謂いはゆる雲くも燒やけ志し居ゐたりける。

（大正一一・八・一八 舊六・二六 松村眞澄録）

第三章 救世神（八六九）

天氣晴朗てんきせいらいらうにして 蒼空さうくう一點いつてんの雲翳うんえいもなく

士農工商しのこうしやうは各其業おのおものげふを樂たのみ 常世とこよの春はるを祝いはひつつ

或あるは娶めとり或あるは舞まひ歌うたひ 山河さんかは清きよくさやけく

樹木じゆもくは天然てんねんの舞踏ぶたふをなし 溪流けいりうは自然しぜんの音樂おんがくを奏そうし

鳥とりは梢こしゑに唄うたひ蝶てふは野のに舞まひ 花はなに戲たはむれ、嬉き々きとして遊あそべる

平安無事へいあんぶじの天地てんちの現象げんじやう さながら神代かみよの如ごとくなり

瞬またたく間うちに一天いつてん俄にはかに搔かき曇くもり 滿天墨まんてんすみを流ながせし如ごとく

洋々として紺碧の

空を翔る諸鳥は

忽ち地上に向つて

矢を射る如く落ち來り

大地忽ち震動し

天國淨土は忽ちに

地獄餓鬼道畜生道

修羅の巷と一變し

時々刻々に大地の震動

猛烈を加へ來る而已

山嶽は崩れ、原野は裂け

民家は倒れ橋梁忽ち墜落し

彼方此方に炎々と

天をこがして燃えあがる

空前絶後の大火災

身の毛もよだつ凄じさ

神の恵の天國も

天の下なる神人が

佞け曲れる魂や

醜の言靈重なりて

妖邪の空氣鬱積し

天地主宰の大神の

大御心を曇らせて

忽ち起る天變地妖

慎むべきは世の人の

耳に鼻、口、村肝の

心の持様一つなり

あゝ惟神々々

此れの慘状見るにつけ 高砂島の國人は

神の尊き御心を 完美に委曲に體得し

いよいよ茲に天地の 神の權威に畏服して

心を直し行ひを 改め神に仕へたる

尊き昔の物語 神のまにまに述べ立つる

あゝ惟神々々 神の御靈の幸はひて

遠き神代に住まひたる 高砂島の人々は

云ふも更なり天の下 四方の御國に大空の

きらめく星の数の如 生れ會ひたる人々は

昔の事と思ふまじ 心を清め身を清め

轉迷開悟の棊にと 心に刻みて惟神

神の御子と生れたる 我天職を盡せかし。

そもそも神は萬物に 普遍し玉ふ神靈ぞ

人は天地の御水火より 生れ出でたる神の御子

尊たふとき神かみの肉にくの宮みや

皇大神すめおほかみの神しん力りきを

發はつき揮たまし玉たまひて天あめ地つちを

開ひらかせ給たまふ司し宰さい者しやと

生うまれ來きたりし人ひとの身みの

其その天てん職しよくを自じ覺かくして

誠まことの神かみに服ふくせよや

旭あさひは照てる共とも曇くもる共とも

月つきは盈みつ共とも虧かくる共とも

假たとへ令だいち大だい地ちは震ふるふ共とも

山やま裂さけ海うみは涸かはく共とも

此この世よを造つくり玉たまひたる

神かみの御み前まへに眞ま心こころを

盡つくしまつりて人ひとたるの

努つとめを盡つくせ惟かむ神ながら

神かみは汝なんぢと共ともにあり

此この世よを造つくりし神かむ直なほ日ひ

心こころも廣ひろき大おほ直なほ日ひ

汚けがれ果はてたる人ひとの身みも

罪つみを見み直なほし聞き直なほし

宣のり直なほします天あま津つ神かみ

國くに津つ神かみ等たち八や百ひゃく萬まん

國くに魂たま神がみを始はじめとし

吾われ等らを親したしく守まもります

産うぶ土すな神がみを敬うやまひて

此この美うるはしき天あめ地つちに

暴ばう風ふう洪こう水すい大たい火くわなく

饑き饉きん戰せん争そう病びやう氣きなく

四海同胞の御神慮を 朝な夕なに省みて

神の依さしの天職に 盡させ玉へと祈れかし

あゝ惟神々々 御靈幸はひましませよ。

ヒルの都の楓別命の妹に紅井姫と云ふ容色並びなき、今年十九の春を迎へた美人ありけり。日暮シ河の水は大に減少し、數多の澆刺たる鮮魚は何れも下流のヒルの都附近に、大部分集まり來り、鶉飼の遊びは晝夜の區別なく、盛に行はれる。紅井姫の侍女として仕へまつれる、アリー、サールの二女は館の内事を司る。モリスと共に、一度此鶉飼の遊びを試みたく希望しゐたりしが、何と云つても勤めの身上、自由にならぬ悲しさに、折りある毎に紅井姫の前に出で、日暮シ河の鶉飼の最も壯快なる事を話し居たりける。紅井姫は侍女の面白さうな話に稍心を傾け、自ら兄の楓別命に向つて一日の清遊を許されむ事を請ひければ、楓別命は何時も深窓にのみ在りて、外出せざる紅井姫のたまたまの希望なれば、否むに由なく、快く之を許し、内事の司モリスを始め、アリー、サールの侍女を従へ、

其他四五の從者と共に、城外を流るる日暮シ河に鶉飼の遊びを許したりける。

茲に紅井姫は天にも昇る心地して、モリス以下を従へ、鶉飼の遊びを終り、數

多の鮮魚を生捕り、勝誇つたる面色にて城下に歸り來る折しもあれや、俄に天地

震動し、大地は上下左右に動揺し始め、家屋はベタベタと將棋倒しになり、紅井

姫の一行も亦市内の家屋に壓せられ、煙に包まれ見へずなりける。

火災は各所に起り、忽ちヒルの都は阿鼻叫喚の巷と化しぬ。斯かる所へ宣傳歌

を歌ひ乍ら悠々として進み來る一人の宣傳使は、國依別の宣傳使なりける。

兩側の家屋は街路に無慘にも滅茶々に倒れ、火は追々に前後左右より燃え來

る其物凄さ。忽ち煙に包まれて、咫尺も辨ぜざるに至れり。間近の足許に聞ゆる

女の悲鳴、國依別の宣傳使は、其聲を目當てに探り寄り、押へられたる柱を剛力

に任せて取り除き、何人かは知らね共、矢庭に背に負ひ、

天津神、國津神、國魂の神、産土の神、一時も早く此慘状を助け玉へ……

と祈りつつ宣傳歌をうたひ、煙の中をかきわけて、ヒルの都の中央に下津岩根の

岩石の布き竝べたる自然の要害地、楓別命の神館に思はず知らず走せ着きぬ。

國依別はヤツと胸を撫で卸し、女を背より其場におろし、ホツト息をつぎにける。女は細き聲にて、

「何處の方かは存じませぬが、危き所を御助け下さいまして、有難う御座います。全くあなた様は妾の命をお助け下さいました誠の生神様で御座いませう」

と感謝の涙を絞り、手を合せ伏し拜む。國依別は言葉靜かに、

「私は三五教の宣傳使で御座います。これの神館にまします楓別命様に一度お目に掛りたく、遙々尋ねて參る途中に於て、今の大地震害、思はずあなたを御助けしたのも、全く神様の御引合せで御座いませう。御禮をいはれては却て迷惑に存じます」

「妾は楓別命の妹紅井姫と申す者、日暮シ河の鶉飼遊びの歸るさ、思ひもかけぬ大地震の厄に遭ひ、命危き所、あなたに助けられた者で御座います。サアサア早く御通り下さいませ。兄もさぞ喜ぶ事で御座いませう」

「あゝ左様で御座いましたか。不思議な御縁で御座いますなア。併し乍ら……アレ御覽なさいませ。四方の山々は盛に噴火を始め、黒雲天を封じ、地は裂け、各

所より濁水を吐き出し、早くも低地は大洪水となり、人々の泣き叫ぶ聲は、刻々に高まりて参りました。私は是より球の玉の神力を以て、此天變地妖を鎮め、萬民を助けねばなりません。貴女はどうか早くお館へ御這入り下さいませ。後程参りますから……」

「左様ならばお先へ失禮致します。キツと御待ち申して居りますから、必ずお這入り下さいませや」

と云ひすて、館の内へ慌だしく驅入りにける。國依別は一心に、
「國の大御祖國治立命、豊國姫命、國魂の神、一時も早く此地異天變を鎮め、青人草は申すも更なり、一切の生物を御救ひ下さりませ……」

と念じ、全身の靈力を籠め、天の數歌を聲高々と宣りあげ、「ウーウー」とウの言靈を發射すれば、不思議や大地の震動忽ち休止し、諸山の噴火は従つて止り、噴出する洪水はピタリと止まつて、見る見る内に減水し始めたり。言靈の伊吹の力著しく、満天を包みし黒雲は拭ふが如く晴れ渡り、歡喜の太陽は煌々として中天に輝き、下界の慘状を憐れげに照し玉うた。

楓別命は高殿に上り、此惨状を救はむと、一心不亂に紅井姫の身の上の事など

は、スツカリ念頭より忘却して、只々天下萬民の爲に祈願をこらしつつありき。

斯かる所へ國依別の宣傳使現はれ來りて、天津祝詞や生言靈を圓滿清朗に宣り上げければ、一切の地異天變は言靈の神力に依りて、再び安靜に歸し、天日の光りを仰ぐに至り、萬民歡喜の聲、天地に充ち渡りける。ア、惟神、惟神、生言靈の神力、實に尊さの限りと云ふべし。

紅井姫の報告に依り、楓別命は驚喜し乍ら、慌だしく國依別が立てる前に來りて、其神力を感賞し、且つ、

紅井姫の命迄救ひ玉ひし事の有難さよ、御禮は言辭に盡し難し……」

と感涙に咽び乍ら、國依別を伴ひて、奥殿指して進み行く。

先づ第一に國依別の言葉を容れ、非常時の爲とて、蓄へおきたる五穀の倉を開き、楓別命、國依別、紅井姫を始めとし、秋山別、科山別は駿馬に跨り、城下を隈なく駆け巡り、大音聲にて、

市中の人々よ、一刻も早くヒルの城の神館に集り來れ。汝等一同を助け遣はさ

む！
」

と市中隈なく、泥濘の道を駆け巡りけるにぞ、柱に壓せられて半死半生となりし者、水に溺れて、早くも死亡せし者、火に焼かれたる者など、其惨状目も當られぬ計りなりけり。

楓別命は秋山別、科山別に命じ、俄に館内の男女をして炊き出しをなさしめ、日夜救済に努め、負傷者は鎮魂を以て之を治しやり、普く數多の人々に仁恵を施し、國依別の神力と楓別命の仁愛の眞心は洵く國內に喧傳さるるに至り。是より國依別は楓別命の勸むる儘に、暫く神館に足を止め、數多の國人に神教を新に傳へけるが、今迄ウラル教やバラモン教を信じ居たる人々も、此度の地異天變に依つて、三五教に救はれたるを心の底より打喜び、國內擧つて三五の誠の信徒となりける。

(大正一一・八・一八 舊六・二六 松村眞澄録)

(昭和九・一二・一六 王仁校正)

第四章 不知戀（八七〇）

國依別は楓別命の懇望に依つて、暫時此處に止まることとなりぬ。併し乍ら日暮シ山の岩窟に遣はしたるキジ、マチ兩人を始め、エスの消息を案じ煩ひ、如何にもして此館を立出で、一刻も早く彼の消息を探り、救ひ出さむと焦慮すれども、數多の人々は神の如くに尊敬して集まり來り、此度の大地震に依りて、負傷をなしたる人々を、或は輿に昇ぎ、或は戸板に乗せ、救ひを求めに來る者、日々幾百人ともなくありければ、國依別も此慘状を見棄てて立去る譯にも行かず、惱める人々に向つて鎮魂を修し、之を救ひつつ、思はず知らず時日を過ご志たりける。切て又、九死一生の難關を助けられたる紅井姫は、これより國依別に對して、一種異様の愛慕の念慮、刻々に雲の如くに起り來り、最早情火にもやされて胸は苦しく、ハートは鼓の波を打ち、熱き息をハアハアと吐き乍ら、まだ初戀の口に云ひ出しかねて、肩で息をなし、遂には思ひに迫つて、身は瘦衰へ、色青ざめ、病床に呻吟するに至りける。

楓別命は紅井姫の病氣を眺めて、大に憂慮し、如何にもして快癒せしめむかと、朝な夕な神前に祈願をこらし居たり。アリー、サールの侍女も、一刻も紅井姫の傍を離れず、晝夜心をこめて看護に盡すと雖も、姫の病は、日に重り行くのみにして施こす手だては無かりける。

國依別は姫の重病と聞き、鎮魂を以て病を救ひやらむと、ワザワザ病床に姫を訪ひけるに、姫は國依別の訪問と聞きて、重き頭を擡げ、顔を赤らめ乍ら、少しく俯伏目になり、盗むが如く、國依別の顔を眺め、微笑をもらし、愉快げに、兩手を合せて感謝の意を表しけり。

國依別は紅井姫の枕頭に端座し、天津祝詞を奏上し、天の數歌を謠ひ上げ、姫に向つて慰安の言葉を與へ乍ら、しづしづと此場を立出で、與へられたる吾居間に歸りて、再び神に祈願をこらし居るこそ殊勝なれ。

楓別命に仕へて信任最も厚く、數多の信者の人望を集めたる秋山別は、紅井姫の色香妙なるに心を寄せ、日に日に募る戀慕の心に胸をこがし、機會ある毎に、姫の歡心を買はむと、心を配りつつありき。

又内事の司たるモリスは紅井姫に接見の機會多きに連れて、いつしか姫の美容に心を蕩るかし、將來紅井姫の愛を一身に集中する者は、吾れならむと、深くも心中に期待し居たり。故に、此度の姫の重病につき眞心の限りを盡し、其歡心を買はむものと、モリスは内事の勤めをおろそかにし、暇ある毎に、病氣見舞や看護を口實に、姫の寢室を訪ふを以て、唯一の神策として居たり。

一方秋山別も同じ思ひの戀慕の情火消し難く、見すばらしく瘦衰へたる紅井姫の寢室を、朝夕何時となく尋ね來りて、眞心のあらむ限りを盡し、姫が全快の後は一日も早く、合衾の式を擧げむものと、心中深く期待しつつありける。

然るに國依別の此館に來りしより、紅井姫が秋山別に對し、又モリスに對する態度は、どこともなく冷やかになりしが如く思はるるより、二人は煩悶の淵に沈み、如何にもして姫の信用を恢復せむかと、心の中の曲者に驅使されて、巧言令色追従の限りを盡すこそ可笑しけれ。

紅井姫は最初より、秋山別、モリスに對し、只普通の教の道の役人、又は内事の用を勤むる取締として、優しく交際してゐたるのみにして、別に此二人に對し、

夢にも戀愛の心は持たざりける。されど二人の男は、紅井姫の優しき言葉を聞く度に、吾れを愛するものと思ひひがめ、三國一の花婿は秋山別を措いて、他に適當の候補者はなしと、自ら自惚鏡に打向ひ、鼻を蠢かし、當てなき事を頼みとして日を暮しつつありき。亦た内事司のモリスも同様に、將來の紅井姫の夫はモリスならめと、自ら心に定めて、吉日良辰の一日も早く來らむ事を期待しつつあり志なり。

秋山別は此頃モリスの姫に對する態度の何となく怪しげなるに、心を痛め、法界悋氣の角を生やしかけたるが、モリスも又秋山別の姫に對する態度の目立ちて親切なるに心を苛ち、戀の仇敵として、油斷なく秋山別の行動を監視しつつありき。而して秋山別は侍女のアーリを取入れ、藥籠中の者となし、モリスは侍女のサールを取入れ、吾藥籠中のものとなし、互に其輸贏を争ひつつ、祕かに愛の競争を續けみたるぞ面白き。

斯かる所へ、天下の神人活神と尊敬せられたる國依別命、紅井姫の九死一生の危難を救ひてより、姫の信任日を逐うて厚くなりければ、二人の心中は常に悶々

の情に堪へかね、國依別の缺點を探り出し、楓別命の教主を始め、紅井姫の前に曝露して、其信任を傷つけ破らむと、二つ巴の兩人は戀の炎を燃やしつつ、巴の如く相互に暗々裡に弾劾運動の準備に着手しつつありき。されど國依別は素より女に對し、少しも執着心なく、又紅井姫に對しても、怪しき心は毫末も持ち居らず、それ故に國依別は、何の憚る所もなく、只姫の大病を救はむ爲に心の底より案じ過ごして、神に祈り、屢病の経過を探るべく、姫の寢室を、晝となく夜となく訪れたるなり。

されど國依別の此行動は、戀に囚はれたる瘦犬の秋山別、モリスの目には、非常なる苦痛を感じ、遂には仇敵の如く見做すに至りたりける。

折柄玄關に訪るる一人の女あり。モリスは忽ち吾居間に招いて、其來意を尋ぬれば、女はやや愧らひながら言志とやかに、

「三五教の宣傳使國依別様は、御館に御出で御座いますか？ アラシカ峠の麓からエリナと云ふ女が訪ねて参りましたと、若しお出ならばお傳へを願ひます」
モリス心の内にて、

「ハ、ー、此奴は國依別のレコだなア。良い所へ来て呉れた。モウスウ祕密が分つた以上は、何程紅井姫様が國依別に御熱心でも、女があると聞けば、千年の戀も一度に醒めるだらう。一つ甘く調子に乗せて、腹の底を探つてやらう……」
と決心し愛想よく、

「それはそれは能う訪ねて来て下さいました。大變な大地震で御座いましたが、御宅は大した事は御座いませぬかな」

「ハイ有難う御座います。あの大地震で小さい乍ら住家は倒され焼かれ、一人の母は地震と火事の爲に無くなつて了ひました。實に不運な女で御座います」
と早涙含む。

「それは氣の毒な事でしたなア。御察し申しますよ。併し乍ら、老人と云ふ者は何れ先へ死ぬものです。一番芽出たい事と言へば、ぢい死に、婆死に、爺死に、嬢死に、子死に孫死と申しまして、こんな芽出たい事はないのですよ。先に死ぬべき者が先に死ぬのは當然、老人が後に残り、若い者が先に死にて御覽なさい。年が老つて脛腰が立たぬやうになり、尿糞のたれ流しと云ふやうな慘酷な目に會

いけれど、二人の奴が邪魔になり、用を拵へ、まいてやつた……と云ふ様な……
そこは要領宜しくやつたのでせう。私は斯う見えても、そんな事に粹の利かぬ男
ぢやありません。どんな御取持でも致しますから、ハッキリと貴女の御嬉しい芝
居の顛末を話して下さいな。其都合に依つて國依別さまへ御取次を致しますから

……

「決して左様な関係は御座いませぬが、あの宣傳使様の仰有つた御言葉を思ひ出
し、御神徳を慕つて遙々此處まで参りましたので御座ります」

「ハ、ハ、ハ、ハ、一口仰有つた御言葉を思ひ出して慕うて來たと云はれましたなア。
蜜のような甘い言葉でしたらう……コレ、エリナ、私は是れからヒルの都へ往て
來る程に、お前と私と斯うなつた上は、旭は照る共、曇る共、月は盈つ共虧くる
共、假令大地は沈むとも、お前の事は忘れやせぬ、二世も三世も先の世かけて、
切つても切れぬ誠の夫婦、假令身は東西に別れて居つても、魂は尊いお前の側……
：ヘン、なんて甘つたるい事を言つたのでせう。お羨ましく御座いますワイ。あ
なたも中々おとなしさうな顔して、随分やりますな。陰裏の豆でも時節が來ると

花が咲き初めますからなア、アハ、ハ、ハ、

「さう、ぢらさずと御頼みですから、早く取次いで下さいませ」

「取次がぬ事はないが、併しお前さまに取つては、此間の地震よりも、大火事よ

りもビツクリなさる事が出来て居りますよ。命迄はめこんだ國依別さまには、此

お館の名高い紅井姫さまが、ゾツコン惚込んで戀病を煩ひ、國依別さまに朝晩目

尻を下げて涎をくり、それはそれは見られた態ぢやありません。そして、姫様

も姫様ぢや、……お前さまのやうな、一寸立派な奥さまがあるにも拘はらず、人

の男に惚て、戀病を煩ふなんて、本當に怪しからぬぢやありませんか。……コレ、

エリナさま、お前さまも一人前の女ぢやないか。のめのめと大事の夫を世間見ず

のお嬢さまに占領せられて、如何して女子の意地が立ちますか。サア私が案内し

て上げるから、姫さまのお部屋に立入り、國依別さまの胸倉をグツと取り思ふ存

分不足を言ひなさい。若しも外の奴が寄つて来て、亂暴者だとか何んとか云つて

取押へようとしよつたら、内事の司をして居る私がグツと抑へて、何事も言はさ

ぬよつて、一つ大騒ぎをやりなさい。さうすれば如何に惚たお姫さまでも愛想を

つかし、國依別さまを思ひ切つて返して呉れるに違ない。是が六韜三略の兵法だ。サア何よりも決心が第一だ。直接行動に限りませえ。……何ぢやお前さま、肝腎の夫を取られ乍ら、氣樂相な顔して笑うてゐると云ふ事があるものかい。さういふ薄野呂だから、大事の男を取られて了うのだよ。犬でもケシをかけねば猪に飛びつかぬものだ。まだ私のケシ掛けようが足らぬのかいな」

「ホ、ホ、ホ、あなたのおつしや仰有る事は大變に混線致して居りますよ」

「何分自轉車や自動車の交通頻繁の爲、電話線に響くと見えて、少々混線して居りますワイ。併し混線と云つたら、國依別さまの事だ。お前に對してもまだ幾分未練はあらうし、お姫さまに對しては命を投出して苦しいと云ふ惚け方、そこへ向けて、秋山別と云ふ戀の強敵が現はれて居る。まだ外に二人……競争者がある。随分混線したものだ。其混線序に、お前さまが口から火を吹き、角を生やし、鬼か蛇になつて、お姫様の部屋へ飛び込みさへすれば、私の望みもオツトドッコイ、お前の望みも成功すると云ふものだ、サア早く決心の次第を聞かして下さい」

「そんな事仰有らずに、どうぞ會はして下さいなア」

「會はして上げたいは山々なれど、自分の男を人に取られて、平氣で居るやうな腰抜には能う會はしませぬワイ。どうぞ歸つて下さい、左様なら……」

と一閒に隠れようとする。エリナはコリヤ一通りでは取次いで呉れぬと心に思うたか、俄に聲を變へ、

「エー残念やな、残念やな、残念やな、大事の大事の可愛い男を、人にムザムザ盗まれて、私も女の意地、コレが黙つて居られうか。これから奥へふみ込んで、國依別さまのたぶさをつかみ引ずり廻し、恨みの數々述べ立てて、姫さまにもキツイ御禮を申さなおかぬ」

と地團駄をふみ出した。モリスはシテやつたりと引返し、

「ヤア天晴れ天晴れ、あなたの武者振り誠に勇ましく御座る。サア是よりモリスが先陣を仕る。天晴れ、紅井山の戰鬥に功名手柄を現はし、國依別を奪ひ返し、一時も早く凱歌をあげて、ヒルの館を立出でなされ。然らば御伴仕りませう」
と大手を振り乍ら、

「サア古今無雙の女豪傑エリナさま、モリスが後に従つて十分決心を定め、鉢巻の用意をして、ドシドシと足音高くお進みあれ」
と先に立つて、姫が病室へと進み行く。

(大正一一・八・一八 舊六・二六 松村眞澄録)

(昭和九・一二・一七 王仁校正)

第五章 秋鹿の叫(八七一)

紅井姫は命にも代へて戀ひ慕つて居た初戀の國依別に介抱され、其嬉しさに病氣は段々と軽くなり、殆ど全快に近付いた。紅井姫はまだ十九才の花盛り、國依別は早くも四十の坂を三つ四つ越してゐた。されど球の玉の神徳にてらされて、元氣益々加はり、血色よく、一見して三十前後の若者とより見えなかつた。紅井姫は侍女を遠ざけ只一人、心淋しげに一絃琴を弾じ、心の丈を歌ひ居る。

天と地との水火をもて

生まれ出でたる人の身は

如何でか神の御恵み

蒙らずしてあるべきや

秋野にすだく蟲の音も

木々に囀る百鳥の

長閑な聲もをし並べて

戀を語らぬものぞなき

戀路に迷はぬ者あらむ

心の底の奥山に

清く照りはふ紅井の

紅葉の色に憧がれて

妻戀ふ鹿もある世の中に

國依別の神さまは

どうして斯くも情ないぞ

此方が思へば先方の方で

思ひ返さぬ戀の暗

迷ふ吾らの苦しみを

折りある毎に打明けて

語らむものと思へ共

女心の恥かしく

汝が御身を思ふとは

思ふ人には思はれじと

思ふは誰を思ふなるらむ

あゝ惟神々々

結びの神の幸はひに

紅井姫が眞心を

國依別の御前に

夢ゆめになり共とも知らせたい

遠とほくまはして知しらせ共ども

巖いはほの如ごとく頑ぐわんとして

犯をかしがたなき其そのこころ心

汝なが身みの爲ためには吾わがいのち命

屍かばねを曝さらす世よあり共とも

汝なれが命みことの御みくち口くちより

うつさせ玉たまへ紅くれなる井ひめ姫が

知しらぬ顔かほなる恨うらめしさ

執しふ念ねん深ぶかくも附つけ狙ねらふ

内ない事じつ司かさのモリスまで

秋しゅう波はを送おくる厭いやらしさ

生いのち命のちかけての紅くれなる井なるの

少すこしも響ひびかぬつれなさよ

目めひき袖そでひきいろいと

野の山やまの諸もろ木きか川かはの石いしか

齒はぶし節しも立たたぬ國くに依より別の

益ます々ます募つるは戀こひの意い地ぢ

假た令と野の末すゑ山やまの奥おく

などか厭いとはむ一ひとことの

優やさしき言こと葉ばの花はなの色いろ

このいじらしき眞ま心こころを

それひきかに引ひき替かへ朝あさ夕ゆふに

厭いやな男をとこの秋あき山やま別わけや

言こと葉ば巧たくみに言いひ寄よりて

戀こひしき人ひとは知しらぬ顔かほ

吾わが言こと靈たまも木き耳みみの

金きん勝かつ要かね大おほ神かみの

御靈幸はひましまして 添ひたく思ふ國依別の

縁を結ばせ玉へかし うるさき二人の戀心

一日も早く皇神の 尊き御稜威を現はして

思ひ切らせて玉へかし あゝ惟神々々

男と生れ女子と 生れ來るも神の世の

深きえにしのあるものぞ 今に妻なき國依別の

神の司よ紅井姫が 清き心の初戀を

叶へて汝と吾と二人 國魂神の御前に

手に手を取つて潔く 鴛鴦の契の禮參り

一日も早く片時も 思ひを叶へ玉へかし

あゝ惟神々々 御靈幸はひましましてよ

と歌ひ終り、一絃琴を横に置き、木茄子の皮を剥き、
一口喉をうるほし乍ら、又
もや戀に惱みつつ、雙手を組み溜息をつき居たり。
斯る所へ、國依別は數多の

人々に鎮魂を施し、稍手すきになつたのを幸ひ、紅井姫の居間に休息がてら入り来り、

「紅井姫様、確に一絃琴の音が聞えて居りましたが、随分お上手で御座いますなア。どうぞ私にも聞かして下さいませぬか？」

此言葉に紅井姫は、最前の歌を聞かれたのではあるまいかと胸を轟かせ、忽ち面部をパツと紅の色に染乍ら、

「ハイ妾の手慰びを残らずお聞きになりましたか？」

と恥かしげに俯むく。國依別は何げなう、無雑作に、

「イ、工承はりませぬ。少しく手すきになりましたので、御機嫌を伺はふと思つて、長廊下を参りますと、あなたの御居間に琴の音が聞えて居ますので、どうぞ一つ聞かして頂きたいと思ひ、そこ迄参りますと、早くもお琴の音は止まりました。残念な事を致しましたよ。モ一息早く伺へば、妙音菩薩の音楽が聞かれる所で御座いましたに」

紅井姫は、

「ホ、ホ、ホ、」

と袖に顔を當て、恥かしげに笑ふ。

「姫さま、永らく御厄介に預りましたが、明日は、お暇を頂戴して歸らうと存じます。就ては明朝早くなりますから、あなたの御休眠中にお目をさましてもなりません。ませぬから、是きりで暫くお目にかからないとも分りませぬ。ここで明日の御別れの御挨拶を致しておかうと存じます」

紅井姫は俄に顔色を變へ、

「エ、何と仰せられます。明日御歸りとは、そりや又餘りぢや御座りませぬか。」

妾がこれ丈……」

「永らく御親切に預りましたが、是から、ハルの國を渡りウツの國へ參り、言依別命様に會はなくてはなりません。それ迄に二三人の男を助けねばならぬ事が御座いますので、非常に心が急ぎますから、是非々々明日は出立を致さねばなりません。せぬ。永らく懇意に預りましたが、生者必滅會者定離、會ふは別れの始めとやら、どうぞ是迄の御縁と思召して下さいませ、貴女の御健全な様に日に日に御祈りを

致いたしますから、御病氣ごびやうきの事ことなぞ、必ず御心配ごしんぱいなさらない様に頼たのみます」

紅井姫くれないひめは「エ、」と云いつた限り、其場そのばに驚おどろいて倒たふれむとし、忽たちまち目は眩くらみ、耳みみ

は早鐘はやかねをつき心臓しんざうの鼓動こどう烈はげしく、不安ふあんの状態じやうたい現あらはれ來きたる。國依別くによりわけは……ハテ困こま

つた事ことが出來できたわい……と稍心配やしんぱいして居ゐる。紅井姫くれないひめは恠こらへ切きれなくなつたと見みえ

「ウン……」と一聲ひとこゑ其場そのばに悶絶もんぜつして了しまつた。國依別くによりわけは驚おどろいて、直ただちに、姫ひめの手てを取と

り、指先ゆびさきより息いきを吹ふきこみ、いろいろと介抱かいほうの結果けつくわ、漸やうやく姫ひめは正氣しやうきづきぬ。

「お姫様ひめさま、お氣きが付つきましたか。マア結構けつこうで御座ございました。私わたくしも大變たいへんに心配しんぱい致いた

しましたよ。何事なにことの御心配ごしんぱいがお有ありなさるか知しりませぬが、世よの中なかは如何どうしても、

人間にんげんの思おもふ様やうには行ゆくものではありませぬ。何事なにことも神様かみさまの御心みこころの儘ままによりならな

いものです。例たとへば夫婦ふうふの道みちだつて、添そひたひ添そひたひと思おもうてゐる女をんながあつて

も、神かみの御許おゆるしがなければ添そう事は出來できず、嫌きらいでならない女房にようぼうを持もつて、一生いっしやう

を不愉快ふゆくわいに暮くらす者ものもあり、又また好きな者もの同志どうしが夫婦ふうふになり、一時いちじは非常ひじやうに樂たのしく暮くら

して居ゐた者ものが中途ちゆうとに邪魔じゃまが這はい入り、障害しやうがいが出來できなだして、破鏡はきやうの歎なげきを味あぢはふ者もの

も御座ございます。それだから人間にんげんは到底たうてい自分じぶんの思おもふ様やうにならないものだと思おもつて居を

れば、何事も諦めが付くもので御座います』

紅井姫は恨めしげに國依別の顔を見つめ、何か云はむとして口籠るものの如く、上下の唇をビリビリと震はせぬ。

國依別は紅井姫の背を撫でさすり、いろいろと慰めぬ折しも、俄に足音高く、隔ての襖を靜に荒く引あけて、又ツと首を出した秋山別は、

「ヤアお樂みの所へ、行儀も知らぬ不作法者がやつて参りました、何とも早面目次第も御座いませぬ。併し乍ら國依別さま、お前さまは誰に斷つて姫様の御居間

へお越しになつたのですか。御病氣なれば兔も角も、此頃は最早全快遊ばし、お前さまの御祈念を御願する必要もなくなつた今日、何の爲、姫様一人の居間へ御

出でになり、其上お手を握り、背を撫で、何と云ふ不作法な事をなさいますか。不義は御家の御禁制、サアサア、此秋山別が現場を見着けた上は、如何に御辨解

をなさらうとも、承知仕らぬ。今日限り此館をトツトと退去なされ。ヒルの館の總取締秋山別が、職名に依つて申付けますぞ』

「これは心得ぬあなたの御言葉。國依別があなたの目からは不義者と見えますか

ナ

「見えるも見えぬもない、現に今姫様の御體に手をさへたぢやないか」

「コレ秋山別、人様に向つて、さうズケズケと御無禮な事を申す者でない。妾が

今急病を發し、苦みて居た所を通りかかつて苦悶の聲を聞き、助けに来て下さつ

たのだよ。どうぞお前も疑を晴らして御禮を云うて下さい」

「何とお姫様、あなたも此頃は随分旅の方になられましたねえ。國依別さまのお

仕込で、イヤもう秋山別もあなたの言靈には、へ、閉口致しますすワイ」

「コレ秋山別、お前は妾を足袋の型と今言つたが、そりや又如何いふ譯だい。知

らしてお呉れ」

「中々此頃はお姫様もお口が上手にお成り遊ばし、御辨解が甘くて足袋の型で中々

手に合はぬと言つたのですよ。アハ、ハ、ハ、」

「秋山別さま、必ず御心配下さいませ。國依別もいよいよ明日より出立致しま

すから、何分姫様もお弱い體、どうぞ氣を付けて上げて下さいませ」

「仰せ迄もなく、晝夜の區別なく、姫様の御體を大切に保護を致す此秋山別、御

注意は御無用で御座います」

と憎々しげに言ふ。

「いよいよ明日は國依別様、お立ちで御座いますか。餘り意地くねの悪い秋山別が、いつもあなたのお心を損ねまして、實にお氣の毒で申譯が御座いませぬ。是もヤツパリ妾の罪で御座いますから、どうぞ秋山別が悪いとは思召さず、妾をお叱り下さいませ」

「これはしたり、お姫さま、これ程親切に、身命を賭して貴女様の事計り思つて居る秋山別を、意地苦根悪い男とは、ちと聞えぬぢやありませんか。大方國依別

さまに入れ智慧をして貰ひなされたのでせう」

「其様な御無禮な事を云つてはなりません。何と云つても、妾は國依別さまが命がけの好きなお方、お前はゲチよりも嫌ひだよ。總取締の役であり乍ら、お道の方はそつち除けにして、妾の側計り、間がな隙がな、厭らしい目附をしてお出でだから、妾も穴でもあれば、お前が来る度に、這入りたい様な心持がして、病氣が段々重くなる計りだよ。それで兄さまに一伍一什を申上げたら、今に秋山別を

放り出して、外の者と入れ替へするから、暫く辛抱せよと仰有つたよ。モウ斯うなつては仕方がないから、包まず隠さず、露骨に言つて上げるからお前も良い加減に諦めたが良からう。女の部屋へ男の来るものではない。サア早く彼方へお行き、御用が支て居るぢやないか」

「チヨツ、エ、仕方がない、何程親切を盡しても、私の心は汲み取つて紅井姫かなア。ナニ此處を追出されるのなら、モウ破れかぶれだ、戀の叶はぬ意趣返しに、一つ國依別のドタマをかちわつて、恨を晴らしてやらう」

と云ひ乍ら、傍の火鉢を取るより早く、國依別目がけて打つける。國依別はヒラリと體をかはし、

「アハ、ハ、ハ、危ない危ない、秋山別さま、姫さまのお言葉を眞に受けては可くないよ。口で悪言うて心でほめて、蔭の惚氣がきかしたい……と云ふ筆法だから、安心なされませ。何と云つても國依別は明早朝ここをお暇せなくてはならないのだからなア」

秋山別は嬉しさに、

「國依別様、失禮を致しました。是も一時の狂言で御座いますから、必ず悪く取つて下さいませぬ。どうぞウーンとやられちや大變ですから、お腹が立ちませうが、どうぞそこは神直日大直日に見直し聞直し、宣り直して下さいませぬ」

「左様な事で腹の立つ様な國依別では御座いませぬ」

「どうしても、あなたは可憐な私を捨て、明日お立ちで御座いますか？」

「ハイ、折角お馴染になつて、實に残り多う御座いますが、神界の御用が急ぎますから、今晚は楓別命様にトツクリと事情を申上げ、お暇を頂戴致す考へで御座います」

紅井姫は「アツ」と叫んで又もや其場に打倒れ、前後不覺に陥りにける。

(大正一一・八・一八 舊六・二六 松村眞澄録)

第六章 女弟子(八七二)

此亂癡氣騒ぎの最中に、意氣揚々としてモリスは國依別の居間を尋ね、姿の見えざるに、的切り此奴は紅井姫の居間に侵入し、脂下つてゐるに相違ないと、エリナを伴ひ、足音高く、現はれ來り、ガラリと襖を引あけて、

「國依別様、お前様の女房がはるばる尋ねてお出になりましたよ。サアどうぞトツクリとお楽しみなさりませ」

「ヤア、エリナ殿か、あなたのお母アさまは何うなりましたか。日々御案じ申して居りました」

「ハイ有難う御座います。とうとう母はあの大地震に亡くなつて仕舞ました。今は、父は御存じの通り、日暮シ山に囚はれ、たよる所もなき女の一人身、あなた様のお後を慕ひ、お世話に預りたいと存じまして、茲まで尋ねて参りました。どうぞ先日の御無禮をお叱りなく、憐れな妾、何卒お助け下さいませ」

モリスはもどかしげに、

「コレコレ、エリナさま、そんな他人行儀の事を云ふに及ばぬぢやありませんか。お前さま……ソレ私の前で雄健びしたように、ここで一つ賣り出さぬかいな。ヤ

せ
」

「エ、汚らはしい！」

と今迄性念を失つて居たと思つた大病人に、力一杯横腹あたりを、肱鐵砲で打たれ、肋の三枚目をしたたかやられて「アツ」と其場に目を剥いて倒れて了つた。

國依別は驚いて、

「コレコレお姫様、そりや餘り亂暴ぢやありませんか？」

「國依別さま、あなたは妾を騙しましたねえ。獨身ぢやと仰有つたが、現に立派

な奥様が訪ねて御座つたぢやありませんか。エ、残念ぢや口惜しい」

と齒切をかむで狂ひまはる。秋山別は紅井姫の體をグツと抱へ、

「モシモシ姫様、さう荒立ちなさつてはお體に障ります。どうぞ氣をお鎮めなさ

いませ。世の中は廣いものです。男の數も決して一人や二人ぢや御座いませぬ。

そんな氣の狭い事を仰有るに及びませぬ。あなたに適當な男が此お館にも一人や

半分は居ますから、御世話を致します。どうぞお鎮まり下さいませ」

「エ、お前は秋山別か、又しても又しても好かぬたらしい、震ひが来る、退いて

お呉れ！」

と云ひ乍ら、かよわき手に拳骨を固め、力一杯鼻つ柱を擲りつける。秋山別は不意に鼻つ柱を打たれ、目から火を出し乍ら、ヨロヨロヨロとよるめき、モリスの頭の上にドスンと倒れた機みに尻を下せば、モリスは夢中になつて、秋山別の鞆丸を力一杯握りしめ、

「コリヤ國依別、貴様は女房のある身を持ち乍ら、神様の御規則に背き、箱入娘の姫様を誑らかしチヨロまかして、風紀を紊す大罪人、サア此玉さへ抜けば、發情は致すまい。モリスが、鞆丸割去術でも施して去勢してやらうか」

と一生懸命に固く握りつめる。秋山別は眞青になつて「ウン」と云つたきり、ふん伸びて了つた。

エリナ姫は氣をいらち、

「モシ國依別さま、どうかしてやつて下さらぬと、息が止まりは致しませぬか」
國依別は、

「さうですなア」

と云ひ乍ら、モリスの手を指一本一本力を入れて放させた。秋山別は漸くに氣が付き、呆け面してポカンと口をあけて紅井姫の顔を恨めしげに眺めて居る。

「あのマア厭な男、妾の顔に何ぞ付いて居りますか？」

「ハイ、何だか知りませぬが、男の顔がひつついてますワイ。それもクの字が一番ハツキリ現はれ、つぎにアの字が現はれて居りますが、クの字は段々と色が黒くなり、アの字が赤く花の様に現はれかけました。あのクの字の黒い事わいの」

「又しても厭な事を云ふ男だナ。サア早うあちらへお行き！汚らはしい、アリーは居らぬか、サールは何處ぞ、早く箒を持って来てお呉れ」

次の間に息をこらして控えてみた二人の侍女は、箒と塵取を持って現はれ、跪いて姫の手に渡せば、姫は手早く其箒を取り、第一に秋山別に向ひ、

「エ、煩雜い男奴」

と云ひ乍ら狂人の如く髪ふり亂し、目を釣りあげ所構はず打据ゑたり。モリスは、
「コレコレ姫様、そんな亂暴をなさつては可いませぬ」

と立あがるを、姫は、

「ナニ此鞆丸掴み」

と云ひ乍ら、又叩きつける。二人は流石に手向ひもならず、コソコソとして吾居間に引下り行く。

「お前さまは國依別さまの御家内でせう。紅井が永らく御厄介になりました、さぞお待兼でしたらう。サア大事の婿さまを伴れて、勝手にお歸りなさいませ」

「これはしたり姫様、そりや大變な考へ違ひ、此方はアラシカ山の山麓に御座るウラル教の宣傳使エスと云ふ方の娘さままで御座いますよ。フトした事から途中にお目にかかり、二三日御世話になりましたもの、獨身主義の國依別に、女房があつて堪りますか」

「あなたは世界を股にかけて御歩き遊ばす宣傳使様、うち見る島の先々、搔き見る磯の先おちず、若草の妻を至る所にお持ち遊ばし、神生み、御子生みを遊ばす丈あつて、随分巧に言靈をお使ひ遊ばします。妾も最早觀念致しました。妾の戀は眞劍で御座ります。つまり九寸五分式の猛烈な戀なれば、最早あなたに見放された上は、此世に生きて何の楽しみも御座いませぬ。戀の病に悩み一生苦むよりも、

一層此場でああなたのお目の前で自害して相果てます。愚な女と一口にお笑ひ下さいませれば、それを冥途の土産に嬉しう歸幽致します」

と隠し持つたる短刀を閃かし、ガハと喉につき立てむとするにぞ、國依別は打ち驚き、直に飛びつき、姫の手を打叩きし其途端に短刀はバラリと前におちぬ。國依別は手早く短刀を拾ひあげ、熱涙を流し乍ら、

「あゝ困つた事が出来て来たものだワイ。これと云ふのも、若い時に女泣かせや、御家倒し、家潰しを數限りなくやつて来た其酬みだらう……モシモシお姫様、私は今こそ斯んな殊勝らしい顔をして宣傳使になつて居りますが、私の素性を洗つたら如何な姫様でも愛想をつかさるでせう。随分と女を泣かして来た代物ですよ。こんな男に心中立をしたつて直に放かされ、蝟の揚壺を喰はされますよ。どうぞこんな男の事は思ひ切つて下さいませ」

「自分の事を自分で悪く仰有る、其正直なお心が妾には震ひつく程好で御座います。果して此エリナ様があなたの女房でないのならば、是非茲に御逗留遊ばして、妾に神様の教を聞かして下さいませ。お氣に入らぬ者を無理に女房にして下さい

とは申しませぬ。お側においてさへ頂けば、それで満足致しますから……」

「それは困りましたねい。どうしても私にここを立たねばなりませんから、姫様のお側において頂く事は到底出来ませぬ。どうぞ思ひ切つて下さいませ」

「そんなら、あなたのお弟子として、どんな所でも厭ひませぬからお伴れ下さいませ。お願で御座います」

「どうぞこのエリナもお弟子として、あなたのお出で遊ばす所へお伴れ下さいませ。其代りに洗濯や針仕事は十分致しまして、御神徳が授かつたら宣傳も致します」

「あゝ仕方がありません。それならお二人共、一所に参りませう。併し乍ら紅井姫様、貴女は楓別命様のお許しを受けなくてはなりません。お許しさへあれば、何時でもお伴を致しませう」

紅井姫は、「ハイ有難う御座います」と機嫌顔。

是より國依別は楓別命に暇を告げ、二人の女を伴ひ、神館を後に日暮シ山の岩窟に向ひ、エス、キジ、マチの三人の生命を救ふべく夜の明けぬ中より準備爲し、

日暮^{ひぐら}シ山^{やま}指^さして男女^{だんぢよ}三人^{さんにん}進^{すす}み行^ゆく。

(大正一・八・一八 舊六・二六 松村眞澄録)

第二篇 紅裙隊^{こうくんたい}

第七章 妻^{つま}の選舉^{せんきよ}〔八七三〕

ヒルの館^{やかた}にゆくりなく
救^{すく}ひ助^{たす}けし國^{くに}依^{より}別^{わけ}は
特別^{とくべつ}待遇^{たいぐう}に思^{おも}はずも
あらぬ月^{つき}日^ひを送^{おく}りつつ
現^{あら}はれ來^{きた}りて諸^{もろ}人^{びと}を
楓^{かへ}別^{での}の懇^{こん}篤^{とく}なる

醜しこの魔風まかぜに襲おそはれて

紅井姫くれなゐひめの執拗しつえうなる

戀こひの情なさけの手に囚とらへられ

進退しんたいここに谷きはまりて

苦くみ悶もたゆる折柄をりからに

アラシカ山やまの麓ふもとなる

エリナの尋たづね來きたりしゆ

ヤツサモツサの騷動さうどうも

漸やうやく幕まくを切きり上げて

紅井姫くれなゐひめやエリナをば

教をしへの道みちの弟子でしとなし

館やかたの主あるじに慇懃いんぎんに

暇いとまを告つげて宣傳歌せんでんか

歌うたひて此處ここを立出たちいづる

一男二女いちなんにぢよの一行いっかうは

ヒルの都みやこの人々ひとびとに

行手ゆくてを塞ふさがれ一々いちいちに

病やめるを癒いやし助たすけつつ

知らず知らずししに日ひを重かさね

ヒルの都みやこを後あとにして

アラシカ峠たつげの山麓さんろくに

心こころ欣よろい々そ着つきにける。

サア姫様ひめさま、あなたは始はじめての御旅行ごりよかうと云いひ、是これから先さきは大變たいへんな急坂きふはんで御座ございま
すから、ボツボツとお登のぼり下くださいませ。國くに依別よりわけもお附合つきあひにゆるゆる登のぼりませう。

男をとこの足あしが先さきへ行ゆくと、知しらず知しらずに早はやくなるものですから、ここは最もつとも足あしの弱よわい貴女あなたが先さきへお登のぼり下くださいませ」

「足弱あしよわを御連おつれ下くださいまして、さぞ御迷惑ごめいわくで御座ございます。あなたの御言葉おことばに甘あまえ、駄々だだを捏こねる女をんなと御さげすみで御座ございます。私わたしも斯こうなつた以上いじやうは、決けつして妙めうな考かんがへは起おこしませぬから、御安心ごあんしん下くださいませ」

「此坂このさかをズツと登のぼりつめると、樟くすの大木たいぼくの森もりがあつて、そこには常世神王とこよしんわうの古ふるぼけた祠ほこらが建たつてゐます。どうかそこ迄までのほ登のぼつて休息きうそくをする事ことに致いたしませう」

エリナは言葉ことばやさしく、

「姫様ひめさま、随分ずいぶん険けはしい坂道さかみちで御座ございますが、私わたしは何時いつもここを通とほり慣なれて居をりますから、左程さほど苦痛くつうには存ぞんじませぬ。坂さかでさぞ御困ごこまりでせう。後あとからお腰こしを押おしてあげますから、後うしろへもたれる様やうにして御登おのぼりなされませ」

「ハイ、御親切ごしんせつに有難ありがたう御座ございます。今いまの處ところではどうなり登のぼれ相さうに御座ございますから、到底たうてい叶かなはない様やうになりましたら、どうぞ御世話おせわをお願いねがひ申まをします」

エリナは氣輕相きがるさうに、

「ハイ、何時でも押して上げます。キツと御心配なさいますなや」
と路々いたはり乍ら登り行く。

話變つて、常世神王の祠の建つた樟の大木の根に、ヒソヒソ話に耽つてゐる二人の男あり。

「オイ、モリス、馬鹿にしよつたぢやないか。今となればお前も俺も、同病相憐れむ連中だから、別に内訌の起る筈もなし、暗中飛躍を試みる必要もなくなつたのだから、どうかして無念晴らしに、二人の奴を此方の者にしてやらうぢやないか。アタ阿呆らしい、國依別の奴が來よつた計りで、俺達二人は免の字を頂戴し、今は殆ど野良犬の境遇だ。犬も歩けば棒に當るといふ事がある。一つ雪隠の火事ぢやないが焼糞で、ウラル教の本山へでも、甘く這入り込み使つて貰はふぢやないか」

「さうだ、貴様も戀の仇敵の國依別に肝腎の目的物をぼつたくられ、國依別の奴、二人の女を兩手に花と云ふやうな調子で、大きな面をして連れ出しよつた時のムカついた事、是が何うして鞆丸をさげとる男子として、看過する事が出來ようか

い。彼奴等三人は道々宣傳し乍らやつて来るのだから、何れ暇が要るに違ない。

併し此處へやつて來よつた位なら、此谷底へ國依別を矢庭につき落し、二人の女を自由自在に此方の要求に應じさせ、天下の色男は此通りだと云つて、あんな絶世のナイスやシヤンと手を引いて、天下の大道を闊歩したら、どうだ。さうなりとせなくては、腹の蟲が得心せぬぢやないか。併し後の喧譁を先にせいと云ふ事がある、甘く目的を達した上で、自分の女房に選定する段になつてから、選挙競争でも起ると大變だから、今の中に豫選でもやつて置かうぢやないか」

「豫選なんか俺は「ヨセン」わい、俺は紅井姫を女房にする特權が先天的に具備してるのだ。貴様はエリナを女房にすれば良いよ。彼奴だつて滿更捨てたものぢやないからなア。チツとばかり日に焼けてると云ふが、缺點位なものだ。中々スタイルには甲乙はないからのう、モリス」

「そんならお前がエリナのレコになつたら良いぢやないか。俺はどこ迄も初心を貫徹せなくてはならないのだ。紅井姫を女房にせうと思つて、どれ丈今迄骨を折つたか知れやしない。永らくの苦心を水泡に歸するのは、男子として忍ぶ可らざ

る恥辱だからなア、秋公あきこう」

「俺おれだつて貴様きさま以上に骨ほねを折おつたのだよ。そんなお添物そへもののエリナを鼻塞はなふさぎか何なンぞの様に差さ向けられてたまるものかい。貴様きさまのスタイルにエリナの方が能よく合あつてゐるワ。鳥からすの夫をつとに孔雀くじやくの女房にようばうとは、チツと無理むりだよ。孔雀くじやくは孔雀くじやく同志どうし夫婦ふうふになり、鳥からすは鳥からす同志どうし夫婦ふうふになれば、それこそ家庭かてい圓滿まんまん福徳ふくとく成就じゆうじゆう疑たがひなしだ。孔雀くじやくの俺おれは孔雀くじやくの女房にようばうを持つて、孔雀くじやく（不ふ惜じやく）身命しんめい的てき神界しんかいの爲ため活動くわつどうをするなり、お前まへはモリスだから、森もりに巢すを作るのは鳥からすにきまつてゐる。鳥からすの女房にようばうを持つて、オイオイカカア嬢かかむらや村屋むらや、腰こしもめ肩かた打うて、カアカアと氣樂きらく相さうに簡易かんい生活せいくわつをやるのも一寸ちよつと乙おつだぜ。

樂たのしさは夕顔ゆふがほだな棚したすずの下涼み

とか云いつて、平民生活へいみんせいくわつが最もつと理り想さつ的てきだ。提燈ちやうちんに釣鐘つりがね、釣合つりあはぬやうな女房にようばうを持つたつて、苦くるしい計ばつりだよ。第一だいいち教育けういくの程度ていどと云いひ、智識ちしきと云いひ、家柄いへがらと云いひ、雲うん泥でいの懸隔けんかくある女房にようばうを持つたうとするのが第一だいいち謬あやまつた了見れうけんだ。さうでなくても、男だん女ぢよ同權どうけんだとか、女權ぢよけん擴張くわくちやうだとか、新あたらしい女をんなの騷さわぐ世よの中なかだから、釣合つりあうた女をんなを持つ

が貴様の將來の爲だよ。俺は親密な友人として、貴様の將來の爲に、熱涙を呑むで忠告するのだよ、モリ公

ヘン、甘い事仰有りますワイ。其手は桑名の焼蛤だ。蛤からでも屋氣樓が立上りますよ。お前こそ屋氣樓的空想を畫いて、あんな高尚な御姫さまを自分の女房にせうなんて、餘り懸隔が取れなさ過ぎるぢやないか。チツとお前のサツクと相談して見い

コリヤ俺を何と心得てゐる。俺は秋山別と云つて天孫人種だぞ。貴様は土人ぢやないか。チツと身分を考へて見い

人種無差別論の高潮した今日、時代遅れな事を言ふない。そんなことで、世界同胞主義が何時迄も成就すると思ふか。是だけ社會は人種無差別論の盛なのを貴様は知らぬのか。どこ迄も昔の家閥を振りまはし、貴族面をしやがつて威張つたつて、昔なら通用するか知らぬが、文明開化の今日は、そんな古い頭は買手がな

いぞ。文化生活と云ふ事を貴様は何と心得とるか、秋公

ヘン、文化生活が聞いて呆れるワイ。今の奴の吐す文化生活と云ふのは、人の

女房と手を取り、キツスをして妙なダンスをやつたり、仕舞の果にや役者の部屋へ女房がへたり込んだり、お轉婆主義を發揮したり、爺はおやぢで良い氣になり、うちの女王さまは餘程新しいと云つて喜んでる風俗壞亂生活を云ふのだらう。そんな事で如何して社會の秩序が保たれるか。モリス、貴様の思想は餘程怪しいものだなア」

「そんなこたア、如何でもよいワ。サアサア、女房の選舉だ。早くやらうぢやないか。貴重な一票を何卒入れて下さいと云つて、戸別訪問をする譯にも行かず、被選舉人が二人選舉人が二人だから、自由選舉にしたらどうだ」

「そんなら俺は紅井姫を秋山別の妻に選舉する」

「俺は紅井姫をモリスの奥さまに選舉する、又俺の副守護神も同様、モリスの妻に紅井姫を選舉する、もう一票は本守護神も同様だ。サア三票と一票だ。お氣の毒乍ら、當選の榮を得まして有難う御座います。あなたは運動が足りないから、とうとう次點者になりましたねい。どうで秋山別だから、先方が【アキ】が來ました、イ【ヤマ】ア、【別】れて下さい秋山別さま……なんと云つて、秋波を

送おくつて紅井姫くれなゐひめだ。アハ、ハ、ハ、

秋山別あきやまわけは腹はらを立てた、「ナア二」と言いひ乍ながら、モリスの横よこつ面つらを鬼おにの蕨わらびをふり上げ
て、首くびも飛とべよと計ばかり擲なぐりつくれば、モリスは、

「ナアに喧譁けんくわか、喧譁けんくわなら俺おれも負まけはせぬぞ」

と鐵拳てつけんをふつて飛とびかかり、遂つひには組くン組くまれつ、一生いっしやう懸命けんめい格闘かくとうを始はじめ、夕暮ゆふぐれ

れの帳とほりのさがる迄まで力ちから一杯いっぱい血ちみどろになつて掴つかみ合あひ居ゐる。その所ところへ悠々いっいっとして一いち

男なんにぢよ二女にぢよは登のぼり來きたり、

「ア、此處ここが印象いんしやうの深ふかい常世とこよし神王せんわうの祀まつられた楠くすの森もりの祠ほこらだ。大分だいぶんに皆みなさま足あしも

疲勞くたびれたでせう。一つ立寄たちよつて休息きうそくせうぢやありませんか。都合つがふに依よれば、此森このもりで

一夜いちやを明あかし、新あたらしい日輪にちりん様の光ひかりを浴あびて日暮ひぐらシ山やまに立向たちむかふことに致いたしませう

よ」

と言いひ乍ながら國依くにより別わけは先さきに立たつて、森蔭もりかげに進すすむ。二人ふたりの女をんなも、同おなじく森蔭もりかげに靜しづかに

身みを横よこへて、疲勞くたびれた足あしをさすつてゐる。何なんだか暗くらがりでシツカリとは分わからぬが、

二ふたつの黒くろい影かげが「フーフー」と息いきを喘はずませ、上うへになり下したになり轉ころげて居ゐる。國依くにより

別は、

「ハテ不思議な者が居るワイ。山犬の子でも【ざれ】よつて居るのではあるまいか」

と足音を忍ばせ、側近く寄つて暗にすかし見れば、どうやら二人の男が喧嘩をして居るらしい。國依別は……此奴一つおどかして、此喧嘩を止めさしてやらう……と心の中でうち諾づき、俄に作り聲、落雷の様な大聲で、

「此方は、常世神王の祠に守護致す大天狗であるぞよ！ 汝不届き千萬にも此靈場に来り、喧嘩を致すとは怪しからぬ奴……待て、今此大天狗が其方等二人共、股から引裂いて、楠木の枝にかけ、烏にこつかしてやらうぞ！」

と唼なりつければ、二人は思はぬ天狗と聞いてパツと左右に離れ、大地に傷だらけの手を仕へ、血だらけの顔を俯むけ乍ら、

「ハイ、私は秋山別と申す者で御座いますが、一方の男はモリスと申す悪戯者で御座います。女房の選挙に付きまして、激烈なる運動を開始致しまして、遂には血を見る所まで参りました。今後は心得ますから、どうぞ股から引裂くの丈は御

勘辨を願ひます」

大天狗様、どうか、秋山別を能く御戒め下さいまして、紅井姫を思ひ切り、此モリスの女房に首尾よく渡します様にして下さいませ、これが一生の御願で御座います。それが叶はぬ様な事なれば假令引裂かれても構ひませぬ。此世に生てる甲斐が御座いませぬ。秋山別にはエリナを女房にしてやつて下さいませれば、三つ口に新粉、四つ口に羊羹で、本當に都合の良い縁で御座います」

どうぞ、私に紅井姫を御授け下さいませ。モリスはエリナで結構で御座います。さうして下さいませれば、天下は太平、無事長久疑なしで御座います」

國依別は可笑しさを詠へて、

其方の申す紅井姫、エリナの兩人はどこに居るか」

秋山別は聲を震はせ乍ら、

ハイ、三五教の馬鹿宣傳使の女殺しの後家倒し、家破りの國依別と云ふ、それは酢でも蒟蒻でもいかぬ悪い奴で御座いますが、其奴が二人の女を、アタ欲どしい、ひつさらへて、ヒルの都の神館を出立いたし、天下の色男はこんなも

のだい、兩手に花とは此事だ、二人の妻に手を引かれ黄金の橋を渡るとは、俺の事だと言はぬ計りに、そこらうるつき乍ら、やがてここへ登つて來るでせう。どうぞ天狗さま、國依別をグツとさらへて楠の上へ連れて上り、股から引裂いてやつて下されませ、これが一生の御願ひで御座います」

「其紅井姫と云ふのは、其方に對して戀慕の心を持つて居る女であるか」

「ハイ、何分おボコ娘の事とて、ハツキリとは申しませぬが、大抵意思を忖度する事は出來ます。キツと私に戀着して居るに相違ありません、一寸觸つてもピンとはねたり、三番叟の様に、あゝイヤイヤと肱を振りますが、私も若い時に見えが御座います。好きな人に袖でも引つぱられると、恥かしくなつて、一旦は厭相に見せて撥まはし、後からあゝあんな事をせなかつたら良かったに……と惜がつたことも御座いますれば、秋山別には十分に脈は御座います」

「モシ天狗様、秋山別の言ふ事は、アリヤ違ひます。自分一人きめてゐるので御座いますから堪りませぬワ。鮑の貝の片思ひ、長持の蓋で此方があいても向方が根つからあきませぬワイ。併しエリナなれば、どうにか斯うにか、天狗様が御紹

介下さいましたなれば、女房に厭々なるでせう。どうぞ神聖な一票を、天狗様、此モリスにお與へ下さいませ」

「さうして國依別を亡き者に致して呉れいと申すのか」

「ハイ、天則違反の男で御座います。鶏か何かの様に三羽番ひで天下をうるつきますと、第一神様の教の名を汚します。教の爲にも、秩序維持の上にも、最も必要な事だとモリスは信じます」

「それなら、此天狗が許して遣はずによつて、早く此坂を下つて行け。一足でも先に掴まへた者の女房にしてやらう。大天狗が是から守護を致して、掴まへた者の女房に喜びてなるやうに守つてやらうぞ。今三人連れにて此坂の三合目あたり迄登つて来て居る程に、サア早く行け、早い者勝ちだ。マラソン競争を致して決勝点を取つた者に紅井姫を【くれない】事なくくれてやる。次点者にはエリナ姫を與へてやる、一二三、ソラ行け……」

「ハイ有難う」

と二人は眞暗がりの中を、石ころをころがした様にガラガラと音をさせて坂道を

韋駄天走りに降り行く。

「アハ、何と面白い餘興を、神様から見せて頂いたものだ。……モシ御一人さま、どうでしたなア」

紅井姫はおづおづし乍ら、

「ハイどうも恐ろしうて、胸騒ぎが致しましたワ。マアマア天狗様が現はれて、甘く追ひ歸して下さいますして、こんな有難い事は御座いませぬ、國依別さま、あなたはどうおなりやしたかと思つて心配でしたワ。どうも御座りませぬでしたか」

「ホ、姫様、アリヤ天狗ぢや御座いませぬよ。國依別さまがあんな聲をお使ひになつて、甘く二人をまかれたのですよ。私は餘り可笑しうて臍がお茶を沸かしかけましたワ」

紅井姫不思議相な聲で、

「あゝさう、して又エリナさま、お腹に土瓶でも乗せておらしたの……」

「アハ、流石はヤツパリ深窓に育つたお姫さまだワイ。紅井姫様、皆うそですよ、餘り可笑しいから、一つ大天狗の聲色を使つておどし、まいてやつたの」

ですよ、アハ、ハ、ハ、

「どうもあなたはお人が悪いですな。そんな嘘を言つても神様の御咎めは御座いませぬか」

「人は見かけによらぬ者、今迄正直な國依別と思つてゐられた貴女は、さぞお驚きになつたでせう。酢でも蒟蒥でも、挺でも棒でも喰へぬ、スレツカラシの國依別ですからなア、アハ、ハ、ハ、」

「あなた、蒟蒥やお酢、デコ芋、棒芋などは御嫌ひで御座いますか。私は蒟蒥にお芋は大の好物で御座います」

「アハ、ハ、ハ、どこまでも可愛らしい御姫さまだなア」

「ホ、ハ、ハ、ハ、お優しいお方、私も姫さまの様な産な心になつて見とう御座いますワ」

「もしも二人の奴が後戻りをして來ると、又天狗が一骨折らねばならぬし、うるさいですから、ここを立去つて、モ少し往つた所で、適當な場所を考へて休息すること致しませう。エリナさま、姫様に氣をつけて、足許の辻らない様に手を

曳ひいて上げて下くださいナ」

「サアお姫ひめさま参まゐりませう」

と三人さんにんは雲くもの綻ほころびより、所々ところどころに星ほしの見みえてゐる暗やみの空そらをスタスタと頂上ちやうじやうめ目がけて登のぼり行く。流石さすがの高山かうざん、夜嵐よあらしザワザワとあたりの木きの枝えだをゆすり、何なんとはなしに、そこら中ぢゆうが物凄ものすごく感かんじられける。

(大正一一・八・一八 舊六・二六 松村眞澄録)

(昭和九・一二・一七 王仁校正)

第八章 人獸にんじう (八七四)

國くに依より別わけの宣せん傳でん使しは

紅こう裙くん隊たいを引いん率そつし

ヒルの城下じやうかを立出たちいでて

數多あまたの人の病ひといたづきを

鎮魂言靈の神術に

救ひ助けつ漸くに

ヒルの城下を後にして

アラシカ峠に差かかり

足竝弱き紅井姫

エリナの二人を伴ひつ

黄昏時に鬱蒼と

樟の木の茂りたる

神王の森に立寄りて

夜露を凌ぎ一夜さを

明かさむものと三人が

樟の根元に腰をかけ

息を休むる折柄に

暗の中よりフウフウと

怪しの聲は響き来る

暗の帳は深くして

確にそれと分らなく

山犬どもの「ざれ」合ひか

但は獅子の「いが」み合ひ

何か知らねど近よりて

調べて見むと星影に

すかして見れば此は如何に

思ひも寄らぬ荒男

揉みつもまれつ搦み合ひ

命カラガラ挑み合ふ

國依別は諾づいて

吾れは御山の大神狗

神王の森の守護神ぞ

不届き至極な聖場に

來りて喧譁をなげ致す

何れの奴か知らね共

首筋つかむで樟の枝に

股引裂いてかけてやる

覺悟致せと呼ばはれば

二人の男は驚いて

パツと二つに立別れ

両手を土につき乍ら

ヒルの館に仕へたる

秋山別と申す者

私はモリスと申します

女房の選挙につきまして

競走次第に激烈と

なつた揚句が此通り

誠に濟まぬ事でした

是れ是れモウシ天狗さま

紅井姫を私の

女房に與へて下さんせ

モリスの女房にやエリナ姫

これを與へて下さらば

天下は忽ち太平に

家庭の圓満目のあたり

何卒宜しう願ひます

語ればモリスは首をふり

イエイエもうし天狗さま

こんな男に紅井姫の

やうな美人は惚ませぬ

どうぞ私わたしに下くださんせ 彼かれにはエリナで十分じふぶんだ

宜よろしく御おさばき頼たのみますと 一心いっしん不亂ふらんに手てを合あせ

頼たのみ入いるこそ可お笑かしけれ 吹ふき出だす計ばかりの可お笑かしさを

チツと怵こらへて國くに依より別わけは 又またもや天狗てんぐの作つくり聲こゑ

アラシカ峠たつげを登のぼり來くる 二ふたり人の女をんなを競走きやうそうして

勝かつた者ものには呉くれてやらう 決勝點けつしょうてんに先着せんちやくの

勇士ゆうしに紅井姫くれなゐひめをやる 敗まけた奴やつにはエリナ姫ひめ

與あたへてやるから辛抱しんぼせよ 國くに依より別わけの神司かむづかきは

俺おれが守護しゆごして望のぞみの通とほり 谷たにの底そこへと放ほつてやらう

一ひ二ふ三みつつ早行はやゆけと 其掛聲そのかけこゑに兩入りやうにんは

先さきを争あらそひバラバラと こけつ轉まろびつ降くだり行ゆく

後あとに國くに依より別わけは高笑たかわらひ アハ、、アハ、、

エリナ紅井くれなゐお姫ひめさま 今宵こよひは實じつに面おも白しろい

餘興よきようを見みせて貰もらつたと 笑わらへば姫ひめは驚おどろいて

妾は胸がドキドキと 怖い思ひをしましたよ

あなた如何して御座つたか 本當に怖い天狗さま

先づ先づ無事で目出たいと 未通娘の愛らしさ

國依別は兩人を 伴ひ此處を立出でて

アラシカ山の山頂に 漸く登り傍の

森林さして忍び入り ここに一夜を明かしつつ

旭の光を浴び乍ら アラシカ峠の急坂を

西南指して降り行く あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ。

國依別は漸くにして日の暮るる頃、二人の足弱き女を勞はり乍ら、日暮シ河の丸木橋の畔迄辿り着いた。大地震の爲に橋はスツカリ墜落して了ひ、日暮シ河は滔々として濁水が流れて居る。止むを得ず、橋の袂の萱草の中に三人は一夜を明かす事となり、安々夢路を辿り居る。

夜中頃と覺しき頃、二人の女はふと目をさまし、ガサガサとそよぐ萱の葉音に戦き、目を据ゑて窺ひ見れば、二人の荒男あたりをウロウロ迂路つき乍ら、

「オイ、モリス、あの天狗、とうとう俺等を馬鹿にしよつたぢやないか。あの時に天狗に魅まれさへしなかつたら、今頃には甘く追ひついて、此方の者にして居る所だつたのに、なア本當に馬鹿を見たぢやないか」

「それでもあの時に天狗が現はれなかつたならば、俺かお前か、どちらか命がなくなつてゐるのだぞ。マアおかげで二人共命丈は助かり、安全に此處迄搜索に來られたのだが、こう暗くなつては最早進む事も出來ないワ。大方國依別外二人の女は、餘り遠くは行つて居るまい。日暮シ山の岩窟へは、何程コンパスに燃をかけても、足弱の二人の女が従いてをるのだから、到底到着して居る氣遣はないワ。やがて一時計りしたら月が出るから、一足でも先へ進まうぢやないか。キツと此川堤を行きよつたに違ひないぞ」

「さうだらうかなア。併し足を痛めて、此邊にすつこみて居やせまいかな。何だか人臭いやうな氣がするぢやないかい、モリ公」

「そりやお前の神経作用だよ。決してこんな所に居るものかい」

「アノ國依別と云ふ奴、どこ迄も癩に障る代物だから、何とかこらしめてやりた
いと思うのだが、直に鎮魂とか、言靈とか云よつて、非常な力を出しよるから、
一通りでは駄目だぞ。今度は甘く尾をふつて降参の體を装ひ、誠にすまぬ事を致
しました。今後はスツパリ改心致しまして姫様始め皆さまにお詫に出ましたと、
下から低う出て油斷をさせ、小股を掬うて、ドサンと引くりかへし、其上から土
足でギユツ　ギユツとふみチャクリ、腸を破つて了うのだ。其後は此方の者だ。
何と秋山別は妙案を出すだらう」

「妙案々々キツとウラル教から、軍師として招聘しに来るだらうよ。併し乍ら此
處で一つ選挙のしなをしをやらないと、又しても紛擾の種を蒔く様な事では互の
不利益だからなア」

「モウ、モリス、選挙は止めにせうかい。成功せない中から定めておいた所が仕
方がないぢやないか。それより願望成就の上、チヤンケン坊なつと、籤引なつと、
或は御神籤なつと、どんな方法でもあるから、其上の事にせうかい。今きまつて

了ふと、當選者の方は活動する楽しみがあるが、負た方は張合が無うて命がけの活動は出来ぬからのウ」

紅井姫は二人の話を聞いて慄ひ上り、エリナの體に喰ひついて息をこらし居る。エリナは俄に作り聲をし乍ら、萱の繁みに身を隠し、

「ホツホ、、、」

と力のない厭らしい聲で笑ひ出した。紅井姫はビツクリして、

「モシモシ姉えさま、勘忍して下さいな」

と泣き聲になる。

「姫さま、御心配なさいますなや。エリナが一寸化者の眞似して、彼奴等二人を追ひちらしてやるのですから」

「それでも、あなた、そんな聲をお出しになると、妾怖うて堪りませぬワ。貴女が化者の様に思はれてなりませぬもの」

「心配しなさるな。怖いこたありませんよ。向方を怖がらしてやりさへすれば良いのです。これからエリナは、チツと厭らしい事を云ひますから其積りで居て下

さい。キツと怖い事はありませぬからなア」

「それでもこんな怖い野原に寝てみますのに、まだそんな聲を聞かされては、髪の毛が縮むやうな気がして、怖くて堪りませぬワ」

「それ程怖ければ、エリナも止めておきませうかなア」

「どうぞ御頼みですから、厭らしい聲は出さぬやうにして下さい」と慄うてゐる。秋山別は小聲になつて、

「オイ、モリス、何だか妙な聲がしたぢやないか。氣分の悪い晩だなア。こんな所に鶯の鳴く筈もなし、ホ、ホ、ほんまに俺は氣分がカブラカブラして、足が根々々したよ。どうやら肝つ玉が洋行しさうだ、本當に氣味の悪い夜さだなア」

「ナアニ心配すな、アリヤ鳩の爺イだよ。野鳩がこの邊に寝てゐるのだが、年がよつて齒が抜けたと見え、あんな聲を出しよるのだよ」

國依別は最前から目をさまし、雙方の様子を聞きみたり。

「ハテ面白い、此奴一つおどかして、歸なしてやらねば、未通育ちの姫さまが、又怖がつて仕方がない」

と小聲こしゑに囁ささやき乍ながら、芒すすきの株かぶを力ちから一杯いっぱい、ガサガサガサと揺ゆつて見みせた。秋山別あきやまわけは肝きもをつぶしドスンと腰こしを下おろし、

「ギヤハ、ハ、ハ、抜ぬけた抜ぬけたア、一寸ちよつと來きて呉くれやい」

「何が抜ぬけたのだ」

「腰こしだ腰こしだ、どうしても歩あるけないワ。何なんだか怪體けたいな者ものが居ゐるぢやないか。昨ゆうべ夕たの天狗てんぐなら一寸ちよつとも怖こわい事ことないが、あんな厭いやらしい聲こゑを出だしよると厭いやらしくて仕方しかたがないワ、モリ公こう、お前まへも怖こわからふ」

「モリスは何なんとなく心淋こころさびしくなり來きたり、併しかし無理むりに空元氣からげんきをつけて、震ふるひ聲こゑを出だし、

「オイ、ア、ハ、ハ、秋山別あきやまわけ、ナ、ハ、何がそれ程ほど怖こわいのだ。天下てんか無雙むさうのヒーローがうけつ豪傑がうけつ、

「チャンチャハールのモリスさまが、ゴ、御座ござるぞよ。バ、化者位ばけものくらゐ、假令たとへ千匹せんびきや萬まん

「匹びき出でて來きた所ところで、チツとも怖こわくない事ことはないワイ、チ、ハ、チツとしつかりせぬか

「い」

「ギヤツハ、ハ、ハ、ギユフ、ハ、ハ、ギヨツホ、ハ、ハ、」

と國依別の怪聲。

「モリス、それ又出よつたぞ。益々怪體な聲を出すぢやないか」

「さうだ、ギヤファハ、なんて人をギヤフンとさす化者の計略だらう……ヤイ化者、ギヨホ、て何ぢやい、其位な事で此方はギヨツとはせぬぞよ。ギユフ、な、なんてそら何ぢや。ギユーと云はさうと思つたつて、そんな事がこたへる様な俺と思ふか。バ、馬鹿らしい。今日は日が悪いから、又明日に出直せよ」

紅井姫小聲で、

「なア姉えさま、どうしましょう。あんな事姉さまが仰有るものだから、本まの

……本まものが出たぢやありませんか、妾怖いわ」

エリナ小聲で、

「姫さま、心配なさいませぬ。ありや國依別さまがあんな事を言つてるのですよ。化者でも何でもありませんから」

「姉さま、どうぞ御頼みですから、國依別さまに、あんな事言はないやうに止めて下さいなア」

「マア良いぢやありませんか。妾が斯うしつかりと抱へて上げますから、さう震はずに、氣をしつかりなさいませ」

國依別萱をガサガサと揺り乍ら、怪しい作り聲をして、

「ホーホーホホー、アホ アホ アホ アホ、【ア】、、ホ、、

【キ】、、ホ、、【ヤ】ホ、、【マ】ホ、、【ワ】ホ、、【ケ】ホ、、ホホホイ

ケキヨ、【モ】ーホ、【リ】ーホ、【ス】ーホ、ホホホーホーケキヨ、ケツキヨ

ケツキヨ ケツキヨ、ニヤーン、モウ モウ、ワン ワン ウー、ヒン ヒン

ヒン」

「オイ、モリス、いよいよ怪しからぬ事になつて来たぞ。鳥だと思へば猫の聲を出しよる、猫かと思へば牛犬狼虎に馬、オイどうぞ頼みだ、俺を負うて逃げてくれぬかい。腰が立たぬワイ……」

「オ、俺だつて、腰が怪しくなつて来たワイ。足だつて細かう動き出すなり、お前所か、俺の身が持てぬのだイ」

「なんぼ利己主義が発達した世の中だとして、チツとは秋山別にも同情して呉れた

ら如何だ」

「俺だつてシンパシーの涙に暮れては居るが、斯うなつては如何ともする事が出来なないぢやないか。心臓寺の和尚奴が無茶苦茶に早鐘をつきよつて、何所ぢやないワイ。俺やモウ人の事所ぢやない、四這になつて逃げ出すワイ」

とワナワナする足を、犬の様に四這となり、ガサガサと元來し道へ這ひ出した。秋山別も餘りの怖さに、腰の痛いのを打ち忘れ、無理無體にモリスの後に従いて、無暗矢鱈に這ひ出し逃げ出す。

「アハ、ハ、ハ、オイ秋山別、モリスの兩人さま、アラシカ峠の大天狗又の御名は國依別命、紅井姫様のお伴をしてエリナさまと三人、此處に休息して居るから、チツと來たら如何だ。よい取持をしてやらうかなア」

兩人は益々驚き、

「ヤアバ、化者奴、國依別の聲色を使ひよつた。コラ大變だ」

と無性矢鱈にガサガサガサガサと四這になつて、力限りに逃げ出して行く。

(大正一一・八・一八 舊六・二六 松村眞澄録)

(昭和九・一二・一七 王仁校正)

第九章 誤神託(八七五)

秋山別、モリスの兩人は、日暮シ河の南岸の萱野原に休息する折忽ち暗がりよ
り怪しき聲の聞え來りしに怖氣付き、四這となつて其處を逃げ出し、二三丁計り
引返し、やうやうここに胸を撫でおろし、それより再びアラシカ山を驅登り、神
王の森に到着し、神勅を受て、紅井姫の行方を伺ふ事となしぬ。秋山別は、神主
となり、モリスは審神者となつて、翌日の眞夜中頃に神占を奉伺する事とはなり
ぬ。

古ぼけた祠の床の上に三四尺間隔を置いて、神主、審神者は向ひ合ひ、モリス
は雙手を組み、不整調な音調もて天の數歌を歌ひ上ぐる。

人、二人、見つけて、四るでも晝でも、五ちやつきまはし、六りやりに押さへ

つけて、七んでもかでも八り倒し、九ころに思ふ丈十く心する迄、百千萬遍でも、思惑を立てさせ玉はねば、常世神王の森は離れませぬぞや」

「コラ、モリス、何を吐すのだ。そんな事で靈がかかるかい。馬鹿らしくつて、きばつて居れぬぢやないかい。モ一遍やり直せ」

「専賣特許の新規發明だ。特許意匠登録の手續き中だから、マア黙つて聞いて居らう。何でも新しい事が流行する時節だから、開闢の初から襲用して来た一二三四……も餘り苔が生えて面白くないからなア。神様も今迄の數歌はモウ聞き飽いてゐらつしやるから、チツと珍らしい事を申し上げて、此方を向かすと云ふ俺の一厘の秘密だ」

「お前神主になれ、秋山別が審神者をしてやらう。お前の審神者では根つから氣乗りがせぬワイ。審神者さへよければ、どんな立派な神でも憑り玉ふのだからなア。併し何ぼモリスだつて、モリ住居の烏の神懸りは御免だから、臍下丹田に心を納めて、無我の境遇に入らねば駄目だよ。先づ第一に一切の夢想を除去する事。身體衣服を清潔にする事。併し旅行中だから衣服を清潔にする事丈は免除してお

かう。山の上で水行する所がないから、身體の清潔も已むを得ずとして、是も免除する。次に感覺を蕩盡し、意念を斷滅する事、大死一番の境に入る事。姿勢を正しうして瞑目靜座する事。次に審神者が何を尋ねるか……何ぞと云ふ様な疑惑を持たぬ事。取越苦勞を致さぬ事。過越苦勞を致さぬ事。刹那心を樂むこと。それから最も大切な心得は、紅井姫に對して少しも執着のなき事。これ丈の心得がなければ、正しい神が憑つて來て、正しい判斷を與へてくれぬから、其積もりで心身を澄清にし、感觸の爲に亂れざる事を慎むべし……マアこんなものだ」

大變に六つかしい事を言うのだね。モツと平たく云うて呉れないか」

俺だつて平たく言ふこた出來ぬワイ。現在どんな意味だと云ふ事は、俺も分らぬのだからな。楓別命さまが何時も仰有る事を無意識に腹へ詰め込みた丈だ。併し分らぬのが有難いのだよ。お經だつてさうぢやないか。唱へてる坊主でさへもテンデ何の事か分らず、聞いている連中にも分らぬとこに有難味があるのだからのウ。

分つて見ての後の心に比ぶれば、分らぬ昔ぞ有難かりけり

と云ふ様なものだ。サア早く瞑目静座せぬかい」

「サア、どんなエライ神さまが、お憑りになるか知れぬぞ。ビックリするなよ」

「何だ其スタイルは、無茶苦茶に肱を張りよつて、馬鹿に威張つとるぢやないか。

丸で鉛の天神さま見たいに、見つともないぞ。モウちつと肩を下て、品のよい地

藏肩にせぬかい」

モリスは無性矢鱈に手を振り、首を揺り、口をパクパクさせ乍ら、齒糞だらけ

の不整律な田螺の様な齒を剥き出し、

「ウーウーウー」

ドスンドスンドスンと床をふるはせ乍ら飛びあがり出した。秋山別は、随分烈

しい神懸りだナアと小聲に言ひ乍ら、ポンポンと二拍手し、恭しく頭を下げ、

「何れの神様で御座いますか？ 何卒御名を告げさせ玉へ。及ばず乍ら秋山別、

審神者を仕りまする」

「【ア】ハー　アハー　アハー、【阿】呆らしいワイ。【ア】キもせぬ戀路に

【あ】くせくと致して、そこら【あ】たりを歩き廻り、憐れな面を致して、姫に

【會】ひたい【會】ひたいと憧憬歩く、安本丹、悪人の癖に女に對しては、随分
涙脆い奴ぢやのう。此方は神王の森に、年古く守護致す悪魔大王と申す大天狗で
あるぞよ」

「ア、餘りぢや御座いませぬか。【ア】夕悪性な人の缺點計り竝べ立てて、

【あ】られもない事を仰有ります。餘りのこつて、秋山別も呆れてものが言はれ

ませぬワイ、【ア】フンとして【開】いた口が早速には塞がりませぬ。悪魔大王

様、モウちつと色よい御託宣をして下さつたら如何です」

「【イ】ヒ、色よい返事をせいと申すが、此大天狗は男であるぞよ。其方の

色よい返事がして欲しいのは、紅井姫の口からであらう。【い】ろいろと工夫を

致し、手を廻し、足を働かせ、幾年掛つても意思互に疏通するまで行くのだ、さ

うすれば色よい返事が来るかも知れぬぞよ。【い】らつでないぞよ。勢に任して

早く盛物に手をかけようと致すと、サツパリ【可】かぬぞよ。何事もイ、因縁づ

くぢや。力一杯意茶つく様になるのは、一二年先かも知れぬぞよ。一日も早く添

ひたくば、【イ】モリの黒焼を拵へてふりかけたが、一番著しい偉效があるぞよ。

【要】らぬことに何時までも心配を致すでないぞよ。【い】けすかない面をして、餘り威張るものだから、厭がられて了ふのだ。俺の意見に異議があれば、どこ迄でも尋ねたがよいぞよ。委細の様子を一伍一什、説き諭してやるぞよ」

「【イ】、、意茶つかさずに、モツと一さくにとつとと【言】つて下さいませ。心が、【い】らいらして、意思が固まりませぬ。石よりも固い私の決心、【い】つかないつかな、何時になつても動く様なチヨ口臭い戀では御座いませぬ。意地づくでも目的を立てねば置かぬので御座いますが、一體此戀は何時になつたら成就するもので御座いませうかな。一年も二年も待てと仰有つても、到底さう永くは待てませぬワ」

「【ウ】フ、、【う】るさがられて、肱鐵を亂射され乍ら、まだ目が醒めぬか。【う】ろたへ者奴、紅井姫もお前の迂闊な智慧には【ウ】ンザリしてゐるぞよ。何程其方が秋波を送つても、【膿】んだ鼻が潰れたとも、言つて来る氣遣ひはあるまい。【う】ぶの心になつて神の誠の教を悟り、普く人を愛し、牛の様に俯むいて働きさへすれば、美しい女が【う】るさい程、【ウ】ザウザと其方の側へ集

まつて来るぞよ。先づ第一運の循つて来る迄、誠を盡して待つて居るが良からう」
「ウ、ウ、ウ」つかり聞いて居らうものなら、此天狗何を吐すか分つたものぢやないワ。モウ御引取り下さい……」
ポンポンと手を拍つ。

「エ」ツへ、へ、へ、まだまだ言はねばならぬ事がある。縁と月日は待つがよいと云ふ事があらうがなア。併し乍ら其方と紅井姫との縁は餘り遠方過ぎて、届き兼ねるから、其方から遠慮を致したが得だらう。「繪」にもかけない様な美人を、鳥羽繪の如うな面をした其方が、女房に選ぶとは、チツと提燈に釣鐘だ。閻魔の帳面を拜借して調べて見、紅井姫はモリスの妻なりと、ハツキリと附け止めてあるぞよ」

「エ、此奴ア僞神懸りをやつてやがるのだな。感覺を蕩盡し、意念を斷滅した神懸りがモリスの都合の好い事を吐すと云ふのが怪しい……オイ、モリス、もう駄目だ。サツパリ化けが現はれたぞ。秋山別の審神者を瞞さうと思つても、此方の天眼通を欺く事は出来まい。頭刎狐の尻尾を出しよつたぢやないか」

「オ」ツホ、、、、「尾」を出したと申すが、其方に「尾」が見えるか、見えるなら一つ掴まへて見よ。横道者奴、大天狗を掴まへて狐などとは能くも大きな口で申したなア」

「オ」、、、、「お」きやがれ。脅し文句計り竝べて、往生さそうと思つて、そんな事に「尾」を巻いて、へーへー言ふ様な俺ぢやないワイ」

「カ」ツカツ、、、、烏の婿に孔雀の嫁とは、チツと釣合ぬぢやないか。能く考へて見い」

「カ」、、、構うない、俺の嬢の事まで干渉する権利がどこにあるか」

「キ」ツ、、、、貴様、それでも嬢の事に就いて神勅を伺ふと申し、モリスを神主として尋ねて居るのではないか。チツと「き」まり悪うなり、氣味が良くない事を吐す「氣」にくはぬ、氣障な大天狗だと思つて居るであらうのウ。

「ク」、、、黒い面をして、雪の如うな姫に戀だの鮎だのと、何を洒落るのだ」
「ハテ、どうしても此奴ア怪しいぞ。オーイ、モリス、いい加減に止めたら如何だい。そんな偽神懸りをやつたつて、駄目だぞ」

目に會うて、ノ、呑氣な顔しても居られぬワイ。ハ、早う何とか良い智慧をめぐらし、ヒ、祕密の奥を探り、妙を盡し、一時も早くフ、夫婦になつて、へ、平和な家庭を作り、姫をホ、ホームの女王と仰ぎ奉り、マ、【ま】めやかに、ミ、身を粉にして、一言も背かず、女王さまのム、無理を無理と思はずに喜んで参り、メ、滅多に怒らぬ様にせなくては、折角も、貰うた奥さまもサツパリ駄目になつて了うかも知れないぞ」

モリスは又喋り出した。

「ヤ、喧しワイ、イ、いろいろとらつちもないことを、ユ、言やがつて、エ、縁起の悪い、ヨ、【ヨ】タリスクを、ラ、亂發し、リ、理窟にも合ぬ事を、ル、縷々數萬言を竝べ立て、レ、廉恥心を一寸辨へぬか、口、碌でなし奴、ワ、笑はしやがる、中、何時迄も女の尻を、ウ、迂路々々と、うるつき廻り、エ、【エ】ツパツパを喰はされても、オ、【お】前はまだ目が醒めぬのか、ガ、餓鬼ぢやなア、我利我利亡者の、ギ、義理知らず奴、グ、愚にもつかぬ事を、何時迄もグツグツと、ゲ、【げ】ん糞の悪い、

【ゴ】、御託を竝べ、ザ、【ザ】マが悪いぞ。ジ、【ジ】つと胸に手を當てて考へて見い、貴様の様なズ、【づ】法螺に誰がエリナだつて、ゼ、膳を据ゑるものかい、ゾ、【ぞ】ぞ髪が立つと云うて逃げ出すぞよ」

秋山別も又負ぬ氣になり、

「ダ、黙れ、矢釜しいワイ。チ、【ぢ】つとして聞いて居れば、ヅ、圖々しくも止め度もなく喋り立てよつて、モウ俺もウンザリした。勝手に喋つておけ、デ、【で】んでん蟲でさへも家を持つてるのに、宿無し坊奴が、ド、【ど】こまでも毒つきよつて、バ、馬鹿にするも程があるワイ。此上何なつと吐いて見よ、ビ、貧乏搖ぎもならぬよに靈をかけて封じてやるか。ブ、無細工な鯨面をし依つて、ベ、【べ】らべらと色男氣取で、何を吐くのだい、ボ、

【ぼ】けの粕奴が」

モリスは又喋り出す。

「パ、ピ、プ、ペ、ポ、と庇をこいた様な庇理窟をやめて、是から二人の女を一杯アイウエオだ。さうすれば向方だつて結局にはお前さま私に向つてナニ又ネ

ノなさると言はれまい。終ひの果にやさしスセソだ。彼奴の事思うと、何時も何だか知らぬが、タチツテトだ。暗がりに　　の　　へハヒフへホして肱鐵をかまされ、恥を力キクケコやるよりも、あのナイスをワヅウエヲにしてうのだなア。サア神懸りや口トで伺つて居つても根つからマミムメな事を知らして呉れないから、實地が一番早道だ。キツと日暮シ山の岩窟の中で陥穽に放り込まれ、誰か強い人が出て来て私を早く助けて紅井姫かなア……と青息吐息をついてるかも知れないよ。サア天狗の託宣ぢやないが、マラソン競争で決勝點を得た者が紅井姫のハズバンドだ。スエートハートし切つたナイスを無下に見殺しにするのも、男の顔が立たない。都合よく陥つて居れば良いがなア、秋公

「さうすれば此秋山別が、紅井姫さまをグツと抱上げ……これはこれはどなたかと思へば、ヒルの館の楓別命様の御妹の紅井の君で御座いましたか、誠に危いとこで御座いました。ママア結構で御座います。是と云ふのも神様の御かげ、第一秋山別の舍身的活動の結果で御座いますワイ……と圓滑に高飛車に言靈車を運轉さす、さうすると姫様が玉の涙を泛べ給ひ……誰かと思へばお前は秋山別で

あつたか、これ程世の中に澤山の人があつても、妾に命がけの同情をして呉れる者はお前より無い、あゝ濟まなかつた。そんな親切な男と知らずして、今まで飯の上の蠅を追うやうに「すげ」なうしたのは、濟まなかつた。秋山別、相變らず可愛がつて頂戴ね……なんて反對に紅井姫さまの方からラバーすると云ふ段取りだ。イヒ、ウフ、エへ、オホ、おゝ面白い面白いイヤお芽出た。割なき仲となつて御互に面白可笑しく此世を送るのだなア。泣いて暮すも一生なら、笑つて暮すも一生だ。アハ、モリ公、どうだい」

「勝手に何なつと言つて、糠喜びをして居るが好いわ。サア一時も早く決勝點に達した者がハズバンドだ。誰が何と云つても、大天狗の御許しだから、……オイ、グズグズしてると、丸木橋のあたりで日でも暮れようものなら、例のホ、だよ。サア行かう」

と尻ひつからげ、神王の森を後に、二人は一生懸命に、又もや日暮シ山の岩窟さして進み行く。

(大正一一・八・一九 舊六・二七 松村眞澄録)

第一〇章 噂の影（八七六）

日暮シ山の山麓に 教の館を開きつつ

朝な夕なにサボリ居る 日暮シ山のウラル教

アナン、ユーズを始めとし ブール教主の目を忍び

葡萄酒の倉を押開けて 盗み出したる豊醇の

甘しき酒に舌纏れ 二人は膝を付き合せ

ヒソヒソ話に耽りゐる。

ユーズは酔の廻つた口から、

「オイ、アナン、アラシカ山の山麓エリナの宅へ往つた時は随分面白かつただらうなア。あの時にあゝ云ふ地震さへ無ければ、貴様は甘くやつて居たのだらうに
のウ、惜しい事をしたものではないか」

「そりや随分面白かつたよ。併し乍ら流石はエスの娘丈あつて、随分賣り出した時にや、流石のアナンも一寸は驚かざるを得なかつたよ。併し此頃の大將の御機嫌と云つたら、サツパリなつてゐないぢやないか。何とかして機嫌を取る妙案はなからうかねい。何を云つても此間の様にヒルの都攻めに失敗し、大將が焦れて居つた、紅井姫を生捕つて歸つて御目につけられないものだから、御機嫌が悪いのだよ」

「馬鹿言へ、教主に限つて、そんな陽氣な心がないのはこのユーズも知つてゐるよ。あれ丈一心に神様の事計りして御座るのだもの、……お前はチト考へ違ひをしてゐるナ」

「そこが思案の外と云ふものだ。お前も餘程お目出たいねい。實の所ヒルの都攻めに、此方アナンを御遣はしなされたのは、アナンをして肝腎要の目的は紅井姫を生捕にして歸れ……と云ふのが眼目だからなア」

「教主が又如何してヒルの館の紅井姫を知つてゐるのだ、それが分らぬぢやないか。紅井姫は所謂箱入娘で、城外へ一步も踏み出した事がないと云ふのぢやない

か

「そこが其處だで……遠い様でも近いは男と女とか言つてなア。いつの間にかチヤンと鋭敏な教主の目には、遠うの昔に止まつてゐるのだ。お前達は幹部になつてから、まだ時日が経たないから、本當の事は知らないが五六年前の事だつた。ヒルの都の下手から船に乗つて、帆を順風に孕ませ、プールの教主が此方へ御歸りの途中、上からスツと流して來た遊山船の中に、十四五の何とも知れぬ、天女の様な娘が乗つてゐるぢやないか。其時にプールの教主は其女に見とれて船端を踏み外し川中に陥り、大變危ない事があつたのだ。このアナンは其時お側に居つたから、能く知つてゐるのだ。教主は俺達に川の中から救ひ上げられ、御苦勞だとも何とも言はずに……あの綺麗な娘は、一體何處の者だ……と意味ありげに御尋ねになつた其時に、俺は教主に向つて……あの女はヒルの都の神館紅葉彦命の娘で御座います……と云つた所、直にグンニヤリとうな垂れ、それは實に失望落膽の體だつたよ。其後と云ふものは、如何したものか、何程よい縁があつても、教主は皆撥ねつけて了ひ、元氣盛りの身を以て、今に獨身生活を續けて御座るの

も、そこには一つの思惑があつての事だよ。何とかしてあの女を引張込み、教主の奥さまにしたいものだ。さうすれば何時もニコニコで御機嫌が能いだけけれど、此頃の様な六つかしい顔を見せられると、俺達も本當に堪らないワ

「ユーズは今が初耳だよ。そんな事で御機嫌が直るのなれば、何とか一つ獻身的活動を續けて、成功させたいものだなア。そんな祕密を知つて居つて、何故今迄智謀絶倫のユーズに知らさなかつたのだい。どないでもユーズの利くユーズさまだから、遠うの昔に、俺が知つて居れば、成功して居るのだがなア」

「ユーズ、お前は酒に酔うた時許り、無茶苦茶に強いが、酔が醒めると、サツパリ大水が引いた跡の様に、臆病になり、シヨビンとして縮こまつて居るのだから、當にならないよ」

「ナアニ、そんな事に掛たら、得手に帆のユーズだよ。キツと成功させて見せる」
「それならお前、是からヒルの都へ乗込むで、何とか計略を以て引張出して來たら如何だい」

「このユーズの俺にはナ、一切萬事吾方寸にありだ。今日は前祝として、十分に

ブル酒を頂戴し、いよいよ明日から活動の幕を切つておるすから、甘く往つたら拍手喝采を願ひますだ。アツハ、面白面白

併しユーズ、お前、暫くヒルの都行は見合して、ここに居つて呉ねばならぬ事がある

ユーズに見合せとは、そりや又如何云ふ譯だい

お前も知つてゐる通り、國依別の宣傳使が使はしたキジ、マチの兩人、あゝして何時迄も陥穽へほり込み、毎日腐つた梨や蜜柑の二つや三つ放り込みて、生命をつながせ、虐待して歸してやらぬものだから、國依別も今頃は日暮シ山へ遣はした兩人は今に歸つて來ない、どうして居るのだらう。まさかあれ丈の熱心だから、よもやウラル教に逆轉してゐるものでもあるまい、大方陥穽へでも落されて苦みて居るに違ない。一つ實地探險と出掛ようか……などと云つて、のしのしとやつて來ようものなら、それこそ此間の地震ぢやないが、此靈場は地異天變の大慘事が突發するのだ。アナンはそれが第一氣に掛つてならないのだ。何とか國依別がやつて來よつたら、今迄とは態度を一變し、最善の方法を講じて見ねばなるま

いぞ
』

『さうだなア、今度はユーズを利かし、此方から極下に出て、御客さま扱にし、國依別を心の底から得心させ、さうして都合好くば、ウラル教の副教主に推薦してやつたら、何程頑固な彼奴だつて、今日の普通宣傳使の境遇から比べて見れば、其地位名望に於て雲泥の相違だから、喜び應ずるに違ひないワ。ウラル教も此頃の様
に秋風が吹いて、日に日に寂寥の空気に包まれて居る際だから、敵を以て敵を制する筆法で、あゝ云ふ立派な男を、此方の味方に取り込みたならば、ウラル教も再び勢力を盛返し、昔の様に立派な教團になるであらうと思ふが、お前は如何考へるか』

『それもさうだ。併し乍ら、ユーズの言ふ通りにさう甘く着々と此事業が進行するだらうかなア』

『決してアナンどの、御心配御無用だよ』

と話してゐる時しも、門番のハル、ナイルの兩人慌だしく駆け來り、ハルが、

『申上げます。只今國依別が岩戸の口迄參りまして、それはそれは美しい紅井姫

とかエリナとか云つて、二人の素的な女を伴ひ、早く幹部の誰かに會はして呉れよと云つて、何と云つても歸りませぬ。如何取計らつたら宜しう御座いませうかなア」

アナンはハツと驚き乍ら、稍聲を震はせて、

「ナ、何と申す。ク、國依別が來たと申すか」

紅井姫、エリナの兩人がお見えになつたと云ふのか。そりや人違ではあるまいな。チツトばかり、ユーズも心配だからのウ」

「エ、決して決してハルの言葉に間違は御座いませぬ。三倉山の谷間で見た宣傳使です。そして一人はエリナに間違御座いませぬ。紅井姫と云ふ方は是迄に會つた事がないから、眞偽は分りませぬが、随分綺麗な女です。此岩館でも一目睨みたら、ガチャガチャと碎いて了ひさうな目付をして居りますよ。……ナア、ナイル、随分別嬪だつたなア」

「御兩人様、決してナイルの眼では間違はなからうと思ひます。何とか返事をせなくてはなりません。如何致しませう」

との尋ねにアナンは、

「一寸待て、考へがあるから」

と俯むき、ユーズと共に腕を組み、考へ込むのである。其間にハル、ナイルの兩人は逸早く此場を立去り、表口に現はれ來り、國依別に向ひ、兩人口を揃へて、

「オイ、一寸待て、此方にも考へがあるから……とアナン、ユーズの御大將が仰せになりましたぞ」

「なに、一寸待て、こつちに考へがあるから……とは怪しからぬ。よし其方がさうなら此方にも考へがある……サア姫様、エリナさま、私に従いてお出でなさいませ」

と窟内に踏み込まうとする。ハル、ナイルの兩人は大手を擴げて、

「マアマア待つて下さいませ。タ、大變で御座います。一寸待て、此方にも考へがある……と二人の大將が仰有つたのだから、さう勝手に押入つて貰ひますと、あとで私が如何な目に會はされるかも分りませぬ。一寸奥から返事がある迄、暫く其處に休みてゐて下さいませ」

「あゝ仕方がない、國依別暫く茲に休息がてら待つて遣はす、早く返答を致す様に、奥へマ一度伺つて來い」

ハル小聲で、

「始めて來よつて、偉相に、俺達を奴扱にしよるワイ。えゝ怪體の悪い……」
と呟き乍ら、再びアナン、ユーズの居間へ走り入つた。

二人は互に腕を組み、差俯むいて途方に暮れ乍ら、一寸顔をあげて見ると、最前使に來た兩人は何時の間に其處に居ないので、アナンは顔色を變へて、

「あゝ二人の奴、どこへ行きよつたのかなア。まだ返事を聞かない中から飛出したのではあるまいか。災は下からと云つて、せうもない事を言ひよると、後が面倒になつて纏まりがつかなくなる。折角の神謀鬼策が駄目になつた例しもある慣

ひだ。えゝ困つた奴だナア」

と兩人は顔見合して呟いて居る。其處へ慌だしくハル、ナイルの兩人走り來り、
「申上げます。大變に剛情な奴で、無理に押入らうと致しますので、あなたの御言葉の通り……オイ一寸待て、此方にも一つ考へがあるから……とかましてやり

ましたら、國依別の奴……ナニ猪口才な、そちらに考へがあれれば此方にも考へがある……とエラさうな事を言つてましたぜ。御用心なさらぬと、あんな強い奴が現はれた以上は大變ですぞ」

「オイ、ハル、ナイルの兩人、誰がそんな事を國依別に申せと云つたか、いつ又此方が左様な言葉を出したか」

「モシ、アナン様、モウ御忘れになりましたか。あなた確に……ここにナイルも聞いて居りましたが、一寸待て、此方にも思案があるからと云つたぢやありませんか。今更言はぬと仰有つても、そんな無理は何程上役でも通りませぬぞや」

「それは其方に對して、一寸待て……と云つたのだ」

「さうでせう、私に仰有つたから、即ち私があなたの代理となつて、國依別に一言の間違もない様に傳へたのです。それが何處が悪う御座いますか」

「あゝ困つた奴だなア。モウ斯うなつちや仕方がない。……アンナさま、肝玉を放り出して、あなたとユーズの二人が國依別の前に十分に慇懃な詞を使つて、言向和し、怒らさない様にして、甘く行けばウラル教の副教主に祭り上げ、紅井姫

は教主の奥方となし、エリナは私の奥方と決定しておいて、腹帯を締めて一つ圓滑に舌劍を揮ふて見ようぢやありませんか。一枚の舌の使ひやうに依つて、平和の女神ともなり、戦争の魔神ともなるのだから、十分に巧妙な辭令を用ゐ、三五教ぢやないが善言美詞の言靈を以て、敵を悦服させると云ふ手段に出ようぢやありませんか」

「それは至極妙案でせう。併しそれに先立ち、ブルの教主に申上げておかないてはなりませんまい。あなた御苦労だが、其任に當つて下さい。私は是から表口に往て國依別に都合をよく胡麻をすつて來ますから……」

と俄に吾れ、俺の辭を改め、美しい言葉を使ひ乍ら、ユーズは教主の居間へ、アナンは入口へと持場を定めて進み行く。

ハル、ナイルの二人はアナンの前に立ち、

「サアサア一寸先は如何なる事やら、暗か月夜か鼈か、困つた事が出來て來たと呟き乍ら、入口指して驅け出しにける。

(大正一一・八・一九 舊六・二七 松村眞澄録)

(昭和九・一二・一七 王仁校正)

第一章 賣言買辭 (八七七)

アナンはハル、ナイルの兩人を先に立て、岩窟の入口に悠然として腰打掛けて待つて居る國依別外二人の前に來り、忽ち地べたに手をつき乍ら、

「これはこれは、國依別の宣傳使様、能くこそ斯様な所迄御入來下さいまして、岩窟内一同恐悦至極に存じ奉ります。就いては今迄御無禮の御咎めもムりませうなれど、三五教の御教通り、只何事も神直日大直日に見直し聞直し、吾々の身の過ちは宣り直し下さいまして、仁慈無限の大御心を發揮し下さいまして、何事もあなた様の大御心によりて寛大なる御處置を取られむ事を神かけて念じ奉ります。あゝ惟神靈幸倍坐世」

と國依別を無暗矢鱈に拜み倒し、一口も不足を言はせない様に、大手搦手より鐵

條網を張つて了つたのは、實に狡猾至極の曲者である。

「これはこれはアナンさまとやら、何時ぞやらは丸木橋の畔に於て、花々しく御奮闘遊ばされ、實にあなたの神謀鬼策には國依別感嘆の舌を巻いてゐる。兵法の奥の手は三十六計の中、逃ぐるを以て第一とすとかや、世の中は勝たう勝たうと思ふに依つて治まらない、あなた方の様に、少數の敵に勝を譲り、恥かしげもなく算を亂して御遁走遊ばす其御勇氣には、吾々も倣はなくてはなりません。負て勝取るとやら、ネットプライスの掛値なしの店よりも、ドツサリと負値を吹き立て、客に對しドツサリ負てやる店の方が能く繁昌致しますから、定めてウラル教もよくお負遊ばしたのでせう。それ故得意は億客兆來の御繁昌でゐませう。イヤもう國依別、側へも寄れませぬ。どうぞ相變らず御店の繁昌する様に、今度もキレーサツパリと御負下さいませ。あなたの方に於て、算盤が合はないから負ないと仰有れば仕方がありません。私は漆彦命となつて負かしてあげませう。チツとはうるし、否うるさくても、そこが何事も神直日大直日に見直し聞直し宣り直すのでゐいますからなア、ハ、ハ、ハ、ハ、」

「ハイハイ、まだ御取引の御用命を蒙らぬ中から、負て負てとこ切り御便利を計つて居りますから、何卒永當々々御贖の程を御願ひ申します」

「時に吾々の参りましたのは、一つ賣つて貰ひたい品物がムいまして、ワザワザ當商店へ罷り越した、新得意でムいます。どうぞ安く負て御譲り下さいませぬか」

「御注文の品物とは一體何物で御座いますか。動物か、植物か、器具か或は魚類か、貝類か、何なつと御注文次第、有さへすれば只でも進ませう。併し乍ら無いものは御免を蒙つておかねばなりません」

「吾々の買ひ求めに來た者は動物や植物ではありませぬ。摺出しと、キギスと住家とで御座いますよ」

「へー、これは又妙な御注文ですな。キギスなどは此館には居りませぬ。摺火もなければ賣る様な家も生憎仕入れて居ませぬので、どうぞ外さまを御尋ねなさて下さいませ。へー毎度有難う、御贖に預りまして……」

「毎度御贖と云ふが、今日始めて注文に來たのぢやないか」

「アナンは切りに腰を屈め、揉手をし乍ら、」

「へー、これは商ひの習慣で御座いまして、始めての御客さまでも、毎度御ひいきに……と云ふ事になつて居ります。どうぞマア奥へお這入り下さいまして、京の御茶漬でもドツサリ食つて下さつて、御歸り下さいませ」

「最初の吾々が注文致した、キギスと云ふのは、三五教のキジ公の事だ。又摺出しと云ふたのはマチ公の事だよ。住家と云ふたのはエスと云ふ事だ。何時までも穴倉の中へ仕舞ひ込みておいても、餘り利益にもなりません。新規流行の此時節、寢息物になれば賣れ行きが悪くなるから、買手のある中にお賣りになる方がお店のお得だと考へますがなア」

「コレ計りは親方の意見を聞かねば、番頭の自由にはなりませんから、一寸待つてみて下さい。マア奥に旦那様がお茶でも立ててお待受で御座いますから、どうぞ何なら御這入りになつては如何で御座います。たつて厭なお方に這入つて貰ひたい事も御座いませぬ……では御座いませぬが」

「何は免もあれ、奥へふみ込み、ブルの大將に直接面談を遂げ、三人の男を受取つて歸りませう。……サア姫様、エリナさま、私に従いて御出でなさりませ」

と無理に行かうとするを、アナンは大手を擴げて、

「モシモシそれは餘り理不盡と申すもの、暫くお待ち下されば、教主の御許しが
出ますから、それ迄餘り永くとは申しませぬ。暫くお待を願ひます」

國依別は、

「イヤ、少しも猶豫はならぬ。邪魔めさるな」

と進み入るを、又もやアナンは大手を擴げて、「待つた待つた」と後退りし乍ら、
行手に塞がり、過つてキジ、マチの落込める落し穴へ眞逆様に自分も落ち込みに
ける。

「ヤア自分の作つた陥穽へ自分がかはまるとは、實に天罰と云ふものは恐ろしいも
のだナ。併しチツとも油斷は出来ない。……紅井姫様、エリナ様、國依別の歩い
た足跡より外を歩いちや可けませぬよ。大變な危険區域ですから……」
と云ひ乍ら、陥穽を上から覗き込めば、穴の底にキジ、マチの兩人が今おち込み
しアナンを引捉へ、

「サア、アナン、貴様も此處へ落込みし以上は、最早叶ふまい。一時も早く俺達

を救ひ上げる様に、大將に歎願致せばよし、グツグツ致すと、生首を引抜いて了うぞ。モウ大丈夫だ、上から何を落とすよつても、貴様の體で受けければ好いなり、良いものが降つて来たものだ。萬一腹が減れば貴様の肉を食つてやるなり、何と云つてもモウ此方のものだ。アツハ、ハ、ハ、ハ、と笑ひ乍ら、空を仰ぐ途端にふと目に付いたのは國依別の宣傳使であつた。キジ公は思はず、

「ヤア宣傳使様、能う来て下さいましたナア」

「今日か今日かとマチ公はマチかね山の時鳥、マチに待つたる今日の吉日、アナ有難やアナ尊や、アナ嬉しやなア。穴の中へアナンが又降つて来ました。モシ宣傳使様、あなたさへ御越し下さらば最早千人力です。どうか、梯子をかけて下さいませ。梯子が無ければ、太い綱を吊りおろして下さらば、それに縋つて上りませ」

「永らくの御隠居、さぞ精神修養が出来たでせう。實に國依別はお羨ましく存じますワイ」

「何事も善意に解釋すれば、陥穽だつて、別に苦しいとは思ひませぬ。本當に神様の御蔭で、キジ公も結構な魂研きをさして頂きました」

「それ程結構ならば、モウ暫く御兩人共、そこで徹底的の修業を遊ばしては如何ですか」

「イヤもう是れで一吋一服さして貰ひまして、又更めて荒行にかかりますから、どうぞ一刻も早く吊り上げて下さいませ。併し、此アナン殿は今這入つたばかりですから、上げては氣の毒です。せめて四五年も、實地修行の出来る迄、此井戸の底で斷食修業をさしてやりませう。……なア、アナン、それが結構だらう、吾身を抓つて人の痛さを知れ……と云ふ事がある、吾々も永らく結構な深い、冷たい陥穽の御世話に預つて、此御恩は忘れられませぬワイ。己の欲する所は之を人に施せ、欲せざる所は人に施す勿れ……と云つて、吾々は大變に此陥穽の底が氣に入つたから、アナンさまにも御神徳の丸取りをせず、分配してあげませうかい」

「誠に濟まぬ事を致しました。どうぞ今迄の事は一條の夢とお忘れ下さいまして、

此アナンをあなたと一所に引上げて貰ふやうに國依別さまに、お願ひ下さいな
「ヤアそれは願つてあげませう。併し何時上げて下さるかにはキジ公が保證する事は出来ませぬよ。人間は刹那心が大切だ。マアゆつくりと氣を落着けて居られたがよからう。泰然自若として山嶽の動かざるが如し底の大度量がなくては、ウラ
ル教の幹部は勤まりますまい、アハ、ハ、ハ、」
斯く云ふ中、國依別は繩梯子を捜し出し、パラリと吊り下るせば、一番にキジ公は、猿の如く繩梯子を傳ひあがる。次で、マチ公が上がつて來た。今度はアナンが一生懸命に繩梯子に手をかけ、二段三段上がった所を、キジ公繩梯子の結び手をプツツと切つた。アナンは再び井戸の底にドスンと音を立てて尻餅をつき、
「助けて呉れい、助けて呉れい」
と叫んで居る。キジ公は上から、
「助けてやらぬ事はないが、それには一つ注文がある。其注文に應ずるかどうだ
「ハイハイ、何事も御注文に應じます。最前も國依別様に無類飛切り、めちやめちやの投賣を致しますと、約束しておきました。ドツと負ておきますから、精々

御注文を願ひます。其代り、私を井戸から上げて下さるでせうなア」

「負る品物を上げるといふ事があるかい。就いては注文の次第は、エスの所在はどこだ。それをキツパリと白状するのだ。さうせなくてはキジ公も助けてやる事は出来ぬワイ」

「エスさまですか、そりや私では分りませぬ。ブールの大將に聞いて下さい。大將が祕密にして居りますから、吾々の窺知を許しませぬ」

國依別は言も急がしげに、

「キジさま、マチさま、サア是れから氣をつけもつて奥へ參らう。……アナンさま、暫くそこで修業をなさいませ。キツと救ひ上げますから、併し乍らエスの所在が分り次第助けますから、それ迄そこで御辛抱をなさいませや。何か御入用の物がムいますれば、何なりと遠慮なく仰有つて下さいませ。石の團子でも、砂の握り飯でも、蛔蟲の素麵でも、御注文次第、勉強して御安く差上げますワ、アハ、ハ、ハ、」

と笑ひ乍ら、教主の居間を指して、三男二女の一行は足許に氣をつけ乍ら、進み

行く。

（大正一一・八・一九 舊六・二七 松村眞澄録）

（昭和九・一二・一七 於七尾市 王仁校正）

第一章 冷い親切（八七八）

ユーズは國依別、外二女の茲に現はれしと聞き、驚いてアナンを入口の方に向はしめ、何とか彼とか言つて、其間にブル教主を納得させ、エスを水牢より救ひ出し、何喰はぬ顔をして、甘く國依別の歡心を買ひ、鋭鋒をさけむと苦慮し乍ら、ブルの居間に慌ただしくかけ入り、

「モシ、教主様、夕、大變な事が突發致しました」

「大變とは何事だ」

「へエ一寸申上げて能いやら、上げぬがよいやら、私には見當が付きませぬが、

と 免も角も申上げて見ませうかな。大變にあなたが御喜びの話と、お驚きの話とが、
ごつちや苦茶になつて居りますので、實はどうも、お目出たいやら、お氣の毒や
らで、實は申上かねてゐます」

「構はないから早く言つて呉れ」

「あなたの數年前から御執心遊ばすヒルの都の紅井姫様が、ブール様に直接お目
にかかつて、お願申したい事が御座いまして、ワザワザ御伺ひ致しました……と
仰有つたかどうか、其點迄はハツキリと存じませぬが、マアマア美人と云ふもの
は人氣のよいもので御座いますワイ」

「ナニ、ヒルの館の紅井姫が訪ねて來たとは、そりや本當か」

「本當も本當、一文生中の掛値も御座いませぬワイ。付いては喜びあれば悲しみ
あり……とか申しまして、あなたがお聞きになつたならば、さぞやさぞや、ブー
ルブールと慄ひ上つて、顔の色まで青くなり、家の隅くたに、人に顔をも能う見
せず、縮み上りて居らねばならぬぞよと、三五教の御神諭の様な事になるかも知
れませぬ。それだから第一に國依別の遣はしたキジ、マチの兩人を救ひ出し、彼

奴にドツサリ酒でも呑まして口塞ぎをし、又エリナの父のエスをば、今の中に牢獄から引張出し、此奴も十分大切に御馳走責めに會はし、何も言はない様にするのが上分別だと考へますが、どう取計らひませうかなア

「そりや大變だ。表口はアナンが、さうして暇取らせて居る間に、早くこちらは準備をせなくてはならぬ。お前御苦勞だが、エスを早く引つ張出して来て呉れ」

「これはこれは誠に以て、吾々如き「はした」者の進言をお聞届け下さいまして、御仁慈深き教主殿の御心、イヤもう吾々が助けて貰つたように有難く存じます。エスも本當に氣の毒なものですワイ。ウラル教の宣傳使であり乍ら、三五教の神司を泊めたとか云つて、世間狭い事を主張し、無理難題をかけて、あの様な所へ放り込みおくと云ふ無慈悲な事で、如何して御道が擴まりませうか、神様の大御心に叶ひませうか、オツト待てよ、エスを放り込みた張本人は矢張ユーズだつた。ヤア是は取消します。教主さま、もし國依別が誰がエスを放り込みたかと尋ねたらあなたは此ブルだと、部下の責任を引受けて言つて下さいや、頼みますから」

「何をグツグツ云つてゐるのだ。間髪を入れざる此場合、早く行かないか。ユ一

ズの利かぬ奴だなア」

「教主様のユーズが利かないから、それで先へ御相談をして居るのぢやありませんか。折角引つ張出して来て、私が一人悪者にせられちや、やり切れませぬからなア」

「どうでもよい、俺が引受けてやるから、早く出して来い」

「ハイ畏まりました。ウントコドツコイ、シテコイナ」

と尻ひつからげ牢獄指して、タツタツと暗がり道を走り行き、漸く水牢の外面に走り寄り、

「コレコレエス様、さぞさぞ御難儀で御座りましただらう。何分この大將がブルブル言うて怒り散らし、此ユーズが融通を利かして、幾度も救ひ出してあげたいと思ひ、骨を折りましたけれど、何と云つてもお前さまは、一生涯出す事は出来ぬと頑張つて居りましたよ。本當にひどいものですなア。併し乍ら晝も夜も私が、教主の側に附添うて千言萬語を盡し、漸くあなたを救ひ出す段取りになりました。サア早く出て下さい」

と云ひ乍ら、錠をガタリと外した。エスは暗い牢の中から、
「何と言つても、吾々は此處を結構な御宮殿だと考へ、天然に湧き出る岩の水を
掬つて呑み、始めは少し暗かつたが、目が馴れて来て、そこらが少し明かなくなつ
た。滾々として流れ出づる清泉を眺め、瑞の御靈の大神様の御恵みは此通りと、
私は結構な修業をさして貰つた。誰が何と云つてもここを出る事は出来ぬ。酒が
呑みたいと思へば此清水は酒と變り、葡萄酒と變り、厚き神の御恵を結構に身に
浴びて居るのだから、そんな殺生な事を云はず、そこを締めておいて下さい。何
と云つても、吾々はここを出る事は不賛成ですワイ」
「コリヤ又妙な事を仰有りますなア。こんなせせつこましい所へ閉ぢ込められて、
苦んでゐるよりも、廣い世界へ飛び出して、自由自在に、ちつと外を眺めて見た
らどうですか。天は青くすみ渡り、山川は清くさやけく、田の面には黄金の波が
打ち、鳥は歌ひ蝶は舞ひ、果物は稔り、花は咲き、こんな所に蟄居してるのとは
比較になりませぬよ。サア早く出て貰はぬと、此館に詰らぬ事が出来るのだ。サ
ア頼みだから、どうぞ出て下さいな、サア早う早う」

「吾々は誰が何と云つても、此處を出る事は出来ない。お前たちは狭い牢獄だと思つてゐるだらうが、神の恵を受けた俺達の目から見れば、此狭い一室も宇宙大に見えるのだから、仕方がないワ。小鳥を籠に永らく飼つておき、戸をあけて廣い世界へ放り出してやつても、其鳥は又元の籠が戀しうて歸つて来るものだ。おれも斯うなつては挺子でも棒でも動きませぬぞや。汚らはしい事を言はずに早く立去るが良い」

ユーズ心の中にて、普通では此奴は動きやらぬと考へ……エリナが此處へ來て腹痛を起してゐると云へば、何程頑固なエスでも、吾子を見たさに、出ると云ふだらう、オウそれがよい……と心にうなづき乍ら、

「實の所はお前さまの獨娘、エリナさまが、ここへお迎へにお出で遊ばし、今ブルーさまの御居間で腹痛を起し、お父うさまに會ひたい會ひたいと仰有るのだから、お前さまも子の可愛い味は知つてるだらう。」

白銀も黄金も玉も何かせむ 子にます寶世にあらめやも

と云ふ歌があるでせう。其大切な子が來てゐるのぢや。サアサア早く出て、エリ

ナさまに目出たく對面してあげて下さいナ。親が子に對する愛情は、到底門外漢の伺ひ知る所ではないさうだ。

早乙女や子の泣く方にうゑて行き

拾はるる親は蔭から手を合せ

と云つて、子位可愛いものはないぢやないか、なあエスさま

「アハ、ハ、ハ、國依別の宣傳使が御出になり、ヒルの館の紅井姫様と、吾娘の工

リナの三人がやつて来て、キジ公、マチ公兩人を救ひ上げ、今ブルの居間に乗

込まうとする最中であらうがナ。ブルの大將橡麵棒を喰つて、甘く其場をつく

らはうと思ひ、今更俺を大事相にして見せたつて駄目だよ

「ヤア、何時の間にそれ丈何も彼も能く分る様になつたのかな。大方金毛九尾で

も憑きよつたのだな。どうも怪しい。こんな所に居つて何も彼も皆知つて居るぢ

やないか

「俺をどなたと心得て居るか。永らく此泉の湧き出づる牢獄内に於て御靈を清め、

大悟徹底した御蔭で勿體なくも木の花姫様の御分靈を戴き、何もかも世界中の事

が見えすく様になつたのだ。俺の女房もあの地震で亡くなつたであらうがな。あの様な分らぬ奴が残つて居ると、大切な神業の邪魔を致すに依つて、神界から御引上になつたのだ。決して俺は女房位には目をくれてをらぬ。又何程吾子が可愛いと云つても、神様には變へられないから、もしもエリナが親に會ひたいと思ふならば、ここ迄面會に來たがよからう。何と云つても、出ぬと申したら、金輪際、五六七の世迄も此處を出ないのだから、早くブールに向つて、さう云つておくがよからうぞ。あゝ折角氣分よく眠つてゐた所を醒まされて、氣が利かない。マアゆつくりと此處で一寝入りして、岩屋の中の活劇を透視する事にせうかい」
と云ひ乍ら、ゴロンと横になり、早くも板を背中に負うて、蒲鉾の様に、グウグウと鼾を掻き、寝入らむとする。落つき拂つたエスの態度に、ユーズは呆れ果て、すごすごとブールの居間に歸り行く。

國依別は二男二女を伴ひブールの居間に通れば、ブールは俄に態度を變へ、庭に下り、揉手し乍ら、

「これはこれは、國依別様其外御一同様、よくマア斯様な所へ御來訪下さいまし

た。先達では三倉山の谷川に於て、失禮を致しました。實にあの時のあなたの理
義明白なる御言葉には感じ入りまして、私かに御高德を慕つて居りましたが、何
分にも澤山の部下の手前、其場であなた様の御弟子になる譯にも行かず、今日迄
どうぞしてあの宣傳使にお目にかかり、立派な御教を聞かして頂きたいと、朝な
夕なに念じて居りました。其功空しからず、今日は又何たる吉日でせう。あなた
様のみならず、皆様も賑々しく御來訪下さいまして、何と御禮申してよいやら御
禮の言も分りませぬ。ヤア御遠慮なくズツと御入り下さいませ、今に御酒の用意
も出来ませうから」

「假令心は反對でも、さう御叮嚀な言靈を使つて貰ふのは氣分の良いものですよ。
左様ならば、遠慮なく國依別も、御免を蒙りませう……サア皆さま、私と一所に
おあがりなさいませ」

「サアどなた様も、むさくるしい所で御座いますが、ブールの私が居間です。御
遠慮なく、ズツと奥へお進み下さいませ」

「ハイ有難う」

と五人はブールの居間に半月形に坐り込んだ。ブールは恐る恐る手をつき、國別の發言を待つて居る。

「どうも永らく、キジ、マチの兩人が、深い冷たい御同情に預りまして、おかげで生命文は取りとめました。是と云ふのも全く尊き神さまの御守り、又あなた様の残酷なる同情に依つて、おかげで兩人は魂を研き、立派な人間に仕上りました。更めて國依別、御禮を申します」

「ハイ、誠に行届かぬ事で御座いました。何分災は下からと云つて、私ブールの知らない事を、下の奴等が勝手に致すもので御座いますから、エ、キジ、マチ兩人さまにも、どんな御扱ひをして居つたか、私はちつとも存じませぬ。定めて御不自由で御座いましたらう。これも前生の因縁だと諦めて、どうぞ御立腹の點は見直し聞直し、お許しあらむ事を御願ひ致します」

キジはニコニコし乍ら、

「モシ、ブールさまどうも有難う御座いました……とは申されませぬ。併し修業を致しまして、魂を研いたのは私の信仰の力で御座いますから、あなたの感知さ

る所ではありませぬから、お禮は申しませぬワ。なア、マチ公さうだらう」

「さうともさうとも、餘り人を虐待しておくとは、後が何々ぢやからなア。一本の

マチくづがあれば、大都會でも、三千世界でも焼きつくせるのだから、此マチ公

だつて馬鹿にはなりませぬワイ。罷り「マチ」がへば、どこやらの人が、ブル

ールと蒟蒻のお化のやうに震ひ上る様な悲惨事が突發するかも知れませぬワイ。

用心なさいませや。「マチ」も濕つて居る間は至極安全ですが、濕っぽい陥穽か

ら這ひあがつて来てこう燥ぎ出すと、随分險呑ですよ。アハ、ハ、ハ、ハ、」

「御立腹は御尤もで御座いますが、どうぞ神直日大直日に見直し、聞直して下さ

いませ。ブルが御詫致します」

「アハ、ハ、ハ、コリヤ嘘だ、「マチ」がひだ。吾々は三千世界に敵もなければ味

方も持たない。只神様を親とし、世界萬物を兄弟と思つてゐるのだから、決して

祖神様の御心配をなさる様な兄弟喧嘩は致しませぬから、ブルさま御安心下さ

いませ。ここに雛さまの様にして竝んで御座るナイスは、ヒルの神館の有名な紅

井姫様で御座いますよ。そしてモ一人はお前さまが水牢に入れて苦めて居るエス

さまの娘エリナさまですよ」

と言尻に力をこめ、大聲に思はず呶鳴つて、目を剥き睨みつける。ブールは驚いてブルブルと身を震はし、

「ハイ、左様で御座いますか、能うマア来て下さいました。お父さまも世間からは如何云つて居るか知りませぬが、十分大切に居つて貰うて居りますから、今に茲へお出でになりませう。どうぞ御安心下さいませ」

「さうでせう、キジの私さへも陷穽に落とし、エス様を眞黒けの水牢の中へ大切に漬けておくのだから、呆れますワイ。吾々も同じく、陷穽の底で、大切に梨の腐つたのや、林檎の蟲喰ひを、あひさに當てがはれ、随分大切にして頂きました。なアエリナさま、ブールさまに能くお禮を申上げなさいや。丸で鬼の様な蛇の様な殘虐なブールさま……ではない……事は無い事はないのですから、そ

こはそれ、御禮にもいろいろ種類がありますからなア」

斯く話す折しもユーズは眞青な顔をし乍ら、のそりのそりと此場に歸り來たりける。

(大正一一・八・一九 舊六・二七 松村眞澄録)

(昭和九・一二・一八 王仁校正)

第一三章 姉妹教〔八七九〕

ブールは國依別一行と共に奥の間に端坐しキジ、マチ、エリナ、などより耳の痛い様なくすぐつたい様な御禮の詞を受け乍ら、どうぞ早くユーズがエスを此處へ連れて來て甘くやつてくれないかなア……と心待ちに待つて居た。

そこへユーズが拍子抜けのした顔をさげてやつて來たので、ブールは早くも其顔色を眺め、エスがもしや牢死でもしてゐたのではなからうか、萬々一そんな事があるものなら、如何して此場を甘く切り抜けようか、數百人の部下はあつても、何れも國依別に對しては、無勢力の腰抜計りだ。進退これ谷まつた……と心の中に獨り打案じ乍ら、ブールは餘所餘所しく、

「オイ、ユーズ、エス様は御機嫌ようみらせられたかなア」

「何時の間にやら御歴々方の御入來、ヤアこれはこれは國依別様、よくマア此茅

屋へみらせられました。何分親指がなつてゐないものですから、甘く滑車が運轉

致しませぬ。吾々も殆ど機關の油が切れて、聲を上げむ計りになつて居ます……

あなたは素敵滅法界なニスさま、どこからお越しになりましたか。天の河原に

玉の御舟を泛べ、月の鏡を懷中に入れ、黄金の棹をさして、お下り遊ばした棚機

姫様か、但は天教山の木の花咲耶姫さまの御降臨か、松代姫様の御再來か、何と

も云へぬ立派なお方で御座いますなア」

と追従たらだら述べ立てる。

「左様の事を尋ねて居るのでない。エス様は御機嫌うるはしくみらせられたか……

と云ふのだ」

「ハイ、教主様のあなたが發頭人で水牢へ打込み遊ばした、あのエスさまの事で

すかい。斯う申したと云つて、千座の置戸を負ふのは、人に將たる者の當然負ふ

べき職掌ですから、どうぞ悪く取らない様にして下さいませ。吾々一統はそんな

残酷なことをするものでないと御意見申上げましたのに、あなた様は首を左右に
傲然とお振り遊ばし、ジヤイロコンパスの様に目玉を急速度を以て回轉させ、チ
ツともお聞き遊ばさぬものだから、とうとうあの様な大惨事が突發したので御座
いますよ。あなたの仰有る通り、吾々が正直に守つて居るものならば、エスさま
は遠の昔、幽界の人になつてゐられるのですが、見えつ隠れつ、此ユーズが甘い
物を持運び……オット、ドツコイ教主さま、そんな六つかしい顔をしちやなりま
せぬぞ。すべて部下の罪惡を一身に引受け、一言も呟かないのが將たる者の襟度
で御座いますよ。マア兔も角、後は云はいでもお察しを願へば、國依別さま、エ
リナさま、大體判断はつくで御座いませう」
「ブール様、随分エスさまは苛酷的な御同情を蒙られたと見えますねい」
「さう言つて貰ひますと、何とも御返事の仕方が御座いませぬが、實の所はユーズ
が……」
「モシモシ教主さま、さう脱線しちやいけませぬよ。それでは教主たる價値はサ
ツパリ零ですよ。モウ斯うなる上は旗色の好い方へ従くのが利益だ。假令ブール

さまに何々せられても、構ひませぬワイ。國依別様に何々してドツとお氣に入り、結構な宣傳使にして貰つて、都合好くば、エーをに貰ふやうになるかも知れない。それだから、見えつ隠れつ、お父うさまの এসさまを大切にきて来たのだ。なア、エリナさま、斯う見えても、表は表、裏には眞に美はしい慈愛の涙を湛へて居る苦勞人で御座いますよ」

エリナは「へエン、左様ですかいな」と空にうそぶく。

「何を云つてゐるのだ。エス様を早く迎へて來ぬか」

「ハイ、何と云つても、流石はエスさまですよ。ヤツパリ私の睨んだ通り、偉いすな、見上げたものですよ。私が何程申上げててもビクとも動かうともなさいませぬワイ。丸で死んだ馬の様ですワ」

エリナはサツと顔色を變へ、

「エー、お父うさまが亡くなつたのですか」

「イエイエどうしてどうして、海老の様にピンピンシヤンシヤン撥ねまはつてゐられます。實の所を何もかもブチあけて申上げますが、今日迄大變にブルさま

の命令に依つて虐待をして居りましたが、あなた方がお出でになつたと云ふので、レコの大將、ブルブルと地震の孫の様にふるひ出し、大に蒟蒻（困惑）致しまして、俄思ひ付の一芝居、エスさまを、あなた方よりも一足先ここへ出て来て貰ひ、酒でもドツサリ吞まして嵌口令を布き、ヤツと此場の芥を濁さうと遊ばしたのですが、お前さまの來やうが餘り早かつたものだから、すべての計畫が喰ひちがひ、たうとう晝餅になつて了つたのです。子供か何その様に、酒位吞まして機嫌をとり、今迄の虐待振を隠さうと思つても、駄目なことはきまつてをるのに、あわてた時と言ふものはそれ位の知慧より出ませなんだワイ。本當に餘り教主様の知慧が薄つぺらなのは、部下一同コンにやく否困惑の體で御座います。決して決して此ユーズが悪いのぢや御座いませぬ。一番先にエスを入れようと發起したのはユーズぢや御座いませぬから、其お積りで願ひますよ。そしてエスさまは何もかもチャンと御存じで、あなたのここにお出でになつた事も【とうし】だとか、すいのうだとかで、よく御承知で御座いましたよ。こんな結構な御みとの中において貰うて、誰が出るものか、千年萬年經つたとて、いつかな動きは致さぬ

と、それはそれはエライ頑張り様で御座います。察する所教主のブールさまが、エ
スさまのお側へ自らお出でになり、頭を下てお詫をなさらねば到底お出ましにな
る氣遣ひはありませぬワ」

「ブールさま何うでせう。國依別が直接エスさまの居られる所へ参りましたら…
…さうでなければ、年寄の片意地、中々動きましますまいで…」

「あんな所を見られましたは、誠に濟みませぬ。是から私が参つてお連れ申して
來ますから、どうぞ此處に暫く待つてみて下さいませ。…サア、ユーズお前も
出て來い、又せうもない事を喋ると可けないから…」

「さうでせう。私がここに居りますのは、定めて御都合が悪い事ぢやと、前以て
承知致して居りますワ」

「サア皆さま、行きますせう。ユーズさま、案内して下さい、エリナさま、これか
ら戀しいお父うさまに會はして上げませう。御喜びなさいや」

「ハイ、有難う御座います。何分宜しく御願申します」

茲にユーズを先頭に、ブールを始め、國依別の一行は地底の薄暗き水牢の傍に

探り探り立寄り、

「私は三五教の國依別と申す者で御座います。あなたはウラル教の宣傳使であり乍ら、よくもマア三五教の宣傳使を御世話して下さいました。其爲あなたは斯様な所へ押込められ、さぞさぞ御難儀な事で御座いましたでせう」

エスは涙を流し乍ら、

「ハイ、有難う御座います。よう来て下さいました。實は昨日迄、非常な、そこに居りまするユーズの奴、虐待を加へましたが、俄に態度が一變し、最前も最前とて、追従たらだら、私を引出し、今迄の惡逆無道の帳消しの材料にせうと云ふ様な、ズルイ事を考へて來た事が分りましたので、ワザと頑張つて、千年萬年もこんな結構な御みとは出ないと意地張つてやりました。さうした所が、それを眞に受けて心配を致し、頼むの頼まないのつて、實に氣の毒なやうでした。誰だつて、斯様な所に半時の間も居りたいものが御座いませうか、御推量下さいませ」と云ふ聲さへも、涙に濕つて聞えて居る。エリナは之を聞くよりワツと計りに其場に泣き伏した。ユーズは周章で抱き起し、

「もしもしエリナ様、シツカリなさいませ。此親切なユーズが御介抱致しますれば、モウ大丈夫で御座います」

「エー父の仇敵、物言ふも汚らはしい、私の體に觸つてお呉れな」と言ひ乍らドンと突き放した。途端に牢の入口が折よく開いてあつた爲、忽ち牢の中の水溜りへ眞逆様にドボンと落込んで了つた。

エスは其隙に早くも牢内を驅出し、外から入口の戸をピシヤリと締め、錠を卸して了つた。ユーズは水溜りより這ひ上り、

「モシモシ開けて下さい、私で御座います」

「お前だから、放り込んだのだよ。サア今迄エス様をいろいと讒言致して罪におとした其方の事だから、今日から罪亡ぼしにエス様の代りに水牢住ひを致すのだ。天罰と云ふものは恐ろしいものだ。現在エスさまの娘エリナさまに押込まれただぢやないか。是も決してブルがしたのぢやない。お前の罪が重なつて、お前を水牢へ投込んだのだよ」

「それは餘り胴欲ぢやムいませぬか。一寸外に忘れた物も御座いますなり、アナ

ンに會うて言ひたい事も澤山ありますから、這入れなら這入りますから、一遍丈出して下さいな」

「ならぬならぬ、自分の悪事を残らず、教主は千座の置戸を負ふべきものだ。なぞと申して、國依別様一統の前でブールの讒言を致したであらう。その様な大悪人を外へ放養するのは、モールバンドを野に放つたやうなものだからのウ」

「お前さま、チツと其處で修行をなさいませ。何程辨解したつて駄目ですよ。此

エスがお前さまの部下に、門の入口で捉まへられ、教主様の前に引出された時、

教主は何と仰有つたか、覺えて居るであらう。あの時の御言葉に……ユーズ、お

前はエスをさう悪く言ふけれど、チツとは考へてやらねばなるまい。世の中は相

身互だから、假令三五教の宣傳使の宿をしたと云つて、そんな小さい事を云ふも

のでない、許してやつたがよかると仰有つた時には、俺も有難涙が零れたのだ。

それに貴様が駄々をこねて、教主からして、そんな規則をお破りになるのならば、

此ユーズは數多の信徒を一人も残らず引率して、バラモン教に入信し、此館を轉

覆させて了ひますと云つて、脅迫し、遂に已むを得ず、教主も俺をこんな所へ放

り込む事を黙許されたのだ。さうだからお前が悪の張本人だ。お前さへ斯うして何時迄も茲に蟄居して居れば、三五教とウラル教は心の底から解け合うて、互に長を採り、短を補ひ、姉妹教となつて、仲よく神業に参加する事が出来るのだ。サア皆さま、何時迄も斯んな所に居つても仕方がありません。どつかへ参りませうか」

ブルは、

「どうぞ私の居間迄御越し下さいませ。御案内致しませう」と先に立つて、吾居間へ歸り行く。後にユーズは聲をあげ、

「オーイ オーイ、助けて呉れ 助けて呉れ」

と呼ばはつて居る。一同は委細構はず、ブルの居間に歸り來つて、葡萄酒を與へられ、甘さうに、四方山の話に耽り乍ら、飲ンである。少時らくあつて、教主は奥の間よりいかめしき祭服を着し來り、

「サア御一同様、私は是より神殿へ参ります。どうぞあなた方も御参り下さいませ」

國依別以下は打うなづき乍ら神殿に進み、ブル導師の下に神言を奏上し、終つて再び奥の間に引返し、ブルは心の底より改心の意を表し、國依別の裁決して、日暮シ山の花と謳はれ、遂に三五教を樹て、ブルの妻となり、ヒルの神館と相提携して、ヒル、カル兩國に亘り、大勢力を擴充し、萬民を救ひ助け芳名を轟かしける。

ユーズは百日の間の苦行をさされた上、許されて、再び神に仕へ、アナンも亦陷穽の底より救ひ出され、悔い改めて神の道に清く仕へ、一生を安く送る事とはなりぬ。

茲に國依別は四五日逗留の上、キジ、マチの兩人を従へ、日暮シ山に別れを告げ、山野河沼を渡り、ブラジル峠を指して、宣傳歌を歌ひ乍ら進み行く。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・八・一九 舊六・二七 松村眞澄録)

(昭和九・一二・一八 王仁校正)

第三篇 千里萬行

第一四章 樹下の宿（八八〇）

波なみに浮うかべる高砂たかさこの ヒルとハルとの國くに依別よりわけが

險けはしき山やまをよぢ登のぼり 安彦やすひこ、宗介むねすけ兩人りやうにんを

從したがひ登のぼるブラジルの 細ほそき谷間たにまを打渡うちわたり

夜よを日ひについではるばると ハルの原野げんやを打涉うちわたり

アマゾン河がはの森林しんりんに 思おもはず知しらず迷まよひ込こみ

鷹依たかより姫ひめの一行いっかうや 高たか姫ひめ一行いっかうに巡めぐり會あひ

モールバンドの怪獸くわいじうを 言こと向むけ和やはし萬民ばんみんの

さも恐おそろしき災禍わざはひを 除のぞき清きよめし物語ものがたり

いよいよ茲に述べ立つる。

國依別はキジに安彦といふ名を與へ、マチに宗介と云ふ名を與へ、道々三五の教を説き諭し乍ら、其昔於滕山津見司が、木の花咲耶姫の化身なる蚊々虎と通過したる、ブラジル峠の山頂に息を休め、それより大原野に出づる事となつた。

國依別一行はブラジル峠の山麓にて日を暮らし、大木の根元に夜露を凌ぎ一夜を明かす事となりぬ。

國依別、安彦は他愛もなく旅の疲れに、よく眠つて居る。宗介は何となく、胸騒ぎがして、マンジリとも得せず、二人の間に挟まつて、横たはつて居た。忽ち聞ゆる猛獸の聲、心飛び魂消ゆる計り、其厭らしさに宗介は、戦慄堪へ切れず、安彦の體にしつかり喰ひ付き、夜の明くるを一刻も早かれと祈つて居た。

夜明に間近くなつたと見え、猛獸の叫び聲は何時とはなしに消えて了つた。折柄二人の男、大木の株に腰をかけ、ヒソビソ話に耽つてゐる。同じ一本の大木と雖も、五十丈許りも周つた幹、一方の方には三人が他愛なく横たはつて居るのも、

一方に腰打かけてる二人の目には止まらうやうもなかつた。

どこともなくヒソビソ話が耳に這入つて來るので宗介は、ソツと空をすかし乍ら、聲する方に近寄つて耳を立てて、一言も洩らさじと聞いて居る。

「オイ秋……ここまで捜しに來たのだが、モウ駄目だぞ。日暮シ山では、ハル、ナイルの兩人に追ひまくられ、様子を聞けば國依別は今朝程立つたと言ひよつたので、何人連れかと聞いて見れば、指を三本出して居やがつた。的切り、ク印と工印を連れてノホホンで、宣傳を「だし」に天下を漫遊すると云ふ考へだ。俺も男の意地で、假令命がなくなつても、彼奴の後をつけ狙ひ、國依別の隙を窺ひ、谷底へでも突き落とし、二人のナイスを此方のものにせぬことには、阿呆らしうて、世間へ顔出しも出來ぬぢやないか。最早行方が分らぬと云つて此儘泣き寝入る譯にも行かず、何とか工夫はあるまいかなア、秋さま」

「モリ公、お前も中々執着心が深いねい。こんな所迄スタスタと尻を付けて來るのだから、こんな連中に狙はれた女こそ、蛇に魅入られた蟆のやうなものだよ。本當に思へば思ふ程、二人の女が可哀相になつて來た。俺もここまで心猿意馬の

狂ひに引かされて、来るは来たものの、何時の間にか、心の猿も思ひの馬も、どつかへ、愛想をつかして、絶望を叫び、歸つて了つたやうな氣分になつて来た。

モウ仕方がない、是から後へ引返さうぢやないか

勝手にせい、俺は何處迄もやり遂げるのだ。男がのめのめとどの面さげて、國許へ歸る事が出来ようかい

併し何程二人の女に懸想して居つても、國依別の居る以上は駄目ぢやないか。彼奴を如何かして……

と云ひ乍ら小聲で何か耳のはたで稍暫し囁いて居る。宗介は何うしても其聲が餘り低いので聞えなかつた。

……此處を一里計り先へ行くと、丸木橋がある。相當に深い谷川で、そこへ落ちようものなら、どんな太い男でも五體がメチャメチャになつて了ふと云ふ事だから、今の中に先へ廻つて、其橋のつっぱりを取り、國依別が一足跨げるや否や、バサツと落ちる様に工夫をせうぢやないか。藤蔓か何かで、橋の一方を括つておき、國依別が跨げるや否や、谷底へ隠れて居つて、其綱を引くのだ。さうすると、

ズ、ズ、ズドン、ウン、キヤア……とそれつきり、憐れなりける次第なりけりだ。
さうせうぢやないか」

「それ程骨を折つたつて、國依別の通つた後だつたら、骨折損の草臥儲けになつて了うぢやないか」

「ナアニ、大丈夫だよ。半日位先に出たと云つても、向うは足弱女を連れてるんだし、此方は健脚家計りのお揃だから、キツと俺の方が先へ勝つにきまつてる。

彼奴はまだ二三里位後に女と意茶ついて居よるに違ひない。サア早く行かぬと、追ひつかれると大變だぞ。作業が済まぬ中に來よつたら何にもならぬからなア。

もしも女が渡りよつたら、黙つて渡してやるのだ。國依別が足を二歩三歩かけよつたが最後一イニウ三ツで引張るのだ。何と秋さま、妙案だらう」

「一人の女が先に立ち、國依別が中に立ち、又一人の女が後にあり、一時に單縦陣を作つて渡りよつたら、何うするのだ。それこそ虻蜂取らずの草臥もうけにな

つて了うぢやないか」

「そこは又は其時の風が吹くぢやないか。假令落込んだ所で、チツと位怪我をし

ても、三人が三人乍ら死ぬ氣づかひはないワ。そこで國依別は目をまかす、そ知らぬ顔して放つとけばそれで仕舞だ。二人の女には水を吞ませ、介抱し……コレ旅の御女中……とか何とか云つて助けてやる。さうすれば紅井姫が、俺達に命の親様と云つて、秋波を送つて「クレナイ」事もあるまいぞ。現に國依別がラバーされたのも大地震の時に助けてやったのが原因ぢやからのウ」

「それもさうだなア。サア早く往つて準備に取りかからうかい。グツグツして居ると六菖十菊、後の祭りで、何にもならないワ。オ一、二、三！」

と、細き谷路を、怪しげにすかし乍ら、進んで行く。

「何だか俺は今夜に限つて寝られないと思へば、秋山別、モリスの兩人、あんな悪い事を企んでゐやがるのだなア。それも天罰に俺達に聞えるやうにすつかり喋つて行きよつた。神様が彼等兩人がこんな計畫をして居るからと、俺に靈をかけ、ねかさなかつたのだナ。何と神様の恵はどこからどこ迄も行届いたものだ。誰も知るまいと思つて、悪い事を企むと、何事も此通りだ。天知る地知る吾れも知る、

むねすけまで
宗介迄が知ると云ふのだから、怖いものだなア。ドレドレ此秘密を聞き取つて手
柄話を國依別様に報告せうかなア……イヤイヤ待て待てさう早く云ふと値打がな
い。橋の詰まで行つた所で、國依別さまが足をかけようとなさつたら……モシ御
待ちなさい、私の天眼通で見れば、此橋は浮橋ですから險呑です。秋、モリの二
人が綱を引張つて居りますから……と抱止めるのだ。さうすると國依別さまも喜
びて、宗介と替へて下さつた名を又、昔の名の宗彦さまと替へて下さるかも知れ
ぬ。おゝさうだ言はぬが花だ」

と調子に乗つて、何時の間にやら、高い聲で囀つて居る。安彦は目をさまして、

「オイ宗介、貴様は甘い事を考へて居よるなア」

宗介小聲になつて、

「オイ、お前聞いたのか。大將に内證だから其積りで居つて呉れよ」

安彦殊更大きな聲で、

「一本橋をどうしたと云ふのだい」

「喧しう言はずに休まぬか。秋、モリの兩人が、今頃にや丸木橋をおとす作業中

だ。面白いぢやないか」

「宣傳使様、あなた御存じですか」

「初からスツカリ聞いて居る。宗彦と云ふ名に替へてやらうか」

「イヤもう有難う御座います。どうぞ宜しうお頼み申します」

「そんなら、一段位を上げて、只今から宗彦と名を與へる」

「ア、何とも御禮の申様が御座いませぬ……オイ安彦どうだい、只今から、お前

も俺も同役だ。餘り偉相に弟扱ひには出来ないぞ」

「俺は彦を貰つてから三日になる。貴様は今貰つた所ぢやないか。雙兒が生れて

も兄弟の區別がつくのだ。現に三日も違ひがあるのだから、ヤツパリ弟だよ」

「エ、仕方がないなア。ぢやドツと讓歩して表面だけ弟になつておかうかい。其

代り兄は兄丈の甲斐性がなくてはならず、弟を可愛がつて大切にせねばならぬ責

任がある。弟が弱つて居れば、手を引いてやつて勞はり又負うてやらなきや、兄

貴の値打がないからなア」

「コラコラ喧しう云はずに休まぬか。まだ夜明にチツと間もある。ゆつくり茲で

休やすんで、夜よが明あけてからボツボツ行ゆくのだ。何いづれ彼あいつ奴ら兩人りやうにんは谷底たにそこの木きの茂しげみに隠かくれて居ゐるに違ちがひないから、お前まへ等ら兩人りやうにんは女をんなの聲色こはいろを使つかつて行ゆくのだよ。さうして三人共さんにんとも甘まく、渡わたつて了しまうのだよ」

「二人ふたりの女をんなに三人さんにんが聲色こはいろとは、チツと變へんぢや御座ござりませぬか」

「そこは二人ふたりになるのだ。國依別くによりわけが紅井くれなゐ姫ひめの聲色こはいろを使つかひ、安彦やすひこは弟おとうとの宗彦むねひこを背せな中なかに負おひ、さうしてエリナの聲色こはいろになつて、渡わたりさへすれば大丈夫だいぢやうぶだ。渡わたつて了しまつてから、各自めいめいに男をとこの聲こゑで大笑おほわらひをし、ビツクリさしてやるのだ」

「國依別くによりわけさま、あなたは眞面目まじめな宣傳使せんでんしに似にず、隨分ずいぶん惡戲いたづらが御好おすきですなア。こんな男をとこを、私わたしだつて背せな中なかに負おうて一本橋いっほんばしが渡わたられませうかなア」

「あの様やうな惡わるい事ことを企たくむ奴やつには、此方こちらも一ひとつからかつてやる位くらいは良よいぢやないか。まさか違ちがへば生命いのちを取とられる所ところぢやから……そしてお前まへは宗彦むねひこを背せな中なかへ括くくりつけ、もしも誤あやまつて落おちた所ところで、國依別くによりわけに於おいては、痛いたい事こともなけければ痒かゆい事こともないのだ、

アハ、ハ、ハ、ハ、」

安彦やすひこ首くびを傾かたむけ、國依別くによりわけの顔かほを見詰みつめ乍ながら、

「ヘーン、何とマア水臭い御方ですなア」

「何れ、谷川を渡り谷水の中へおちるのだもの。ちつたア、水臭からうかい。谷底には水の御霊が待つて居つて、はまつた所で、手を受けて助けて下さるから大丈夫だよ。そんな取越苦勞はするものぢやないよ。あゝ待ち遠しい事だ。宣傳使様モウそろそろ出かけたら如何でせう」

「今二人が行つたばかりぢやないか。あの深い谷川の橋杭を取つたり、蔓をつけて引つ張る用意するのは、一時や二時の猶豫で出来るものぢやない。茲でゆつくりしてアフンとさしてやる方が面白いぢやないか。別に半日位遅れたつて、遅刻の罰金を取られるのでもなし、マア先を樂んで、ゆつくり休んで行かう」

「何と宣傳使と云ふものは大膽な者ぢやないか、ナア宗彦。現在敵が落橋準備をやつてゐるのに、平氣であの通り、横になるが早いが高躰をかいで寝て了はれた。俺達はまだ執着心が離れぬので、命が惜しくて、敵が前に殺人準備をやつて居ると思へば、どこともなしに心氣興奮して寝られないがなア」

「國くに依より別わけさまと安物やすものの安彦やすひこと比べくらやうとするから、そんな疑問ぎもんが起おこるのだよ。活いき

神がみさまと製糞器せいふんきとは同じ様おなじやうにはいかぬワイ」

「俺おれが製糞器せいふんきなら、お前まへも製糞器せいふんきぢやないか」

「お前まへは製糞器せいふんきだよ、この宗彦むねひこは糞造器ふんざうきだ。同じ意味おなじいみの様やうだが、そこに一寸違ちよつとちがう譯わけがあるのだ。アハ、ハ、ハ、」

と笑わらひ乍ながら、大木たいぼくの周圍まわりをクルクルと繞めぐりつつ夜明よあけを待まつ事ことにした。漸やうやくにして、東ひがしは白しろみ出だし、百鳥ももとりの聲こゑ、あたりの森林しんりんより、かしましく聞きえ來きたる。青葉あをばを渡わたる旦あしたの風かぜは、得えも言いはれぬ涼味りやうみを惜をしげもなく、三人さんにんに向むかつて吹ふきつける。いよいよ一行いっかう三人さんにんは足仕度あしじたくをなし、谷たにの細路ほそみちを傳つたひ、丸木橋まるきばしに向むかひ進すすみ行く事こととはなりにける。

(大正一一・八・一九 舊六・二七 松村眞澄録)

三人は勢込で、秋、モリ二人の計略の裏をかいてやらむと、ホクホクし乍ら進んで行く。此方の山裾から向方の山裾に渡る相當に深い谷川に、長さ四間位な丸木橋が架かつてゐる。

「サア戰場に近寄つた。兩人共に、ここで女の聲を出して宣傳歌を高らかに歌うのだぞ」

「女の聲を出さうと思へば、自然低く細くなるなり、向方の奴に聞える様にせうと思へば地聲が出るなり、安彦も困つたものですワ」

「ナニ、神様の守護で、キツと鶯の谷渡りの様な聲が出て来るよ。そこが言靈の妙用だ。……サア行かう、腹の底から出さず、乳のあたりから聲を出すのだ」と細き涼しき松蟲のやうな作り聲で、一本橋の袂に差かかり、

「神が表に現はれて 善と惡とを立分ける

此世を造りし神直日 心も廣き大直日
只何事も人の世は 直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直せ 戀しと思ふ國さまは

どこにどうして御座るやら お前等二人は俺よりも

一足先へと言はしやつた さぞ今頃はどこやらの

ナイスに袂を引つぱられ 放してお呉れと國さまは

紅井姫やエリナ姫 天女のような妻がある

お門が廣い早放せ なぞと困つて御座るだらう

私の戀は奥山の 細谷川の丸木橋

渡るはこわし渡らねば 心の底から惚切つた

秋山別に會はれない 秋山さまも情ない

惚た弱味で厭さうに ピンとはねたら眞にうけて

怒つて御座るか自烈たい 私の誠の心根は

國依別の四十男 親と子程違ふのに

どうしてそれが惚られよ 惚たと云ふは表向き

又もりさまも氣が利かぬ 假令田舎の娘でも

エリナと云つたら界限で 指をさされた此ナイス

男心をこころと秋あきの空そら 私わたしの腹はらが知しらしたい

秋山あきやまさまも餘あんまりぢや モリスさままで私わたしをば

情つれない女をなこと誤解ごかいして 怒おこつて御座ござるか情なさけない

天津神あまつかみ様さま八百萬やほよろづ 國津神くにつかみ様さま八百萬やほよろづ

假令たとへ野山のやまの果はてまでも 秋山あきやまさまやモリスさま

後あとを慕したうて尋たづね行き 嫌いやと言いはれよが如何どうせうが

思おもひ込こみたる此この戀路こひぢ 石いしの唐からと枢かにかくるとも

搜さがし出ださねばおくものか あゝ惟かむながらかむながら神々々

神かみの御靈みたまの幸さちはひて 秋山あきやまさまやモリスさま

尊たふとき御顔おかほを伏ふし拜をがみ 手てを引ひき合あうて行いけるなら

此橋このはし無事ぶじにやすやすと 向方むかうへ渡わたして下くだされや

私わたしが戀こひを仕し遂とげるか 仕しとげられぬか此橋このはしが

私わたしに取とつての辻占つじうらぢや もしも渡わたれぬ其時そのときは

秋山さまに添はれない　モリスさまにも會はれない
女の心と云ふものは　好きで叶はぬ男をば
厭ぢや厭ぢやとはねつける　これが私の弱點ぢや
一そ肝玉放り出して　秋山さまが言ひよつた
時に頭を縦に振り　ウンと云ふときやよかつたに
どうやら男の居りさうな　香がブンとして來たぞ
ホんに危ない丸木橋　エリナ用心なさりませ

安彦は又唄ふ。

い　いえいえ私は大丈夫　姫さまあなたは足弱ぢや
どうぞ氣を付けなされませ　もしも誤り谷川に
落ちて生命を棄てたなら　秋山さまに申譯
どうしてどうして立ちませう　あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ^{みたまさち}」

秋、モリの二人は丸木橋に太い藤づるを括りつけ、國依別の聲を合圖に「^{あき}二ウ三イ^ふ」で引張りおとさうと、手具脛ひいて待つてゐる。橋の袂に立ち止まつて女の歌が聞えてゐる。よくよく歌の文句を考へて見れば、思ひがけなきかぐはしい歌である。

「ヤツパリ女はこんなものかいな、モリス。モ一^{をんな}つ押強く行けば成功したのだけ^{ひと}れど、餘りスエートハートした弱味に、ヨウ思ひ切りやらなかつたのが此方の不^{あんな}調法だ。流石は俺が思ひ込む丈あつて、優しい姫様だワイ。始めて美はしい御心^{さすが}中を承はり、これで死んでも得心だ。あの歌の文句で考へて見ると、國依別の奴、^{うけたま}どつかで又道草を食ひよつて、スベタ女にチャホヤされて、涎をくつて、脂下^{また}がつて居よるのだらう。見切りのよい、前の見えるお姫さまは、たうとう國依別に^{あいさう}愛想をつかし、俺達二人が先に行つたと云ふ事を、誰かに聞いて、はるばるとや^{おれたちふたり}つて御座つたのだな。併しあんな事を云つて、國依別が交つて居るかも知れぬ。

何分斯う樹木が茂つて居つては、聲は聞えても姿は見えぬのだから、都合の好事がある代りには、又都合の悪い事があるワイ。のうモリ公こうと小さい聲でブツブツ囁つて居る。

國依別は女の聲にて、

國依「エリナさま、私、此一本橋、どうして渡りませうかね。足が慄ひますワ」

安彦「嬢さま、御心配なさいますな。エリナがついてをります。此丸木橋さへ御渡りになれば、姫様の心の底から御慕ひ遊ばす、秋山さまにキツと會はれますよ。私だつて一目見そめたモリスさまに會うて、心の丈を申上げねば、どうして此儘歸れませう。あの好い男グズグズして居て、外の女に取られて了つちや大變ですからねイ」

國依「さうねい、さうなら、そつと渡りませうか。何だかグキグキして怖い橋だ

ワ」

安彦「御心配なさいますな。國依別のやうな悪人が通つたら、神様が綱を引ばつておとし遊ばすかも知れませぬが、女が可愛い男の後を追うて行くのですもの、

丸木橋だつて、落さうな事はありません。秋山別さま、モリスさまの一心でも、落さぬやうに守つて下さいませぬこと分つて居ますワ」

國依「此橋渡ると秋山さまに會へるの……、私嬉しいワ」

安彦「それは其筈で御座います。私だつて、あの色の黒いモリスさまにさへも是

丈こがれて居るのですもの。秋山さまのやうな立派な男に御惚遊ばしますのは無

理も御座いませぬワ。ホ、ホ、ホ、」

國依「ホ、ホ、ホ、お、恥かしい、モシ、エリナさま、是きりで云はないやうにし

て下さいや。サア早う参りませう」

と云ひ乍ら、國依別一行は恙なく橋を渡り、谷路の木の茂みにかくれて膝栗毛に

鞭をうち、四五丁計り驅け出したり。

「アハ、ハ、ハ、ズイ分甘く行つたねい。ヤツパリ吾々を女だと思つて居るらしい

よ、一つ此木の皮を削つて、何とか印をしておかうかいナア、兩人」

安彦は、「ハイ、宜しう御座います」と短刀を取出し、若き櫂の皮を少しく削

り、あたりに實つて居る烏羽玉の實を手に取り、其汁にて、

紅井姫、エリナの兩人ここを通りました。萬一、秋山別さま、モリスさま、妾よりお後で御座いましたら、どうぞ追っかけて来て下さいませ。さうして橋を國依別の来ない様に落して来て下さいませれば、尚々安心です。……御兩人様……かよわき女よりと書きしるした。

「アハ―此奴ア面白い、國依別が先繰り先繰り剥き木をして、至る所に印を入れ、どこ迄もお伴をさしてやらうかな。さうすれば何時の間にかは改心するだらう。」

アハ、ハ、ハ、

秋、モリの二人はあわてて谷底より橋の向ふ側にかけ上り、

「オイ、モリス、確に紅井姫にエリナの聲だつたが、併しスウスウと渡つて了ひ、何とはなしに變哲がないぢやないか。時鳥お聲は聞けど姿は見えぬ、秋モリの金神蔭から守りてをりたぞよ。此事分りて來たら、いかな紅井姫も、エリナもアフンと致して改心を遊ばすぞよ……そないしてまで守つて下さつたか、ここは世界の大橋、此處を渡らねば誠の男には會へぬぞよ。西と東とに立わけて、神が守護

がしてあるぞよ、神は嘘を申さぬぞよと、三五教のお筆先もどきに、キツとお姫さまが秋モリの金神の御神徳を讚歎し、御喜び遊ばすにきまつてるワ、今聞えた、あの聲、さう遠くは、女の足で、行つては居られまい。サア早く膝栗毛に鞭をうつて進まうぢやないか。谷間の一筋道、メツタに間違う氣遣ひはあるまいて、

君はまだ遠くは行かじ吾袖の袂の涙かわき果てねば

とか云ふ歌があるぢやないか。キツと遠くに行くまい。サア驅足々々」

オツチニオツチニと四股ふみ乍ら、僅に足を入る計り、細くついた谷道を登り行く。三尺計り廻つた、櫂の若木の皮を剥いて、何だかしるしてある。能く見れば、案に違はず、紅井姫、エリナの二人がここを通り、……どうぞお二人共、まだ後ならば、此印を見てついて来てくれ……と云ふ意味の文面を見て、二人は躍りあがり、

「ヤア、有難い有難い、是れだから、どこ迄もやり通さねば、戀の難關は越えられぬと云ふのだ。サア、グツグツしては居られまい、早く行かうぢやないか。モウーきばりだ。さうすればキツと追ひ付けるにきまつてるワ」

と又もや驅出す其可笑しさ。

國依別一行は二人の必ず後を追つかけて来るに相違なしとコンパスに油をさし、喉の汽笛に水をドツサリ注入し巴奈馬運河を無事通過させ乍ら、一生懸命に驅出し、コンモリとした山桃の大木を見つけ、猿の如く三人は驅あがり、樹上に胡坐をかき山桃の水の垂る様なのを、「むし」り取つて食つて居る。枝葉密生し、どうしても下から、見ることは出来なかつた。

秋、モリの二人は喉をかわかせ、

「オイ、モリス、是れ丈急速力でやつて来たのに、追つつかれない筈はないぢやないか。俺やモウ喉の汽笛が鳴り出した。此上一尺だつて歩けやしない。幸ひそこに山桃の甘さうな奴がなつてるぢやないか。ここで一つ山桃でも取つて喉をうるほして行かうかい」

「さうだなア、秋山別、随分甘さうだ。マアゆつくり一服して往くことにせう。姫さまだつて足を痛め、傍の森の中で休みて御座つたのを知らずに此處まで来たのかも知れないよ。さうでなくては、俺達が息が切れる程始終苦節の大速度大急

行でやつて来たのに、追つかぬ筈がない。マアゆつくりと此處で待つことにせうかい。キツと其間にはお出遊ばすに定まつてゐるワ。確に女の手であの通り書いてあつたなり、橋をお渡り遊ばす時のあの聲つたら、今思ひ出しても涎が落つるやうだ。あゝ本當に可愛いお姫様だなア。兔も角ここへお通りになる迄、此木の下で休むことにせう。登つて見たら、ズイ分甘いのがあるだらうけれど、木登りする奴と、飛行機に乗る奴と廣い街道を軒下歩いて看板で頭打つ奴程馬鹿はないと云ふから、マア木登りは止めにして、低く垂れ下つた甘さうな山桃をとつて辛抱せうかい

と云ひ乍ら、低き枝の半熟の山桃を「むし」り、ムシヤムシヤと喉をしめし、腹をふくらせ、今か今かと首を長うして待つて居る。

三人は樹上にて互に顔を見合せ、口を押へ、物を言ふなどの合圖をし乍ら、二人の立ち去るのを、もどかしげに待ち居たりける。

(大正一一・八・一九 舊六・二七 松村眞澄録)

(昭和九・一二・一八 王仁校正)

第一六章 天狂坊（八八二）

國依別一行は山桃の木の頂點に三つ巴となつて息をころし、早く樹下の二人の
此處を立去れかしと、心中私かに祈つて居る。三人が樹上に隠れてゐるとは、神
ならぬ身の知る由もなく秋、モリ二人は、木の根株に腰を打かけ、

「オイ、モリス、何と不思議な事があればあるものぢやないか。現に丸木橋を歌
を歌つたり、話合つて通つたのも確實だ。又櫂の木に書おきがしてあつたのも、
又夢でもなければ、幻でもない。さうすれば何うしても此道を來なくてはならぬ
筈だ。何程足が早いと云つても、女の足でさう早く行ける道理もなし、大方天狗
にでも抓まれたのではなからうかな」

「ナア二秋山別、そんな氣遣ひがあるものかい。キツと此處へ出て來るに違ひな
いワ。それにしても、小氣味のよい事ぢやないか。國依別が後追つかけて來ると
うるさいから、秋さま、モリさま、あの一本橋を落して下さい……なんて、小ま
しやくれた事を書いてあつただぢやないか。俺やモウあの一言でサツパリ得心して

了つたよ。併し乍ら大分に諦めかけて居つた俺の戀は、再燃して炎々天を焦し、
咫尺暗澹、疾風迅雷目を蔽はれ、耳を聳せられ、精神恍惚として、魔風戀風に包
まれて了つたようだ。それにしてもあの橋位落した所で、國依別の奴、二人の後
を嗅ぎつけてやつて来るに相違ないワ。一層の事、國依別が茲へ来るのを待ち受
けて脅かしてボツ返してやらうか。それに付いては幸ひ、此山桃の木だ。此上へ
あがつて天狗の聲色を使ひ、唸鳴りつけてやつたら、流石の國依別も思ひ切つて、
引返すに違ない。なんと妙案だらう。サアやがて来る時分だ。登らう登らう」
と木の幹に手をかけ、一間計り登りかけた。

國依別はコリヤ面白くない。俺の方から一つ天狗になつてやらうと、心の中に
決心し、破れ鐘のやうな聲を張上げて、

「ウー」

と唸り出し、

「此方はブラジル山の天狗、天狂坊であるぞよ。數萬年來山桃の木を住家と致
し居るにも拘はらず、汚れ果てたる人間の身を以て、此木に登れるなれば、登つ

て見よ。股から引裂いて了うぞよ。ウー

二人は俄に顔を眞青にし、

「ヤア此天狗は神王の森の天狗とは餘程實のある奴だ。グツグツして居るとどんな目に合ふか知れぬぞ。オイ、モリ公、お詫をせうぢやないか」

モリスは慄ひ乍ら、

「モシモシ天狗様、秋公が登らうと云つたので御座います。私は決してそんな失禮な事は致す考へは御座いませぬ。どうぞ許して下さいませ」

「其方は三五教の宣傳使國依別が、一本橋を渡る隙を考へ、橋を落さうと致した大悪人、容赦はならぬぞ」

「ハイハイ、誠に濟まぬ事を致しましたが、これもヤツパリ秋公の戀の懸橋をおとした國依別で御座いますから、仕方がなしに落さうと致しました。併しそれが爲國依別が怪我をしたので、死んだのでありません。どうぞ神直日大直日に見直し聞直して下さいませよう御願致します」

「其方は二人の女の行方を知つて居るか」

「ハイ、確にあの丸木橋を渡り、こちらへ来た筈で御座いますが、どこに沈没致しましたか、未だに行方不明にて搜索の最中で御座います。どうぞ御慈悲を以て彼が所在を御知らせ下さいませれば、誠に以て有難き仕合せと存じ奉ります」

「汝が尋ぬる二人の女と申すのは、紅井姫、エリナの事であらう」

「ハイ御存じの通り、其女で御座います。今はどの邊に居りますか、どうぞ附け上りました事で御座いますが、一寸お知らせ下さいませれば大變に都合が宜るしう御座ります」

「其女は日暮シ山の山麓、ウラル教の館に、兩人共機嫌よく暮して居るぞよ。何を踏迷うて斯様な所へ出て来たのか。大盲奴」

「オイ、ヤツパリ日暮シ山の岩窟かも知れぬぞ。今天狗さまが、あゝ仰有ると、俺も矢張そんな心持がして來だしたよ」

秋、小聲で、

「馬鹿云ふない、あの通り立派に女の手で書残しもしてあるなり、現に一本橋を渡る時の聲を聞いたぢやないか。此天狗さま、何を云ふか分りやしなないぞ。野天

狗と云ふ者は嘘計りいふものだから、ウツカリ信用は出来ないぞ」

「此方の申す事をまだ疑うて居るか。それ程疑ふのなら、許してやるから、トツトと此木の上へあがつて来い、天狗の正體をあらはし、アフンとさしてやらうぞ」

「メ、滅相な、決してウ、疑は致しませぬ。天狗さまに間違ひいませぬ」

「其方が神王の森に於て出會つた天狗とは種類が違ふぞよ。天狗と云ふ者は千變萬化の働きを致すものだ。又其國々の、【國】魂に【依】て【別】られてあるから、チツとは調子も違ふぞよ。餘り口答へを致すと、一つ目の剥ける様な目に會

はしてやらうか。【キジ】キジも鳴かねば【安彦】とうたれはせうまいぞ。【マ

チ】マチに其方の心がなつて、統一一致さず【宗】が【彦々】、宗彦と動いて居るから、チツと氣を落つけて考へたがよからう。此山桃の【モリス】に立寄り、口

を【秋】、【山】をアフンと致して眺め、【別】の分らぬ面付で、何程女の後を

捜したとて、分りさうな事はないぞよ。サア早く迷ひの夢を醒まし、一時も早く

ヒルの國へ歸り、楓別命にお詫を致して、歸參を許して貰ひ、神妙に神界の御用

を致すがよからうぞ。ウー」

斯かる所へ見目形美はしき二人の女、スタスタと谷を傳ひ來り、森蔭に立寄り、誰かと思へばお前さまは、秋山別さまであつたか。あゝどれ丈搜した事だか分りやしないワ。マアよう無事で居て下さいました。お懐かしう存じます。妾はヒルの館で別れてより、今頃はどうして御座るか、寢ても醒めても心配致して居りました。私は秋山別さま、あなたの御嫌ひ遊ばす可憐の女紅井姫と云ふ者です。アンアンアン」

と目に袖をあて、泣き伏して見せる。

「誰かと思へばモリスさま、私はエリナで御座ります。一度會うた其日から、お前と私は生別れ、何の便りも内證の、話せうにも言づけせうにも、人目の關に隔てられ、會ひたい見たいと明くれに、こがれ慕つて居りました。お前に會うてさまざまの、恨みも言はう、心の丈も聞いて貰はうと、思ひつめては、又もや起る持病の癩、アイタタアイタタ會ひたかつたわいなア。モリスさま、お前と私と暮すなら、假令アマゾン河の畔でも、ブラジル山の谷あひでも、厭ひはせぬ、どうぞ私を憐れの女と、可愛がつて下さりませ。コレのうモシ、モリスさま」

「ヤアよう来て下さつた。モリスとても御身を思ふ心に變りのあるべきぞ。雨の
あした、風の夕べ、そなたは何處の果てにさまよふかと、思ひつめたるモリスの
厚き心、必ず恨んでばし、下さるなや」
と芝居氣取りになつて、やつてゐる。秋山別も負ず劣らず、
「これはしたり御姫様、チトお愼みなされませ。不義は御家の御法度、何程惚れ
た男ぢやとて、はるばるブラジル山の谷底まで、尋ね來るとは、チと無分別では
御座らぬか。某とても木石ならぬ青春の血に燃ゆる男の身、無下に返したくはな
けね共、姫様の行末を思へばこそ、情ない事を……申しませぬ。
ホんに可愛い姫ごぜの、はるばる茲に尋ね來て、夫の後を附け狙ひ、來る心根が
いとしいわいのオンオンオン、コレを思へば前の世に、如何なる事の罪せし
か、千里萬里の山坂越え、一丈二尺の禪を締めた、此荒男の身も恥ぢず、姫の行方
を尋ねむと、さまよひ巡りて今茲に、お前に會うた嬉しさは、コレが忘れてなる
ものか、金勝要大神様の御情深い縁結び、あゝ有難や勿體なやと、大地にカツパ
とひれ伏し手を合し、男泣きにぞ泣きみたる」

「ホ、ホ、ホ、ホ、」

「ヒ、ヒ、ヒ、ヒ、」

「コレコレエリナ殿、ヒ、ヒ、とは何事で御座るか、モツと品よくお笑ひなさるか、見つともなう御座るぞや」

「ホ、ホ、ホ、ホ、呆けしやますなや」

「呆けたればこそ、女一人の後逐うて恥も外聞も打忘れ、茲まで苦勞を致して居るのでないか、コレ、エリナ姫、野暮な事を言やるなや」

「國依別は樹上にて、こばり切れず、思はず、口の紐を千切つて、」

「ワツハ、ハ、ハ、」

「と笑ひ出せば、安彦、宗彦も同じく、笑ひ出す。」

「秋山別は、」

「ヘン野天狗さま、是でも日暮シ山の岩窟に居りますかい、濟みませぬなア。色男と云ふものはマア、ザツとこんな者ですワイ。お前さまもチツとやけるでせう。氣の毒乍ら天狗と云へば偉いようだが、ヤツパリ畜生の中だ。早く千年の修業を」

了へて、人間に生れて來さんせ。こんなローマンスを實地にやらうとママだよ。
なア、モリス、何んぼ天狗は女は嫌ひだと申しても、閻魔さまでも女の白い手で
肩をもんで貰うて嬉しさうにして居るぢやないか。天の岩戸の始めより、女なら
では夜の明けぬ國だ。エツへへ、ちツと野天狗さま、けなりい事は御座いま
せぬか。お前さまの目の前でこんなお安うない所をお目にブラ下げて、お氣の毒
ですが、これも因縁づくぢやと諦めさんせ。サア紅井姫ここへおぢや」
「エリナ殿サアお出でなさいませ。モリスが案内仕りませう」

「アイ」 「アイ」

と優しき聲を出し、二人の男に手を引かれ、ドシドシと東南を指して従いて行く。
「サア、もう好加減におりようぢやないか、随分迷惑したねー。今夜木の下で寝
でも仕よつた位なら、下りるにも下りられず、大變に困る所だつた。結構な御手
傳ひが現はれて、先づ俺達も安心だ」

「どうして又紅井姫さまやエリナさまが、こんな所迄従いて來て、あれ丈あなた
にホの字とレの字だつたのに、俄に心機一轉遊ばしたと見え、あんな男と意茶つ

いて、手を曳いて行くなんて、合點が行かぬぢやありませんか。それだから女は化者だ、油斷がならぬと人が云ふのですな」

「本當に化者だよ。うっかり鼻の下を長うして涎をくつてると、眉毛をよまれ、尻の毛迄ぬかれてアフンとするのは、ウスノ口男の常習だよ」

「何とマア變れば變るものですか。この宗彦も今度計りは呆れて了ひましたよ。モウ女はゾツとしました。女が是からは何程甘い事を云つたとて、うっかり乗れませぬ哩」

「そんな心配すな。お前等に甘い事を言つてくれる女があるものかい。俺だつて、假令うそでも良いから、一口位惚れたやうな事を言つて貰ひたいと思うのだが、なかなか言つてくれぬなア。まだ彼奴ア、瞞されてゐるか何うか知らぬけれど、俺から見ると餘程女にもてると見えるワイ。エ、怪體の悪い、本當にのるけを聞かしよつて、彼奴の往つた後を通るのも厭になつて了つたワイ」

「アハ、ハ、ハ、矢張恪けると見えるなア。勝手に男と女とが勝手な事をして居るのだ。別に法界悋氣をする必要もないぢやないか。そんな事ではまだ神様の御用を

つとめる所へは往かないぞ」

「おかみさまの御用なつとさして頂けば結構だが、私の様な者は到底駄目ですワ
イ。女に嫌はれるやうな事で、何うして神さまに好かれる道理が御座いませう」

「アハ、ハ、ハ、ありや女ぢやない化者だよ」

「七人の子はなす共、女に心許すなとか云ひますなア。本當に女と云ふ者は一寸
髪を結び、白粉をつけ、口紅でもすると、鬼の様な洒面が俄に天女の様に見える

のだから、堪りませぬワイ」

「あれは本當の女ぢやないよ」

「さうでせうなア、男でさへも人三化七と云ひますから、何れ四足の容物でせう。
お姫さまもあこ迄墮落しちや、モウ駄目ですな。何程新しい女が流行すると云つ

ても餘り極端ぢやありませんか。丸で狐が化けとる様なスタイルをしよつて、吾々
の前であのザマは一體何だい」

「どこ迄も分らぬ男だなア。あの御方は旭明神、月日明神と云ふ御二方だよ。吾々
の迷惑をお助け下さつた結構な白狐さまだよ」

「あゝそれで安彦も分りました。何だか尻に白い尾のやうなものがブラ下がつて
ぬましたワ。是からあの二人は何うなるでせうかなア」
「どうせアフォンとするのだらう。サア行かう」
と國依別の詞に二人は足を早め、谷路を東南さして進み行く。
(大正一一・八・一九 舊六・二七 松村眞澄録)

第十七章 新しき女(八八三)

戀の暗路にふみ迷ひ
ブラジル山の谷底迄
情欲の鬼に魅せられて
モリス、秋山別の兩人は
百津常磐木の山桃の
大木の株に憩ひつつ
悲しき戀の叫び聲
山は裂け海はあせなむ世ありとも

いかで忘れむ紅井姫 くれなゐひめ エリナの後をどこ迄も あと まで
 捜さにやおかぬと雄健びし さが 雄たけ 俄に化た木の上の にはか ばけ き うへ
 天狗相手に大問答 てんぐ あひて だいもんどう 烏鷲鬪はす最中に うろ たたか さいちゆう
 夢にも忘れぬ戀人が ゆめ わす こひびと 不思議や爰に現はれて ふしぎ ここ あら
 恨の数々竝べ立て うらみ かすかずなら た お前は情ない男ぞや まへ つれ をとし
 かよわき女の身を以て をんな み もつ 虎狼や獅子熊の と おほかみ しし くま
 伊猛り叫ぶ山野原 いたけ さけ やまのはら 慕うて尋ね來た者を した たづ き もの
 今迄何處にうろうると いままで どこ こ 主なき花を手折りつつ ぬし はな た お
 妾二人を振り棄てて わらはふたり ふ す こんな所迄來ると云ふ とこまで く い
 情ない事がありませうか つれ こと 男心と秋山別の をこころ におこころ あきやまわけ
 空恐ろしい早變り そらおそ はやがは やいのやいのと取りついて と
 若い男女の囁きも わか だんぢよ ささや 二人は遂に解け合うて ふたり つひ わ あ
 お前の優しい心根を まへ やさ こころね モチいと早く知つたなら はや し
 こんな苦勞はせまいもの くらう 戀に上下の隔てない こひ じやうげ へだ

さあさあお出でと手を執つて 怪しき女と白雲の

山かき分けて進み行く 戀の擒となり果てし

二人の男の身の上ぞ 憐なりける次第なり

あゝ惟神々々 神の御幸を蒙りて

體主靈従の情動に 經驗深き瑞月や（瑞月）

淨寫菩薩の兩人が 狩野の流れの「波」高く（波子）

杉の「林」を村肝の 心「靜」かに眺めつつ（林靜）

安樂椅子に横たはり 遠慮會釋も荒川の

飛沫の音もサワサワと あたりの人を敷島の

淡き煙に卷乍ら 國依別の一行が

四人の男女のロマンス いと永々と述べたつる

此物語新しき 歴史の様に聞ゆれど

百年千年五千年 萬年筆の其昔

昔の昔の其昔 殆ど三十萬年の

ふる 古き神代の事ぞかし
ふたり 二人に憑いた副守護神が

にくたい 肉體かつて經驗を
しゃべ 喋つて書くと思ふたら

ひじやう 非常に大きな間違ぢや
あゝ惟神々々

かみ 神の心に見直して
ぜんい すべてを善意に解釋し

このものがたりき 此物語聞いてたべ
ゆめ 夢か現か誠か嘘か

はんたん 判断つかぬも無理はない
いま 今の世人の心では

かみよ 神代の人には押し竝べて
みなしやうちき 皆正直な堅造で

じやうよく 情欲などに心をば
つば 奪はれ苦しむ人なしと

ごかい 誤解してゐる眼より
このものがたりよ 此物語讀むならば

がてん 合點の行かぬ事である
くわこ 過去と現在未來迄

いつくわん 一貫したる神界の
しんり 眞理に變りはなきものぞ

しばひ 暫くうぶの心もて
ただいっぺん 只一片の神の代の

こひものがたり 戀物語とけなさずに
しんん 心をひそめて讀むならば

くしふめつたう 苦集滅道の眞諦を
たし 確かに悟り村肝の

心の暗の明りとも 鹽ともなりて諸々の

罪や穢れを清め得る 清涼劑と信じつつ

あらあら茲に述べておく あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ。

戀の擒となつた兩人は、怪しき女に伴はれ、茨を分け、萱草の間を潜り、蜈蚣、大蜥蜴の群に驚かされ、蜂には刺され、蛇には咬まれ、蚋には悩まされ、酷熱の太陽に曝され乍ら、果てしも知らぬ大山脈の麓を東南指して、當途もなく進み行く。

アマゾン河の支流なる、可なり廣き深き、シーズン河と云ふ河堤に、四人の男女は、漸くにして辿り着きぬ。

秋山別さま、あなたは妾を何處迄つれて往つて下さいますの

あなたこそ、私を何處迄伴れて行つて下さるのですか。迷ひ迷うた戀の暗路、行手が知れる様なことなれば、決して戀とは申しませぬワ。姫様が後を向いては、

手招きし、早く来いと、戀の手招き遊ばしたのを樂みに、何の事はなく、見失つては大變と、敏心の勇み心を振起し、生命を的に従いて來ました」

「あなたが妾を妻にしてやらうとの御熱心には妾も感謝に堪へませぬが、男として否人閒として、災多き現世に、獨立獨歩相當の生活を營まむとするならば自分の行くべき所、又進むべき方針がつかなくてはならぬぢやありませんか。只女的美貌に戀着して、自分の身を忘れ、戀の荒野に彷徨ひ、一寸先の目當も付かぬ様な男子は妾は厭ですよ。女としては男らしい男、氣の利いた前途の見える人ならば、どんなヒヨツトコでも、跛足でも目つかちでも、鼻曲りでも、菊目面でも構ひませぬ。甲斐性のある男を、女は好みます。女は男に一生其身を任す者ですから、女の禍福は夫の強弱、正邪勝負、賢愚等にありません。折角ここまで、お前を伴れて來て、試して見たが、何とマア、お前さまは、交尾期の來た、犬猫の様なものだワ。エ、汚らはしい、何卒只今限り、こんな見つともない腰拔身魂を、妾の前に曝して下さるな。エ、好かんたらしい腰拔男だなア」

と云ひ乍ら、秋山別の頭を、白い細い手にてピシヤピシヤと打叩けば、秋山別は、

「イヤ何とお前にそれ丈の考へがあるとは、今の今迄知らなかつたよ。深窓に育つたお嬢さまだから、何一つ知りはしよまい、是から此秋山別が、いろいろと世間學を仕込んで、立派な賢母良妻に作り上げ、圓滿なホームを作り、世界の花と謳はれて、幾久しく、末永う、偕老同穴の契を結ばうと思つて居たのだ。イヤもう今の言葉を聞いて、ズーンと感心した。實の所は是れから、大方針を立てて、夫婦の水火を合せ、神の生宮として、大神業に奉仕すると云ふ大抱負を持つて居る秋山別だから、姫さま、必ず必ず取越苦勞はして下さるな。何も彼も、此秋山別が方寸に止めてあるから……」

紅井姫はツンとして、

「男と云ふ者は凡て一生の方針を立てて、是なれば妻子を大丈夫に養つて行く事が出来る」と云ふ様になつてから、女房を持つべきものぢやありませんか。それに何ぞや、是から方針をきめると云ふ様な薄野呂男に、何程女が澤山ある世の中でも、一人だつて相手になる者が御座いますかい。いい加減に馬鹿を盡しておきなさいよ。妾は只今限り御免を蒙りませう。其代りお前さまが一人前の立派な男に

お成りになつた曉は、何程お前が妾を嫌つても、今度は私の方から放しませぬから、そこまで御出世をして下さい。今から女に心を取られる様な腰拔野郎だつたら、駄目ですよ。第一あなたの身が立たず妾も約りませぬから、どうぞ悪く思はずに諦めて下さい」

「コレコレ姫さま、一應其お言葉は無理とは思ひませぬが、そりや又餘り薄情ぢやありませんか。貴女を慕うてこんな山奥迄ついて来た男を、今更、一度の枕も交さず、愛想づかしとは、餘りで御座います。斯うなつた以上は、私も男の意地、生命にかけても、やり遂げねば置きませぬ。サア姫さま、私の戀は命懸けだ。返答なさいませ。御返答次第に依つては、此儘ではおきませぬぞ」

「ホ、ホ、ホ、あのマア腰拔男わいのう。多寡の知れた女一人を捉まへて、脅し文句を並べしやます、其卑怯さ。何程脅喝なされても、そんな事にビリつく様な女では御座いませぬわいなア。ヘンお前さまの様な未練男に添う位なら、一層此シーズン河へ身を投げて死んだが得策で御座んすぞえ」

「死ぬ死ぬ云ふ奴に死んだ例しなした。そんな事を云つて、姫さまは反對に此秋

山別を脅喝するのですなア。油斷のならぬは女だ。何時の間にこんなお轉婆にお成りなさつたのかなア」

「ホ、、、、、婦人開放に目覺めた新しい女ですよ。是でも女子大學の優等卒業生ですから、男の五人や十人、喰はへてふる位は朝飯前の仕事、今迄深窓に育つた未通娘の紅井姫だと思つてゐたのが、お前さまの不覺だ。オイ君、チトしつかりせないと、婦人同盟會を組織し、男子放逐論を主唱し、女尊男卑の社會にしてしまひますよ。オツと、君も僕のハズバンドに成りたいと思ふなら、それ丈の資格を具備して來なくては駄目だよ。僕はもう、是から歸るから、君はここでゆつくりと思索し玉へ」

「何とマア、呆れたお嬢さまだなア。黙つて聞いて居れば、君だの僕だのと、女の癖に何と云ふ事を仰有るのだ。併し乍ら、さう活潑な女と聞けば、なほなほ戀しくなる。お嬢さま、イヤイヤ君、……君といつた方がお氣に入るだらう……君と僕と二人相提携して、天下の經綸を堂々と遂行したら如何だね。随分面白からうよ」

「エー好かんたらしい男だこと、お前さまの方から吹いて来る風も厭になつた。こんな時代遅れの男とは思はなかつたに、選りに選つて、古めかしい頭腦の黴の生えた骨董品、斯んな品物をウツカリ買ひ込まうものなら、それこそ一生僕の浮ぶ瀬がなくなる。オウさうだ一層の事、此シーズン河へ身を投げて寂滅爲樂となり、浮き上つて川瀬を流れたら、それこそ浮む瀬がある」と云ふものだ。オイ君、僕は是からザンプと計り、投身するから、君は娑婆に残つて、十分の馬鹿を盡し、決して僕の後を尋ねて來ぢやならないよ。アリヨース」

と云ひ乍ら、身を躍らしてザンプと計り、シーズン河の激流に飛び込み、パツと立つ水煙と共に後白波と消えにける。

秋山別は水面を眺め、アフォンとして、暫し思案に暮れ居たりしが、

「あゝどうしたら良からうかな。こんな事ならヤツパリ、エリナの方を情婦に持つのだつたに、モリスの奴甘い事をしよつたナ。何時の間にかやら、俺達の目を掠め、エリナを伴れて、どこかへ伏艇しよつたと見えるワイ。潜航水雷艇をどこへ伴れて行きよつたかなア。一つ俺もエリナ丸に乗り替へねば、敵艦に向つて夜襲

することが出来まい。アーア、掌中の玉を取られたとは此事だ。紅井姫も可哀相に、餘り暑い所を無理に歩かしたものだから、陽氣のせいで精神逆上し、そこへ數十萬年未來のハイカラ女の惡靈が憑依し、君だの、僕だのと、取とめもない事を云ひ、しまひの果にや、シーズン河の投身とお出かけなすつた。どうも氣の毒なものだ。あゝ併し俺も斯うして、一人こんな所に溺死よけの石地藏の様に川を眺めて立つてゐてもつまらないワ」

と呟いてゐる。そこへエリナの手を引いて、モリスはさも嬉し相にニコニコと辿り來り、

「ヤア秋さま、お前はここに居つたのか。紅井姫さまにお前はもう秋さまだと言つて、エツパツパを喰はされたのだなア、アハ、ハ、ハ」

「ホ、ハ、ハ、ハ」

「エ、喧しワイ、餘りハイカラ女で、到底家庭の主婦として不適任だと思つたら、俺の方から秋山風を吹かして、どうぞ是からお前の様な女は、俺に顔を合して紅井姫だと云つて、エツパツパとやつたら、紅井姫が云ふのには……君それ程

僕が不信用なら、僕も君に對し、強つて添うてくれとは云はないよ、アリヨースと云つてあつたら生命を水の中にザンプと計り、シーズン河だ、さすがの俺でもチツとは憐れを催し、同情の涙にシーズンで居るのだよ、あゝゝゝとは云ふものの、如何したら姫が歸つて來るだらうかな、思へば思へばいぢらしいワイの、オンオンオン

君は何かい、紅井氏をどうしたと云ふのだい。僕に詳細なる顛末を差支なくば知らして呉れないか。僕大いに期する所があるのだからね

ヤア此奴も又傳染しよつたなア。オイ、モリス、用心せいよ。又ドンブリコと計畫に取掛られるかも知れないぞ。こんな所で、舟の一艘や二艘沈めたつて、閉塞隊の御用も勤まるものでなし、丸で淵へ鹽をほり込むやうな不利益だから、シツカリエリナ君を捉まへて玉へ。僕は經驗上、君に注意を與へておくよ

あゝ、モリスも薩張り合點の行かぬ事になつて來たワイ
と拍手し終つて「惟神靈幸倍坐世」を三唱し、何事か切りに暗祈黙禱を久しうして居る。

(大正一一・八・二〇 舊六・二八 松村眞澄録)

(昭和九・一二・一九 王仁校正)

第一八章 シーズンの流ながれ〔八八四〕

エリナはモリスの暗祈黙禱あんきもくたうせる姿すがたを嘲笑てうせうてき的に流ながし目めに見みやりつつ、秋山別あきやまわけに向むかひ、

「オイ秋山君あきやまくん、君きみは紅井君くれなゐくんを如何どうしたのだイ。まさか君きみの云いふ様やうに、シーズン河がはへ投身とうしんする様やうな馬鹿ばかな女をんなでもあるまいがねー。もし僕ぼくだつたら、君きみの様やうな蜥蜴とかけくん君きみには命いのちをすてる様やうなこたア、馬鹿ばからしくて出来できないね、又また君きみも君きみぢやないか、あれ程ほどスエートハートしてゐた紅井君くれなゐくんが水中すゐちゆうに陥没かんぼつしたのだから、此際このさい對岸たいがんの火災くわさい視しして居ゐる譯わけにも行ゆかぬぢやないか。男子だんしと云いふ者ものは随分ずいぶん無情むじやう冷酷れいこくなものだね、それだから吾々われわれ目ざめた婦人達ふじんたちは、婦人開放論ふじんかいほうろんを唱となへたり、女權擴張ぢよけんくわくちやうを高唱かうしやうした

り、婦主夫従の法律を制定せむと躍起運動をやらなくちやならないやうになつて来たのだ。君も眞に紅井君に同情をよせてゐるのならば、なぜ身を挺して水中に飛び込み救ひ上げないのかい。此溪流を眺めて恐ろしくなつたのだなア。實に卑怯な男だね。こんな男に狙はれた紅井君も迷惑だ。僕だつて、こんな男子と一日でも添はねばならぬと思や、紅井君ぢやないが、僕も一層の事淵川へ身を投げて死の神の手にキツスをしたくなつて来るよ。君も餘程デレ助の割には、物の分らぬ人物だね」

「ヤア又妙な事を口走り出したぞ。何でも此邊には惡靈が澤山居ると云ふ事だから、可愛相に、憑依されたのだなア。オイオイ モリス君、君もちつと心配してやつたらどうだい。何程拜ンで居つたつて、此發動は容易に停電する氣遣ひはないよ。君と僕と相提携してエリナ君を説服し、元のエリナに精神に立直してやらうぢやないか」

「オイ、秋山別、お前もヤツパリ感染して居るようだぞ。エリナさまと同じ様に君だの僕だのと、そんな言を使うない。今迄の様に俺とか、わしとか、お前とか、

貴様とか云つたら如何だい。そんな言を使ふと、俄に何だか二十世紀とか云ふ世の中が思ひ出されて来るワ

「あゝさうだつたなア。ウツカリして居つて類焼の厄に會う所だつた。幸ひお前の蒸氣ポンプがあつた爲に延焼の害を免れてマア結構だ。併しエリナさまの此發動は困つたものだね」

「皆さま、御心配して下さいますな。妾はおかげに依つて、精神快活になりましたよ。如何して今の様なハイカラな御轉婆になつたのでせうか。わたし、お二人さまのお顔を見るのも恥かしうなつて來ましたワ。ホ、ホ、ホ、」

と赤い顔をし乍ら、袖にてかくす其殊勝さ、何とも云へぬ趣がある。二人は恍惚として、エリナ姫を眺め居る。

モリスは秋山別に向ひ、一寸腰を屈め、いと叮嚀な言葉で、

「秋山さま、今日は存じも寄らぬ事が出來まして、さぞさぞ御愁歎で御座いませう、御察し申上げます。折角茲まで漕ぎつけて、いよいよ夫婦結婚の式をあげようと云ふ間際になり、紅井姫さまは無情の風に誘はれて遠い國へ御旅立、さぞ御

淋しう御座いませう。身につまされて同情の涙に堪へませぬ」

「ハイ有難う存じます。紅井の花も半開にして散りました。無情の嵐に吹かれて、手もなく打おとされ、實に残念で御座います」
と鼻をすする。

「モシ秋山さま、あなた紅井姫様を本當に女房にする御考へでしたか」

「ハイ寝ても醒めても吾目にちらつき、一刻も忘れた事のない紅井姫さま、實に残念な事を致しました。ヒルの都の楓別さまが此事をお聞き遊ばしたら、嘸お歎き遊ばす事で御座いませう」

「あの方を本當の紅井姫様と秋山さまは思つてゐらつしやいますのですか。あの方は旭……否々旭の直刺す、夕日の日照らすヒルの國の紅井姫によく似た御方で御座いますが、妾の考へでは少しくお背が高い様な氣が致しまして、どうも合點が参りませぬワ」

「ハイ何分十九の花盛り、背の伸びる最中ですからア。若い女と云ふ者は、三日見ぬ間に櫻哉で、見違へるように變るもので御座います。私は決して外の方と

は思ひませぬワ」

「そんならエリナの私はどう見えますか」

「秋山の目にはどうも見えませぬな。別に變つた所もない様です」

「折角此處まで御伴願ひしましたが、これで妾はお暇致します。お二人共、御機嫌

よく御修業遊ばし、天晴れ立派な男となつて、ヒルの國へ歸り、元の如く神界の

御用を勤めて下さいませ、左様ならば……」

と足早に立つて行かうとするのを、モリスは周章てて、

「モシモシ、エリナさま、一寸待つて下さい。私が此處迄はるばるやつて來たの

は、何の爲か、貴女御存じでせうなア」

「ハイよく存じて居ります。あなた方御二人様は戀の虜となつて、紅井姫様を女

房にせうと、晝も夜も争ひ、修羅をもやして御座つたのぢや御座いませぬか。私

はホンのあなたの目から副産物位に見做されて居つた【はした】女で御座います

よ。あなた方も當の目的物たる紅井姫様が、斯うお成り遊ばした以上は、最早女

に對する執着心も離れたでせう。妾はあなた方に對して何の關係もない者で御座

いますから、お先へ、すまぬ事乍ら、御免を蒙りませう。男の方と伴らつて歩いて居ると、又世間が何とかかとか噂を立て、うるさくて堪りませぬから、浮名を立てられ濡れ衣を着せられない中に、茲を妾が立去つた方が、雙方の利益で御座いませう」

「エ、一寸待つて下さい。秋山別も茲まで斯うして参りましたのも、あなた方のお後を慕ひ、夫婦の約束を結び、圓満なる家庭を作り、神業を勤めようと思つて、参つたのでムいますから、ここで御別れるのは、實に本意なうムいます。サア、

エリナさま是からあなたは秋山別の宿の妻、餘り悪うもムいますすまいなア」

「ホ、、、、、おいて下さいませ。あなたは紅井姫様に一生懸命におなり遊ばし、死ねば諸共死出の山、三途の川も手を引いてなぞと、仰有つて、姫様をお口説き遊ばした事が御座いませう。それ丈思ひ込んだ姫様が現在、此谷川に身を投げてお死くなり遊ばしたのを、救ひ上げるといふ親切も無ければ、遺骸を捜し出して町噺に葬ると云ふ誠もなく、今お死くなりになつた計りの最中に、私に向つて何と云ふ事を仰有るのですか。それだから男と云ふ奴は仕方のないものだ……と云

つて女の方から注意人物視されるのですよ。へん阿呆らしい、當座の花にしておいて、妾を玩弄物になさらうと、御考へになつても、そんな馬鹿な女は廣い世界に半人だつてありさうな事は御座いませぬよ。そんな馬鹿な事は言はずにおきなさいませ。紅井姫様に對してもお氣の毒ですワ」

「決して決して、左様な水臭い心では御座いませぬが、何程悔みたとて、焦つたとても、一旦死んだ人は歸つて來る道理も御座いませぬ。私が涙をこぼして泣かうものなら、それこそ紅井姫の魂は宇宙に迷うて、行くべき所へも能う行かず、苦勞をなさるのが氣の毒で御座います。それ故私がフツツリと思ひ切つて上げた方が、姫様の執着が残らないで、早く成佛遊ばす事だらうと思ひ餘つての親切、腹の中で涙を流して表面は斯う綺麗に賑やかさうに言つて居るのですよ。どうぞ戀しい女に別れた私の心、推量なさつて下さい」

と涙をふき、

「これ程心底の深い男を夫に持つ女房はさぞさぞ幸福でせう。エリナさま私の心が分りましたら、一滴同情の涙を注いで下さい。そして私の此悲しみを慰める爲

に、二世も三世も變らぬ夫婦ぢやと、一口仰有つて下さいませ。さうすれば私は申すに及ばず、紅井姫様が何程お喜びなさるか知れませぬ。エ、悲しくなつて來た。あゝどうせうぞいなア」とワザと泣いて見せる。

エリナは冷やかに笑ひ乍ら、

「それだから腰拔男は困るのですよ。女一人位に其態は何ですか。本當に厭になつて了つた。モリスさま、お前さまも、こんな腰拔男と何時迄も一所に歩いてゐると馬鹿にせられますよ。いい加減に思ひ切つて大活動をなされませ。何ですか紅井姫様に現を抜かし、二人の男が戀を争ひ、終局の果には、秋山別に甘く丸めこまれ、エ、そんなら一人の女に二人の男、體を割つて分ける譯にも行かないから、當座の鼻塞ぎに、エリナ【でも】女房にせうか、そして暫く辛抱をするのだ、などと蟲のよい考へを以て、能うマアはるばると、阿呆らしうもない、こんな所迄お出でになりましたなア。何程エリナが馬鹿な女だつて、そんな間に合ひに使はれてなりませんか。餘り馬鹿にして下さるなや。エリナだつて矢張性念もありま

すよ。紅井姫様とどれ丈、どこが違つて居りますか。只人間のきめた貴族とか平民とかの階級に高下がある丈ぢやありませんか。いい加減に目を醒まして、こんな馬鹿な事はおよしなさいませ。まだ女に對して云々する丈の、あなたの體に資格が付いてゐませぬよ。エリナが別れに臨んで、お前さま達の前途の爲に訓戒しておきますワ

モリスはあはてて、

「モシモシあなた俄かに御心變はりがしたのですか。そんな筈ぢやなかつたになア」

「モリスさまの勝手に御定めになつた夢の中のエリナは女房だつたさうですねエ」
「イエ、どうしてどうして夢所か一生懸命ですよ。さう悪く取つて貰つちや困ります。どうぞ私の女房になつて下さいな」

「男の方から女房になつて下さいな……などと頼む様な腰拔男は、頭から嫌ひですわいな」

「コレコレ エリナ殿、其方は吾々の眼鏡にかなつた女だから、秋山別が拔擢し

て、吾宿の妻にして遣はす。一旦女房と致した以上は、少々の瑕瑾や失敗位は、
神直日大直日に見直し聞直し宣り直す位の雅量を持つて居る此秋山別、實にエリ
ナ姫殿も仕合せで御座らうなア」

「え、おきなさいよ。ヒヨットコ男の腰拔野郎計りが、二人も斯んな處に迷ひ込
んで来て、アタ態の悪い、いい加減に恥を知りなさい、馬鹿だなア。君もモチと
氣の利いた男だと思つてゐたのに、餘りの腰拔野郎で、僕も愛想がつきた。川の
中へなと、身を投げて死んだ方が、社會の爲だらうよ」

秋山別、モリス兩人はムツと腹を立て、

「言はしておけば、際限もなく、裸一貫の丈夫に向つて、罵詈雑言、モウ此上は
了見致さぬ。二人の男に一人の女だ。サア覺悟せよ」

と鐵拳を固めて左右より打つてかかるを、エリナは右にすかし、左に避け、遂に
は秋山別の首筋を掴むでシーズン河の激流へザンブと計り投げ込みにけり。

「何、猪口才な」

とモリスは力限りに打つてかかるを、エリナは、「エ、面倒なり」と又もや首筋

を引掴み、激流目がけて、ザンブと計り投げ込み、煙となつて、自分も其場に消え失せにけり。

二人は激流に呑まれ、其姿さへ見えぬ只激流の音のみ聞へける。

(大正一一・八・二〇 舊六・二八 松村眞澄録)

(昭和九・一二・一九 於富山市 王仁校正)

第十九章 怪原野(八八五)

限りも知らぬ枯草や 芒の尾花のちらちらと

風に吹かれて差し招く 大野ヶ原を只二人

行方定めぬ旅の空 虎狼や獅子熊の

さも厭らしき叫び聲は 身を裂く計りに思はれて

心も空にビクビクと 物をも言はず進み行く。

道に當りし岩石は あたりを照らす鏡岩

見れば二人の肉體は 三角靈帽を被りつつ

色青ざめて映り居る 二人は顔を見合して

秋山別よこらどうぢや 川に陥り水を呑み

苦しみ悶へた事迄は 覺えて居るが是は又

不思議な事に成つたものだ 此處の地名は何ンと云ふか

鏡の岩は此通り 行手にさやり竝びゐる

合點が行かぬと首かたげ 吐息もらせば秋山別は

こりや可怪しいぞ可怪しいぞ 吾等二人は何時の間か

魔神の死の手に捉はれて 冥途の旅をトボトボと

始めて居るのぢやあるまいか 合點の行かぬ今日の空

月日の影は更になし 一つの星さへ目に見えぬ

地底の國の地獄道 女に心曳かされて

落ちて来たのか情無や
あゝ惟神々々

神の教を宣べ傳ふ
道の司であり乍ら

尊き掟を打忘れ
心猿意馬の狂ふまに

戀の魔神に取つかれ
亡びの淵に陥落し

ここ迄来る恥かしさ
今より心を取直し

天津祝詞を奏上し
魂を清めて天地の

神の御前に返り言
申さにやならない吾々が

深き罪をば惟神
神の御靈に宣り直し

聞直しませ黄泉津神
モリス秋山別二人

愼み敬ひ願ぎ奉る
旭日はてる共曇る共

月はみつ共虧くるとも
假令大地は沈む共

三五教の神の教
モウ是れからは是れからは

如何なる事があらうとも
踏み外してはなりませぬ

是から心得ます故に
ま一度元の現界へ

どうぞかへ歸して下くだされよ

それも叶かなはぬ事ことならば

マ一度いちど慕したうたあの女をんな

紅井くれなゐ姫ひめやエリナ姫ひめ

一目ひとめ會あはして下くださませ

會あうてサツパリ今迄いままでの

無禮ぶれいの罪つみを詫わびあげて

許ゆるし受けねば如何どうしても

心こころが咎とがめて仕し様がない

ここは地獄ぢごくの八丁目はつちやうめ

善惡ぜんあく邪正じやせいを立たて分わける

眞澄ますみの鏡かがみに照てらされて

私わたしの汚きたない胸むねの中うち

愛想あいさうがあつきて参まゐりました

あゝかむながらかむながら惟神かむながら々々

ヒルの都みやこを後あとにして

情容なさけ赦ゆるもアラシカなの

峠たうげを渡わたりはるばると

國くに依別よりわけの宣傳せんでん使しを

戀こひの仇敵かたきと狙ねらひつつ

進すすみ來きたりし愚おろかさよ

思おもへば思おもへば罪つみ深ふかき

谷たにに架かけたる丸木橋まるきばし

そつと柱はしらを取とりはづし

藤ふぢの蔓つるをば結むすび付つけ

木この葉はの茂しげみに身みを隠かくし

戀こひの仇敵かたきが此橋このはしを

渡わたると見みたら兩りやうにん人が

息を合して引落し 冥途の旅をさしてやると

企むだ事も水の泡 思うた女をやすやすと

向方に渡らせ勇み立ち 後を尋ねて追ひかくる

どうしたものが兩人の 戀しき女の影見えず

四方に心を配りつつ 眼光らせ山桃の

大木の木蔭に立寄れば 忽ち空に唸り聲

ブラジル山の犬天狗 天狂坊が現はれて

吾等二人を相手にし からかひ始めた厭らしさ

身の毛もよだつ折柄に 夢寐にも忘れぬ紅井姫の

やさしき女やエリナの姿 いよいよ茲に現はれて

心の丈を語り合ひ 野暮な天狗と罵りつ

草野を分けてシーズンの 河の畔に来て見れば

姫の心は一轉し 口を極めて嘲弄し

愛想づかしの数々も 餘り憎しと思はずに

女をんなの心こころを慰なぐさめつ

此この猛烈まうれつな戀路こひぢをば

とげねばおかぬと焦あせる中うち 紅井姫くれないひめは腹はらを立て

シーズン河がはの激流げきりうに 身みを躍をどらして飛込とびこめば

姿すがたは消きえて白浪しらなみの 會あはぬ昔むかしとなりけり

モリスはエリナの手てを引ひいて 茲ここに現あらはれ出いで來きたる

二人ふたりの男をとこは執拗しつえうに エリナに向むかつていろいと

口説くどきたつれど忽たちまちに はぢき返かへした肱鐵砲ひぢでつぱう

もろくも打うたれてシーズンかの 河がにザンブと投なげられて

苦くるしみ悶もたえ玉たまの緒をの 命消いのちきえしと思おもひきや

吾身わがみはここもとに元もとの如ごと 靈衣れいゐに包つつまれ來きたり居をる

げにも不思議ふしぎな次第しだいなり 假令たとへ地獄ぢごくと云いひ乍ながら

一人ひとりや二人ふたりの人影ひとかげは どつかに有ありそなものである

實じつに淋さびしい此旅路このたびぢ 夢ゆめなら夢ゆめではや醒さめよ

あゝ惟かむながらかむながら 御靈みたま幸さちはひましませと

歌うたひてここを立たつて行ゆく

鏡かがみの岩いはは忽たちまちに

猛まうくわ火くわとなりて燃もえ上あり

二人ふたりの間ま近ちかにごうごうと

烈はげしき音おとを立たて乍ながら

紅ぐれん蓮れんの舌したを振ふりまはし

焼やきつく盡つくさむと追おひ來きたる

怖こわさに二人ふたりは全ぜん身しんの

足あしに力ちからをこめ乍ながら

後あとをも見みずにスタスタと

當あてど途ともなしに逃にげて行ゆく

冥めいど途との旅たびぞ寂さびしけれ。

秋あき山やま別わけ、モリスの兩りやうにん人にんは何い時つの間まにかあたるの光くわうけい景けい、現げん界かいに比くらべて最もつとも變かはりた
る寂せきれう寥れうの原げん野やを、猛まうくわ火くわの舌したに追おはれ乍ながら、力ちから限かぎりに逃にげ出だし、とある川かは邊へに着つき
にける。

(大正一一・八・二〇 舊六・二八 松村眞澄録)

第二〇章 脱だつ皮び婆ば (八八六)

二人は漸く廣き河の邊に辿り着いた。見れば非常な廣い河で而も急流である。橋もなければ容易に渡る事は出来ない。後へ引返さむとすれば、岩石の炎は盛に燃えひろがり、道を塞ぎ、グツグツしてゐると、煙に包まれさうな勢である。

「ア、如何にせむ」と川端に二人は地團駄をふみ、遂には泣聲を出して藻掻き出した。どこともなしに厭らしき聲が聞えて来る。フツと見れば、澁紙の様な肌をした赤裸の人間が肋骨を一枚々々表はしたガリガリ亡者である。一目見てもゾツとする様な、厭な姿であつた。此亡者は赤裸ではあるが、男とも女とも少しも見分けがつかなかつた。只骸骨の上に澁紙の様な色した薄ツペらな皮が、義理か役かの様に包むでゐるのみである。

秋山別は心の中に思ふ様……どうせ、こんな譯の分らぬ所へ来たのだから、口クな奴は出て来る筈はない。餘り氣を弱く持つて居たならば、先繰り先繰りいろいろな奴が出て来て、何をするか分らない、強くなくては……と俄に決心の臍を固め、聲も高らかに、

「オイ我利坊子、貴様は現世の奴か幽界の奴か、返答をせい。現世には貴様の様

な奴はメツタに見た事はないが、大方娑婆に居つて吾れよしの有り丈を盡した我利我利亡者の連中が、欲の川へ落込み濁流を呑んで、こんな態になつたのだらう。一つ旅の慰みに貴様の來歴を聞かしてくれないか」

「俺は剛欲ハルの國、身勝手郡、吾れよし村の欲皮剥右衛門と云ふ男だよ。一人の男は同國同郡同村の金借踏倒しといふ亡者だよ。今冥途へ來てから、名を替へて、骨皮瘦右衛門、墓原の骨左衛門となつたのだ。お前はアノ自稱色男の秋山別、モリスの兩人に違いあるまいがな」

「貴様どうして俺の素性を知つてゐるのだ」

「きまつた事よ。餘り貴様が此川上で立派なナイスの様な化者を捉まへて、現を抜かしてゐるから、俺も金と色とにかけては、現界に居つた時から、天下無雙の豪傑だつたが、俺の目の前で、餘り巫山戯たことをしよるものだから、チツと計り癪にさはり、ナイスが川の中へとつて放つたのを幸ひ、河童となつて、貴様の鞆丸を引ちぎり、冥途の旅をさしてやつたのだ。アツハ、ハ、ハ」

「オイ、モリス、此奴が俺達の命を取つた餓鬼だと見えるワイ。サウもう斯う白

状致した以上は、了見ならぬ。バツチヨ笠のやうな、骨と皮との體をしよつて、洒落たことを致す亡者だナア。これから兩人が踏みじつて呉れるから覺悟を致せ

「アツハ、女に捨られ、命迄棄てた腰拔亡者の分際として、何を吐すのだイ。コリヤ此欲皮は貴様の見る通り、壁下地が表はれて、「ニク」もない可愛い男だが、併し俺の體は満身骨を以て固めてあるのだぞ。亡者なぶりの骨なぶり、見事相手になるなら、なつて見よ」

モリス始めて口を開き、

「コリヤ、我利々々亡者、欲皮剥右衛門とやら、俺を何と心得てゐるか」

「何とも心得て居らぬワイ。失戀狂の川はまり、土左衛門の成れの果て、戀の焔におひかけられて、其情熱を消すべく、此川邊迄逃げて來よつたモリスぢやない、亡者だらう。亡者々々致して居ると、此欲川はモウ容赦はならぬぞ。女の手を引張つて、都見物の亡者引の様に、見つともない何の態だい。チツとは恥を知つたが良からうぞ」

「何を吐しよるのだい。貴様は欲の皮を剥いで、現界に居つた時は、人鬼と云はれて来た代物ぢやないか。其天罰が廻つて来て、河鹿か何ぞの様に、川住居をしようつて、ガアガア吐すと、本當の蛙になつて了うぞ。蛙の行列向う見ずと云ふ事があるぢやないか。蒸せ損ひの饅頭の様に、【かは】許りにへばりつきよつて、現界でも喰へぬ奴だつたが、ヤツパリ茲へ来ても骨だらけで、味もシヤシヤリもない喰へぬ代物だなア。併し乍ら貴様も何時迄もこんな所に居つても仕方がないぢやないか。モリスさまに従いて来ないか。結構な結構な針の山か、血の池か、茨の林へ連れて行つて、蜥蜴の丸焼でも振れ舞うてやるからのウ」

「そんならこの金借も伴れて行つてくれないか。只で貰う事なら蜥蜴だつて、蛙だつて構うものか、又只で案内してくれるのなら、假令針の山でも血の池地獄でも構やせぬワイ。兔も角俺は貰ふ事が好きな性分だい。出す事なら舌を出すのも手を出すのも嫌ひな亡者さまだよ。サア早く行かう」

「こりや嘘だ、貴様の様な者を道伴れにして如何なるものかい。紅井姫がシーズン河へ飛込で、冥途の道に待つてゐるのだから、其様な者を連れて行かうもの

なら、それこそモリスの男前が下がつて了うワイ」

「貴様は冥途へ来て迄二枚舌を使うのだな。徹底的な大悪人だ。ヨシ今金借さまが其二枚舌を抜いてやらう」

と云ふより早く、川縁の手頃の石をクレツとめくると、其下から、澤山の釘拔がガチャガチャする程現はれて来た。金借亡者は、矢庭に之を手に取り、モリスに向つて襲ひ来る猛烈な勢に、流石のモリスも堪りかね、忽ちザンブと激流に飛込み、

「秋山別早く来れ」

と云ひ乍ら、拔手を切つて、流れ渡りに向う岸へヤツと取りつき、着物を脱ぎ棄て、力一杯壓搾し始めた。秋山別も辛うじて泳ぎ着き、之れ亦衣類を絞り、二人は川向うの二人の亡者に、腮をつき出し拳骨を固めて空をなぐり、十分に嘲弄し乍ら、一生懸命に何者にか引かる様な心地して、北へ北へと走り行く。

何とも譬へ様のない不快な血腥い風が吹いて来る。油で煮られる様な熱さを感じて来た。二人はヘタヘタになつて、どつか木の蔭があれば、休まうと、目をキ

ヨ口つかせ、そこらあたりを眺めて居ると、何とも形容の出来ない一本の木が枯葉を淋しげに宿して立つて居る。せめては此木蔭にと立寄つて見れば、厭らしい種々の毛蟲がウジャツてゐる。二人は肝を潰し乍ら、又もや焼きつく様な大地の上を歩み出した。少しく前方に萱を以て葺いた小さい家が、珍しくも只一軒建つて居る。これ幸ひと立寄つてソツと草で編んだ戸の隙間から、中を覗くと、爺と老婆とも見當のつかぬ老人が唯一人、水涕をズーズーと垂らし乍ら、切りに草鞋を作つてゐる。秋山別は外から、

「モシモシお爺いさまかお婆アさまか、どちらかは知りませぬが、吾々は旅人で御座います。餘り暑いので、最早やり切れなくなりました。どうぞあなたの涼しい御宅で、暫く休まして下さいな」

小屋の中より皺枯れた聲で、
「ここは焦熱地獄の八丁目だ。能うマア踏み迷うて御座つた。閻魔大王様から、お前達二人が茲へ来るから、茲に待伏せして居れと御命令を受けて、二三日前から待つてゐたのだよ。好い所へ来て呉れた。サアゆつくりと這入つて休息さつし

やい。やがて赤鬼や黒鬼が火の車を持って、お前達二人を迎へに来るから、マア
たのし樂みて待つてゐるがよからう。一度は火の車に乗つて見るのも面白からうぞや」
「モシモシそりやちつと困るぢやありませんか。如何して吾々がそんな火の車に
乗らねばならぬ様な悪い事を致しましたか。そりや大方人違ひぢや御座いますま
いかなア」

「儂は焼野ヶ原の脱皮婆アと云ふ者だ。三途の川には脱衣婆と云ふ者が居つて着
物を脱がすが、そこを通る奴は罪の軽い連中だよ。この焦熱地獄の旅行する奴は
最も悪い罪人が出て来る所だ。それだから、お前の肉の皮をスツカリ剥ぎ取つて、
剥製にして黄泉の都の博物館に陳列し、皮を剥いだ後の肉體は火の車に乗せて、
閻魔の廳へ送り、鬼共が喜びて、鹽焼にして食て了うのだから、心配することは
ない。今となつて心配した所で駄目だよ。チャンときまり切つた運命だから……」
「お婆アさま、そりや本當ですかい。チツとモリスには合點が往きませぬがなア」
「合點が往かぬ筈だよ。合點の往かぬ事計りやつて來たのだから、無理はなけね
共、もういい加減に因縁づくぢやと合點をせなきやならなくなつて來たよ。お前

を迎へに来る火の車は自惚車といふ妙な脱線し轉覆する車で危ないものだが、紅井の様な赤い顔をして、目を剥いた女の鬼が一人、又少し年増のエリナと云ふ女鬼が一人、火の車を二つ持つて、お前を迎へに来る段取がチヤンと出来てゐるのだから、今の閒なりと氣樂に歌でも唄つておかつしやい。火の車が来たが最後、お前の體は不動さまのように、戀の情火が燃え立つて、熱い目に會はねばならぬのだからな。あゝ思へば思へば不愼なものだワイ。

火の車別に地獄にやなけれ共

己が作つて己が乗り行く

とか云つて、お前が作つた完全無缺な火の車だから、誰に遠慮も要らぬ。ドンドンと乗つて行かつしやれや。何事も世の中は自業自得だ。善因善果、惡因惡果、時かぬ種は生えぬとやら、自分が蒔いた種が成長して、花が咲き實がのり、又自分分が收穫をせなくちやならぬ天地自然の法則だからなア」

「エー、秋山別は別に女に對し、戀慕は致しましたが、まだ生れてから、女一人犯したことは御座りませぬ。何が爲にそれ程重い罪を科せられるのでせうか。是れ位な微罪を、さう喧かましく詮議立てをし、處罰をして居つたならば、地獄の牢屋もやり切れませぬ」

「軽い罪は皆見のがして、三途の川で衣を脱がし、それから生れ赤子の赤裸にして、靈の故郷へ歸してやるのだが、お前の様な罪人は何うしても歸す事が出来な

いよ。又何程立派な審判の鬼だとして、中には盲もあるから、お前の罪は俺が聞いても、ホンの軽い様に思ふが、火の車に乗せられて、焦熱地獄へ落してやらうと判決されたのだから、此婆アの力ぢや如何する事も出来ない。閻魔さまだつて直接に調べるのぢやないから、疎漏もあるだらうし、無實の罪で来て居る憐れな人間もチヨイチヨイあるやうだ。何程冥途の規則が立派に出来上つて居つても、それを運用する審判の鬼が盲だつたら駄目だからな。マア諦めるより仕方があるまいぞよ。上の大將からして、盲の幽霊計りだから困つたものだよ。此婆アもお前には滿腔の同情を表してゐるけれど、上から押へられるのだから、どうする事も

出來やしない。お前の言譯を一つでもせうものなら、それこそ大變だ。下の役の癖に上役の裁いた事を、何ゴテゴテ言ふかと云つて、一遍に免職さされて了うのだ。さうすればお前が今渡つて來た欲の川に居つた我利々々亡者の様に骨と皮とになつて了はねばならぬ。アア暗がりの世の中と云ふものは情ないものだわいと婆アさまは鼻をすすり、そろそろと泣き出した。

斯かる所へガラガラとけたたましき音を立て、いかめしき面した赤鬼、青鬼、金平糖を長うした様な金棒を携へ、二臺の火の車を引つれて、此場に向つて勢よく駆けつけ來る。二人は「アツ」と驚き其場に倒れ伏しける。

（大正一一・八・二〇 舊六・二八 松村眞澄録）

第二章 白毫の光（八八七）

二臺の火の車は婆アの小屋の前で停車し、中より青赤の運轉手、技手、鶏冠の

様な、キザのある腮をしゃくり乍ら、金銀色の角をニヨツと表はし、車より下りて、ツカツカと二人の前に立塞がり、

「其方は秋山別、モリスの兩人であらう。サア冥府よりの迎へだ。グツグツして居ると時間が切れる。早く此火の車に乗れ」と巨眼をひらき睨めつけ唖鳴り立てる。秋山別は焼糞になり、

「オウ、俺も男だ。火の車が何恐ろしいか。俺達は娑婆に於て、日々會計不如意の爲に家には火が降り、尻には火がつき、火の車を日々運轉して来た火宅の勇者だ。乗るのは少しも厭はぬが、併しまアよく聞け。貴様の面は何だい。海邊の銅葺の屋根の様な洒つ面をしようつて、斯様な赤い車に乗り、何をオドオドとして青ざめてゐるのだ。チツとしつかり致さぬか。コリヤー一匹の奴、貴様の面は何ぢや。佛像の前に罷り出でて、婆、嬢の目糞、鼻汁をぬりつけられ、鼻つ柱も何もすりむかれてゐやがる寶頭盧の様な眞赤な面をして何の事だい。晝日中酒を喰つて酔つ拂つて居るのだらう。そんな事でお役目が勤まるか。俺の顔を見て、ビリビリ震ひ、眞青な顔する奴や、辨慶の様に酒に喰ひ酔うて眞赤になつて居る様な運轉

手や車掌の乗つて居る火の車には、危険で乗れたものぢやない。マア出直して來い。明日ゆつくりと乗つてやるワ」

モリスはおどおどし乍ら、

「オイ、秋公、そんな非道い事を言うない。モウ斯うなつては仕方がない。神妙にしてゐるのが得だよ。……モシモシ青さま、赤さま、秋山別の只今の御無禮は何卒許してやつて下さいませ」

「そりや許さぬ事はないが、ここは地獄の八丁目だ。お前達が娑婆に居る時から言つて來ただらう。それ、地獄の沙汰も」と云ふ事を……」

「ハ、ハ、ハ、ハ、矢張金次第と吐すのかな。それもさうだらう。この秋様も娑婆に居つた時汽車に乗るのに、普通の人間より二倍がけ出すと、それは都合の好い二等室に乘せてくれよつた。三倍がけ出すと、一層具合のよい一等室へ白切符を持つて乗せよつた。切符でさへも、青、赤、白と三段に區別がついて居る。お前の顔は青切符だな。ヨシヨシお前は赤切符か、さうすると、赤切符の方からきめてかからぬと、青さまに呉れてやる標準がつかないワ。此火の車は一哩幾程だイ」

「火の車の運賃は請求せない。是は冥府から差廻された特別上等の火の車だよ。さうして俺達は相當の手當を頂いて居るのだが、そこはそれ、最前云ふた通りだ」

「ヨシ、分つた。そんな事の粹の利かぬ秋様ぢやないワイ。ここでは何と言ふか知らぬが、娑婆では袖下と云ふ物だらう。お前の様な洋服では袖もなし、どこへ入れたら宜いのだ。見當がつかぬぢやないか」

「袖がなくても、ポケットが洋服の隨所に拵へてあるワイ。其ポケットの重い、軽いに依つて、焦熱地獄のドン底へ連れて行くか、但はモットモット樂な神界の入口へ送つてやるか、ソリヤ分らぬ。次第だからな」

「それならモリ公のと俺のと一緒にやるから、二人共同じ所へ助けるのだぞ。就いてはお前達、二臺の火の車に四人だから、百兩づつやつても四百兩。此婆アさまに嵌口料を渡しておかねばなるまい。さうすると五百兩、一寸懷中が揉めるのだが、エ、仕方がない。思ひ切つてエ、二人で五百兩、よく檢めて受取つたがよからう」

「コリヤコリヤ其方は怪しからぬ事を致す奴だ。賄賂を以て此方を買収せうと致

す不届きな奴。之を受取るのは易いけれ共、俺も又收賄の罪に問はれ、貴様は又贈賄罪として益々罪が重くなるから、以後は心得たがよからう。但今日に限り忘れておく程に……」

「以後は謹めと仰有らなくても、最早之丈出してしまへば、無一物で御座る。そんならすつかり忘れて了ふが、互に結構尻の穴だ」

「ヨシヨシ忘れて遣はす。サア早く乗れ。少しは熱いぞ。其代り窓を明け放しておいてやらう」

秋、モリの二人は脱皮婆アに向ひ、

「お婆アさま、大きに御世話になりました。お蔭で天國へ旅行致します。左様な……」

と五人に百兩づつを投渡し、二臺の火の車に分乗し、ブウブウと音を立て、臭い屁を放り乍ら、砂煙を濛々と立たせ、一目散に北へ北へと驅けり行く。

火の車は何時の間にか驀地に逸走し、鐵の壁を以て高く圍まれたる赤き焦熱地獄の門の前に横付けとなつた。

「サア、此處が焦熱地獄だ。オイ赤、白、黒共、早く此奴等二人を引摺り落とし、門内へ投込め。俺の命令だ」

「モシモシ青さま、ソリヤ約束が違うぢやありませんか。地獄の沙汰も金次第と云ふ事をお忘れになりましたか」

「定まつた事だよ。其方がどうぞ只今限り忘れてくれと云つたぢやないか。何もかも忘れた此方、規則通り打込めば宜いのだよ」

「ソリヤ違ひませう。そんな事を仰有ると、閻魔さまに會つた時、一伍一什を申上げますぞや。さうすればお前さまも忽ち、首が飛んで、吾々と同様に焦熱地獄へ落されますよ」

「ハ、ハ、ハ、ハ、馬鹿正直な奴だなア。鬼には鬼の閥があるから、外から指一本觸へる事が出来るものかい。野暮な事を申すな。山獵師は熊、鹿を獲り、海漁師は魚を取り、猫は鼠を捕り、猿は蚤を取り、吾々は亡者を取るのが商賣だ。假令善からうが惡からうが、そんな事に頓着はない。何でもかでも、一人でも餘計引張込みて來れば、俺達の収入が良くなるのだから、愚癡っぽい事を言はずに、い

い加減に諦めたが宜からうぞ。閻魔さまに言ふなら言うてみよ、吾々と同じ穴の狐だ。キット貴様達がお目玉を貰ふにきまつてゐるワ」

「何とマア善を褒め悪を懲す、神聖な所だとモリスも思つて居たのに、丸でこんな事なら、世の中は暗がりだ。天地晦冥暗澹として咫尺を辨ぜず、天の岩戸隠れの世の中だないか」

「きまつた事だよ。それだから此處を冥府と云ふのだ。せうもない三五教なぞと、そこらを明かくし、誠とか云つて、古い道徳を振まはし、俺達役人……厄鬼共の領分を侵害致すから、何でも一寸かかりがあつたら、引張込まうと、手具脛引いて待つてゐた所だ。よくもマア引掛つて來よつた。馬鹿者だなア。サア早くキリキリと立てい」

と青赤白の鬼共は二人を引捉へ、無理に鐵門の中へ押込まうとしてゐる。押込まれては一大事と、一生懸命になつて「惟神靈幸倍坐世」を奏上する折しも、忽ち前方より一團の火光あたりを照らし、矢を射る如く、此場に現はれて大音響と共に爆發した。火の車も四つの鬼共もどこへ消え失せたか、影も形もなくなつて了

つた。忽然として現はれた眉間の白毫よりダイヤモンドの如き光輝を發する神人一人、二人の脇立を連れ、二人が前に近寄り、頭を撫で、背を撫で、水を與へ、
「ヤアお前は秋山別か、お前はモリスか、まだここへ來るのは早い。現界に於て働かねばならぬ壽命が残つてゐるぞ。しつかり致せ」
と拳を固めて、背中を二つ三つウンと云ふ程打据ゑられ、二人はハツと驚き、正氣に復し、そこらキヨロキヨロ見まはせば、豈計らむや、シーズン河の河邊りに、三人の男に救ひ上げられ介抱されてゐた。此三人は國依別命、安彦、宗彦の一行である。

秋山別は驚いて、

「ヤアこれはこれは國依別の宣傳使様、私のような悪人を能くマアお見捨もなく御救ひ下さいました。實に有難う御座います。モウ少しの事で焦熱地獄へ落される所で御座いました」
「誠に以て御無禮計り致しました。モリスの様な悪人を能くマア助けて下さいました」

□ 決して御禮を仰有るには及びませぬ。大神様が私に此御用を仰せつけられたので御座います。どうぞ大神様へ厚く御禮を申上げて下さいませ□
二人は「ハイ有難う」と河原に行儀よく端坐し、拍手を打ち、天津祝詞を奏上し、神恩を感謝する。

是より秋山別、モリスの二人は心の底より悔み改め、且つ國依別を神の如くに敬ひ、更めて弟子となり、ハルの國の大原野を涉り或は高山を踏み越え、アマゾン河の兩岸にある大森林の魔神を征服すべく、宣傳歌を唄ひ乍ら、意氣揚々として進み行く。あゝ惟神靈幸倍坐世。

(大正一一・八・二〇 舊六・二八 松村眞澄録)

第二章 神の試（八八八）

國依別の一行は シーズン河を打渡り

荒野を驅けり山を越え 夜を日についでアマゾンの

上流さして進み行く。

忽ち前方に屏風の如き、餘り高からず、低からざる延長數百里に渡る山脈の横

たはるを見る。此山は屏風ヶ嶽と云ひ、海拔二萬五千尺、山頂の横巾は五十里に

及ぶ。此山脈上より東南を廣く觀望すれば、アマゾン河は銀河の如くに流れ、鬱

蒼たる森林は雲の如く、目に入る景勝の地點なりける。

國依別は此山に登るに就いて、左右に分れ絶頂に達したる上、作戰計畫を定む

る事とし、秋山別、モリスを南より登らしめ、自分は北の谷から安彦、宗彦と共

に宣傳歌を唄ひ、屏風山脈の中央に帽子の如く突出せる峰を出會所と定めて登る

こととせり。此山上に達するには如何しても、徒歩にて、四五日を要する丈の距離がある。

秋山別、モリスの兩人は南の谷より、宣傳歌を唄ひ乍ら、標的の帽子山を目標けて進み行く。日は漸くにして山に隠れ、暗黒の幕は次第々に濃厚に二人の身邊を包み來たるにぞ、二人は止むを得ず、坂道の傍に草を布き、横臥し、夜を明かさむとするや、俄に猛烈なる山嵐吹き來り、二人の體は殆ど中天に飛ばさる如き勢となりぬ。二人は「惟神靈幸倍坐世」を一生懸命に稱へたれども、七十米の猛烈なる風力は容易に止まず、終に秋山別は風に吹き飛ばされて、暗夜の空を何處ともなく、散り失せにける。

モリスは幸ひ岩の根に喰ひつきて此難を免れける。漸くにして風は歇み、夜明けとなりて四邊を見れば、秋山別の姿無し。……大方夜前の烈風に吹き散らされて、どつかの谷底にでも落ちて居るのだらう、あの風は追風であつたからよもや西北の方へ散つて居る筈はない、キツと東南へ散つたであらう、さうすれば是から宣傳歌を高らかに唄ひ進み行かば、秋山別が吾聲を聞きつけて來るだらう……

などと心の中に思ひ乍ら、宣傳歌を唄ひ唄ひ山と山とに圍まれた谷道をトボトボと登り行く。

俄に聞ゆる女の叫び聲、何事ならむと足を早め、聲する方に近より見れば、妙齡の女、手足を縛られ、髪ふり亂し、そこに倒れ居たり。モリスは驚きて、手早く手足の縛を解き、言葉靜かに、

「モシモシ、どこの御女中かは存じませぬが、何者に斯様な残酷な目に會はされたのですか。是には何か深い様子のある事で御座いませう」

「ハイ、有難う御座います。妾はシーズン河を渡り、此方へ参ります折り、四五人の荒くれ男に捉へられ、ドンドンと手足を括られた儘、ここまで擔がれて、夢の如く連れて來られました。さうして今の先、妾に向ひ五人の男が交る交る無理難題を吹きかけますので、妾は餘りの悲しさ、何事にも應じませなかつた。さうした所、五人の荒男は腹を立て、鋭利な劍を引抜き、一度により集まつて、妾を髑殺しにしてくれむと申し、今や彼等に髑殺しにされようとする刹那、有難き宣傳歌の聲が聞えて來ましたので、曲者は其聲に辟易して一人も残らず、

雲を霞と逃げ散つた所で御座います。あなたは何れの方かは存じませぬが、かよわき女の一人旅、行きもならず、歸りもならず、實に險呑で御座います。誠に御邪魔で御座いませうが、何卒御伴をさして下さいませぬか」

「それは大變に危い事で御座いました。併し乍ら私は神様の御用に依つて、アマゾン河の上流迄參らねばならぬ者、女の方と道伴れになることは、到底出來ませぬから、是計りは平に御斷り申します」

と女の顔を覗き込めば、不思議や紅井姫にてありける。

「オー、貴女は紅井姫様ぢや御座いませぬか？ どうしてマアコンな所に連れられて御出でなさいましたのかなア。サアどうぞ一時も早く立去り、元來し路へ御引返し下さりませ。かような所に長坐をして居れば、又候悪者が引返して來て、如何なる事を仕出かすか分りませぬ」

「お情ないモリスさまの其御言葉、妾はあなたの内事司として、ヒルの館にお仕へ遊ばす砌より、朝夕お顔を拜し、何時とはなしに戀路に心を曇らせ、日に日に身體は瘦おとろへて、重き病の身となりました。そこへ、秋山別の嫌な男、朝な

夕ゆふな、妾わたしに寄より添そひ、いろいと妙めうな事ことを言いひかけ、大たい變へんな迷めい惑わくを致いたして居をりま
した。餘あまりあなたを思おもふ戀こひの弱よわ味みで、恥はづかしくて、心こころにもなき情つれない事ことを申ましま
したが、決けつして妾わたしの心こころはさうでは御ご座ざりませぬ。どうぞモリスさま、今日けふはあな
たと妾わたしと只ただ二人ふたり、こんな機きく會わいは又またと御ご座ざりますまい。今いまでこそ妾わたしの腹はらの底そこを打うち明あ
けますから、どうぞ二世にせも三世さんせも先さきの世よかけて可愛かあいがつて下くださいませ」
と涙なみだを流ながし、眞しん實じつを面おもてに表あらはして、かきくどく其そのしほらしさ。モリスは心こころの中なか
て非ひ常じやうに煩はん悶もんしたるが思おもひ切きつて、

「これはこれは姫ひめ様さま、あなた様さまは怪けしからぬ事ことを仰あふせられます。如何どうして兄あに上うへ様さま
の御お許ゆるしもなく、左さ様やうなみだらな事ことが勝か手てに出で來きませうか。此この儀ぎ計ばかりは平ひらに御お許ゆる
し下くださりませ」

「ホ、ホ、ホ、これモリスさま、よう、そんなことを、今いまになつてようマア仰あつ有しや
いますな。妾わたしはあなたの心こころの底そこの底そこ迄までよく窺うかがつて居をりますよ。そんなテレ隠かくしは
仰あつ有しやらずに、一い時ときも早はやくウンと云いつて下ください。妾わたしも氣きが氣いきでなりませぬワ」

「實じつは御お察さつしの通とほり、寢ねても醒さめても、道みちならぬ事こととは知しり乍なら、姫ひめ様さまの美うらはし

き姿を一目拜むで……あゝ可愛い女だ……と思ひ込んだが病み付きで、戀の病におち、それからと云ふものは、何を食つても味はなく、身は次第に瘦衰へ、煩悶苦惱をつづけて居りましたが、或事より神様のお戒めを受けて翻然として悟り、今では、是迄のモリスとは違ひますから、此事計りは御許し下さいませ。モリス、手をついて御願ひ致します」

「あのマア、モリスさまの白々しい御言葉、假令天地が覆る共、一旦瘦る所迄思ひつめた女、どうしてもさう綺麗サツパリと思ひ切られる道理が御座いませう。餘りぢらして下さりませう。戀は神聖と云ひまして、あなたと妾が夫婦になつた所で、夫がナニ罪になりませう。サア早く御返事をして下さい。又實際に嫌なら、嫌とキツパリ言つて下さい。妾も一つの覺悟が御座います」

と云ふより早く、懷劍を取り出し、引抜いて、早くも喉にあてむとするを、モリスはあはてて其手を押へ、涙乍らに、

「モシモシお姫様、あなたのそこ迄思ふて下さる御心は實に勿體なく有難う存じます。其御志は假令死んでも忘れは致しませぬ。併し乍ら今日の私は、最早神の

光りに照されて、國依別様の弟子となり、アマゾン河の森林に言靈戦に参る途中で御座いますれば、何卒この所を聞分けて、思ひとまつて下さりませ』
と聲を震はせ、泣き聲になつて諫むるにぞ、紅井姫は首をふり、
『イエイエ、何と仰有つても、女の一念晴らさねば置きませぬ。そんなら歸つてから夫婦になつてやらうと、ここで一事云つて下さい。それが出来ぬと云ふことが御座いますか』

『折角乍ら、其事計りはどうぞ思ひとまつて下さいませ。モリス改めてお断わりを申します』

『あゝ是非に及ばぬ。そんならモリス殿、妾は冥途へ参ります』

と又もや懐劍を引ぬき首に當てがはむとするを、モリスはあわてて其手を押へ、
『又しても又しても、御合點の悪い御姫様、モリスの様なヒヨツトコの愚鈍者の分らずやが、如何して尊い姫君様の戀男になることが出来ませう。あなたの御志は身に代へて有難う御座いますが、どうぞこれ丈は許して下さいませ。モウ私は女に會ふことは断念して居りますから、折角の決心を何卒ゆるめて下さいますな。

モリスのお願ねがひで御座ございます」

と手てを合せあは頼たのみ入いる。

紅井姫くれなるひめ、嚴然げんぜんとして立上たちあがり、言葉ことばをあらためて、

「我われこそは大江山たいこうざんに守護しゆごをいたす、鬼武彦おにたけひこが幕下まくか旭日あさひみ明神やうじんと申まをす者もの、汝なんぢの心底しんていは最早もはや疑うたがふの餘地よちなし。いざ是これよりアマゾン河がはに向むかひ、天晴あつぱれ、言靈ことたま戦せんに功名こうみやう手柄てがを現あらはせよ。我われも汝なんぢに力ちからを添そへ、守まもり與あたふれば、如何いかなる事ことあるとも、決けつして恐おそるることなく、撓たゆまず、屈くつせず、國くに依別よりわけの命めいに従したがつて、神界しんかいの爲ために活動くわつどうせよ。モリス殿どのさらば……」

と言葉ことば終はるや、忽たちまち立たち昇のぼる白煙はくえんあたりを包つつみ、紅井姫くれなるひめと思おもひし美女びぢよの姿すがたは此場このばより霞かすみの如ごとく消きえ失うせにけり。

（大正一・八・二〇 舊六・二八 松村眞澄録）

第二三章

化老爺ばけおやぢ（八八九）

秋山別は烈風に吹き散らされ、力と頼みしモリスには別れ、止むを得ず只一人、屏風山脈の帽子ヶ嶽を目當てに登りつつ、又もや日を暮らして、老木茂る木蔭に立寄り、身を横たへて茲に夜の明くるを待つ事とせり。

満天の星光は燦然として金色の光を放ち、紺碧の空は、何となく爽快を覚え、天を仰いで神徳を讚美しつつありし折、俄に山嶽も崩るる計りの大音響聞え來り、一天忽ち曇りて、大粒の雨バラバラと降り出でぬ。

秋山別は止むを得ず、老木の蔭に立寄り雨を避けむとする折しも、忽然として現はれたる白髪異様の怪物、鏡の如き巨眼を剥き出し、鼻高く、口大きく、銅の如き面相にて、秋山別を睨めつけにける。秋山別は轟く胸を押へ、臍下丹田に神を納め、怪物の顔を瞬きもせず睨めつけたり。怪物も又、ビクともせず、地上より生えたる樹木の如く突立つて、赤、青、白、黒、黄、紫と幾度も顔色を變じ、爪の長き毛だらけの巨腕を又ツと前につき出し、今や秋山別を、一掴みにひし握り、投げ捨てむとするの勢を示しけるにぞ、秋山別は心の中にて……國治立大神、豊國姫大神、國大立大神、日の出神、木の花姫神、金勝要大神、守り玉へ

幸はひ玉へ……と祈願をこらし居たりしが、怪物は大口をあけて、雷の如き巨聲にて笑ひ出しぬ。

「アツハ、、、秋山別の宣傳使、能つく聞け！ 吾こそはアマゾン河の森林に永住致す八岐大蛇の化身であるぞ。

イ、、、如何に汝、勇猛なりとて吾等が一族に向つて言靈線を發射し、吾等が永年の棲處を荒さむと致す憎き奴原、

ウ、、、うっかり森林に向うものならば、某が神變不思議の術を以て、汝が身體を寸斷し呉れむ。萬一汝改心をなし、是より引返すに於ては、汝が罪を許し、生命を助け遣はすべし。返答は如何に」

と唼鳴り立てけるを、秋山別は不退轉の信念を固め、

「エ、、、面倒な、某は國治立大神の教の御子、三五教の神司、汝が如き曲神の言を用ゐて、のめのめ引返す様な腰拔武士ではないぞ。

オ、、、恐ろしき其面構へを致し、活神の宣傳使を脅しつけようと致しても到底駄目だ。早く姿を隠せ」

ヤイ秋山別、良つく聽け。

カ、一神々と申すが、國治立尊が神ならば、八岐大蛇も亦神であるぞよ。神と云ふ點に於て何處に違つた所があるか。此方はウラル教を守護致す元の神にして、世界の先祖と聞えたるアダム、エバの靈より現はれ出でたる者なるぞ。言はば汝ら人民の祖神である。子が親に對してたてつくると云ふ道理は何處にあるか、キ、鬼門の金神とはそりや何の囁言、八岐大蛇が惡神なれば、鬼門の鬼の字は又鬼ではないか、

ク、下らぬ事を申すより、早く往生致せば、苦勞なしに神徳が頂けるではないか、

ケ、見當の取れぬ神界の模様、人間の分際として如何して分らうぞ、
コ、是位神が言葉を分けて申したら、如何な頑迷な其方でも、合點が往つたであらう。

サ、さつぱりと今迄の心を取直し、大蛇の神に歸順致すか、
シ、しぶとう致して居ると最早量見はならぬぞ、

ス、好だ嫌ひだと、神に區別を立て、世界をうるたへまはる腰拔共、
セ、せせこましい事を思はずに、天地一體の眞理を辨へ、早く此方に歸順せよ、
ソ、それが其方に取つて最も安全な道であるぞ、
タ、高天原の聖地錦の宮の神司だとか、イソの館に鎮まる素盞鳴尊の部下だと
か、
チ、小さき隔てを立てて、自ら小さき穴に迷ひ込み、
ツ、月の大神許りを持って囃し、
テ、天に輝く日の大神を次に致し、
ト、十曜の神紋を閃かし、世界を宣傳使面さげて、うるたへ廻るとは何のたわ
事、早く此方の傘下に集まり來つて、吾神業に奉仕するか、さもなくば汝が身體
は風前の燈火だ。ハ、ハ、ハ、ハ、
と四邊に響く高笑ひ。秋山別は暗夜、此深山に於て、斯かる怪物に出會ひ、胸轟
き、身の毛もよだつ計りに恐ろしくなり來たりぬ。されど飽く迄も、一旦心にき
めた信仰を翻さじと、臍下丹田に息をこめ 『一二三四五六七八九十百千萬』と辛

うじて、天の數歌を奏上すれば、怪物の顔は漸くに和ぎ少しく笑を湛へ居るにぞ、秋山別は吾言靈の非常に效力ありしことを心中に打喜び、怪物に向つて、
「オイお爺さま、随分偉い勢で、吾々を威喝したぢやないか。そんな事を怖がる様な者は只の一人もないぞよ。俺の怖いと云ふのはそんな化州でも何でもない
ワ」

「ワツハ、、、それなら其方は何が一番怖いと思ふか。此爺は恐ろしくないか」
「ヘン、何が恐ろしいのだ。夜になればそんな偉相な面をして出て来るが、お日様がお出ましになると、すぐに消えて了ふ代物が恐ろしくて、此世の中が生きて行けるかい。コリヤ此方は三途の川を渡り、焦熱地獄へ行き、地獄の底まで探険して、實地修養を経た秋山別の宣傳使だぞ。お前達が怖くて堪らうかい」
「そんなら、一つ怖い者があると云つたのは何の事だい。俺の怖いと云ふのは誠と云ふ一字許りだ」

とウツカリ怪物は口を歪らしたるを、秋山別は之を聞いて、
「ハ、一此奴、誠が怖いと云ひよつたなア。大方言靈に恐れてゐるのだらう。ヨ

シ、之これからグツグツ吐ぬかしよつたら、言靈ことたまを連發れんぱつしてやるのだナア』
と腹なかの中で決定きめて了しまつた。

『オイ爺ぢぢ、モウしめたものだ。貴様きさまは誠まことが一番怖こわいと云いひよつた。誠生粹まこときつするの大和やまとだま魂しんの言靈ことたまをこれから發射はつしゃしてやるから、其積そのつもりで居をれ。

ナ、何なんと申まをしても、此言靈このことたまは俺おれの口くちから出でるのだから、貴様きさまの力ちからでとめる譯わけにも行ゆこまい、早く改心かいしんを致いたさぬと、

二、二進にうちも三進さうちも行いかさぬ様に、秋山別あきやまわけがここで封ふうじて了しまつてやるぞ』

『又また、吐ぬかすな吐ぬかすな。強盜ぬすびと猛々たけだけしいとは其方そのほうの事ことだぞ。主人しゅじんの娘むすめを盜ぬすみ出ださうと致いたした癡者しれもの奴め、

ネ、、佞ねちけ曲まがつた其方そのほうの言靈ことたまが、此方このほうに對たいして應用おうようが出來でて堪たまるものかい、
ノ、、野天狗のてんぐ、野狸のだぬき、野狐のぎつねの様な厄雜神やくざがみの容物いれものとなり、言靈ことたまを發射はつしゃするのなんのと、

ハ、、腹はらが燃よれるワイ、餘あまり可笑をかしうてのウ。

ヒ、、姫ひめの後あとを野良犬のらいぬの様に嗅かぎまはる、

フ、不束者奴が、

へ、屁でも喰つたがよからうぞ、

ホ、呆け野郎奴、

マ、誠が怖いと申せば直に附け上り、言靈を發射してやらうなどと、心の中で北叟笑みを致して居るぞよ。この方は餘りの可笑しさに、

ミ、見つともない、其面付で女に對し、戀の鮎のと、ソリヤ何のたわ事。

ム、昔から無理往生の戀が遂げられた例はないぞ。

メ、盲滅法界に、

モ、盲目的に、

ヤ、やり切らうと思つても、

イ、イ行きは致さぬぞよ。

ユ、幽冥界へ落されて、焦熱地獄に迷ひ込み、火の車に乗せられ、

エ、えぐい、熱い苦みに會ひ、

ヨ、ヨウもヨウも幽冥界の探險をして來たなどと、口幅の廣い事を云はれたもの

だ、

ラ、、らつちもない、

リ、、悋氣喧譁を致したり、

ル、、坩堝の様な黒い洒つ面をして、

レ、、戀愛の戀慕のと、ソリヤ何を吐くのだい、

ロ、、碌でなし奴。

ワ、、吾れの身分を考へて見よ。

ヰ、、いたづら小僧の分際として、

ウ、、嚙言のような戀を語り、

エ、、縁があるの、ないのと、

ヲ、、可笑しいワイ。貴様の怖いのは大方女だらう。女の爲に、シーズン河へ投

込まれ、有るに有られぬ苦勞を致し、地獄の八丁目迄落されて來よつたのだから、

女にはコリコリ致したと見えて、元氣のない其面付は何だい

ヨシ待て、糞爺、今に秋山別が神力無雙、圓滿清朗なる生言靈の彈丸を其方の

面體めんていに向つて亂射らんしゃしてやるから覺悟かくごを致いたせ。コリヤ取つときの言靈ことたまだぞ。最前さいぜんのは鉛なまりの玉たまだつたが、今度こんどは銀ぎんの玉たまと金きんの玉たまだ。化物ばけものに向つて金きんの玉たまを發射はつしゃすれば、化者ばけものは滅亡めつぼうするのは昔むかしから定きまつてゐる。サア良いいか

「アハ、ハ、ハ、擧玉きんたまを發射はつしゃするのも面白おもしろからう。其方そのほうは最早もはや女をんなに絶縁ぜつえんし來きた以上いじやうは、擧玉きんたまは不ふ必要ひつえうだ。サア何なんぼなと發射はつしゃせい。受取うけとつてやらう。併しかし乍ながら只ただの二ふたつより有あるまい。其代そのかはり、其二そのふたつを發射はつしゃしたが最後さいご、其方そのほうの勇氣ゆうきはなくなり、言靈ことたま戰せんはモウ駄目だめだぞ」

「馬鹿ばかだなア。そんな擧玉きんたまとは違ちがうのだ。一言いちげん天地てんちを震憾しんかんし、一聲いっせいよく風雨雷ふううらい霆いを叱咤しつたする黄金わうごんの言靈ことたまだ」

と云いひ乍ながら、

「一二三四五六七八九十百千萬」

と四五回しごくわいも繰返くりかへせば、流石さすがの怪物くわいぶつも追々おひおひ其容積そのようせきを減げんじ、遂つひには二三尺にさんじやくの童子どうじの姿すがたとなり、小ちいさき聲こゑにて、

「コリヤ秋山別あきやまわけ、其方そのほうは俺おれの一番怖いちばんこわがる誠まことの言靈ことたまを發射はつしゃして攻めよつたな。ヨシ

此方にも考へがある。今日はこれで別れてやるが、明晩キツと仇を打つてやるから其積りで居れ。ウーーツ[㊦]と唸りを立ててパツと其儘消え失せにけり。

(大正一一・八・二〇 舊六・二八 松村眞澄録)

第二四章 魔違(八九〇)

秋山別は此樹下に一夜を明かす折しも、遙の方より宣傳歌の聲が聞え来るにぞ、秋山別は雀躍し、後ふり返り能く見れば、モリスは只一人何か手に采配様の者を握り、之を打ふり打ふり此方に向つて進み来る。秋山別は地獄で神に會ひし心地にて、雀躍しつつ待ちゐたりしが、近寄つて来るを、能く能く見ればモリスにあらで、夜前の化爺、體を少し小さくして、モリスの聲色を使ひながら來れるなりけり。されど秋山別はモリスとのみ深く信じて少しも疑はず、飛びつく様に、

「ヤア、モリスどこへ往つて居つたのだい、随分待ち詫びたよ。夜前も夜前とて、此木の下に寝て居れば、それはそれは厭らしい化爺が出て来よつてナ、流石の俺も荒肝を潰したよ。併し俺の取つときの言靈を發射したのに驚き、小さくなつて逃げよつた時の愉快さと云つたら、有つたものぢやないワ、アハ、ハ、ハ、」

モリスに見えた男、

「そうか、ソリヤ愉快だつたネイ。イヤ氣味が悪かつただらうネ。併し今日はお前の一番怖い者をドツサリ持つて来てやつたから、マア昨夜の返禮だ。ゆつくり樂むがよからうよ」

と云ひ乍ら、麻の様な物を左右左にプツプツと振りまはす。小さい玉の様な物が、幾百ともなく落つる途端に、何れも一時に爆發し、中から桃太郎が生れた様に、何百とも知れぬ紅井姫が現はれて、秋山別の前後左右に取りつき、

「コレコレまうし秋山別さまお前は情ない人だよ。能うマア私を見捨ててこんな所迄逃げて来やしやつたは本當に憎らしいワ」

と云つて頬邊たをピシヤツと叩き、耳を引かき、そこら中をひねりまはす。又同

じ姿すがたの女をんな、秋山別あきやまわけの足あしにしがみつつき、

「お前まへは本當ほんたうに罪つみな人ひと、私わたしが國くに依より別わけさまに、あれ丈だけ戀こひして居ゐるのに、好すかぬたらしい、横戀よこれんぼ慕ぼをして、一いちも取とらず二にも取とらずにして了しまつたぢやないか。エ、戀こひの

敵かたきぢや、秋山別あきやまわけさま！」

と云いひ乍ながら、拳こぶしを一口ひとくちクワツとかぶり取とる。又また一人ひとりの女をんなは武者振むしやぶりつき、

「エ、殘念ざんねんざんねん々々、お前まへ故ゆゑに、私わたしはシーズン河がはへ身みを投なげたのだよ。敵かたきを討うたずに

おくものか！」

と髻たぶきを掴つかみ、無性むしやう矢鱈やたらに引ひまはす其その痛いたさ。秋山別あきやまわけは聲こゑを限かぎりに悲鳴ひめいをあげ、

「痛いいた痛いいた、恠こらへてくれ。モウ是これだけをんななげに會あうてはやりきれないワ。命いのちがなくな

る、どうぞ助たすけてくれ！」

と泣なき聲こゑになつて呼よばはつて居ゐる。數多あまたの女をんなは又またもや武者むしやぶりつき、

「女をんなにかけたら、命いのちも何なんにも要いらぬと云いつたぢやないか。お前まへの心こころが生うんだ紅井くれなゐ姫ひめ、サア命いのちを貰もらはう。妾わらわの手てにかかつて死しんだら得とく心しんでせう。コレ秋山別あきやまわけさま、

黒くろい色男いろをとこには生うまれて來こぬものぢやなア。ホ、ホ、痛いたいか痛いたいか、チト痛いたいとて

も辛抱なされ。可愛い女につつかれたり、齧ぶりつかれたり、體一面抓られるのは、男として天下第一の光榮でせう。……コレコレ甲乙丙丁戊己の紅井姫さま、寄つて集つて此男を苛めてやらうぢやありませんか。あゝ面白い面白い』

と云ひ乍ら何百人とも知れぬ女が、交る交る頭を叩き、髪をひつたくり、鼻を抓まみ、耳を引つかき、手足にかぢりつく其苦しさ。遂に秋山別は堪りかねて、其場に昏倒したりける。モリスに見えた男、大口あけて、

「アハ、ハ、ハ、偉相に昨夜は俺に言靈を發射し、苦めよつた其返報がやしぢや。此奴は何にも世の中に恐いものはないが、女が一番恐いと吐しよつたので、女で仇敵討をしてやつたのだ。モウスうなれば、命もあるまい。ハ、ハ、ハ、ハ、好い氣味だナ。サア歸らう」

と云ふや否や、再び采配を打ふれば、數多の女は夢の如くに消え失せ、怪物も亦何時とはなしに煙の如く消えにける。秋山別はホツと息をつぎ、馬鹿面をさらして、そこらをキヨロキヨロ見まはし居たりしが、又もや宣傳歌の聲聞え來たるにぞ、秋山別は再び驚き立上り、よくよく見ればモリスである。又出よつたなア』

と目を怒らし、臍下丹田に息をつめ、雙手を組みモリスに向つて身構へなし居たりしが、樹下に近寄り來りしモリスは此態を見て、

「ヤア此處に居つたのかい。俺やモウ貴様が何處かへ散つて了つたのだと思ひ、心配して居たよ。マア無事で結構だつた。併し俺は途中に於て紅井姫の御化に出會ひ、大變に試めされて來たよ」

と聞くに、秋山別は、

「オツトドツコイ化物奴其手は喰はぬぞ」

と言ひ乍ら、身構をなし、兩手を組み、モリスに向ひ、「ウーンウーン」と力限りに唸り立て、「一二三四」を一生懸命繰返す。モリスは何の事だか合點行かず、

「オイ秋山別、そら何だい、いい加減に言靈をやめたら如何だい。チツとお前に話したい事があるのだから」

「吐かすな吐かすな。言靈をいい加減に止めと吐すが、之を止めて堪るか。益々猛烈に發射志てやるぞよ」

といひ乍ら、又もや「一二三四」を繰返した。

「オイ、お前は氣が違つたのぢやないか。俺が分らぬか、俺はモリスだよ」
馬鹿にするな。又女を振り出して、俺を責ようと思つたつて、其手にや乗ら

ないぞ。惟神靈幸倍坐世、一二三四……」

と切りに汗をたらたら流し、數歌を唱へてゐる。モリスは、

「此奴烈風にあほられて、肝をつぶし發狂してゐるのに違ひない、一つ水でも頭から、ぶつ掛けてやれば氣がつくだらう」

と小聲に囁き乍ら、秋山別の手をグツト握り、無理矢理に谷川の流れの傍へ引張行き、片一方の手にて、頭部面部の嫌ひなく、切りに谷水をブツ掛るを、秋山別は、

「コリヤ畜生、何をしよるのだ。澤山な女責めに會はして置いて、又水責めに會す積りか。ヨシ、俺にも了見がある。今に返報がやしをしてやるぞよ。俺の兄弟分のモリスがやがて此處へやつて來るから、待つて居れ、仇を討つてやるワ」

「オイ秋山別、確りせぬかい。俺はモリスだよ。トツクリと顔を見てくれ、モリスに間違ないのだから……」

と秋山別の前に黒い顔をニユツと突出して見せるを、秋山別はモリスの顔を熟視して、

「アハ、能く化けよつたな。丸でモリスそつくりだ。夫文化ける技兩があれは、どうだ一つ改心して、俺の弟子になる氣はないか」

「今更めてそんな事を云はなくても良いぢやないか。兄弟同様にしてゐる仲だもの。お前が強つて弟子になれと云ふのなら、お前の氣が付く迄なつてやらぬ事はない」

「もう昨夜の様に、白髪の老爺には化てくれなよ。それから、あれ丈澤山に紅井姫を出されると、俺もお門が廣すぎて、處置に困るからなア」

モリスは合點の往かぬ事を言ふ奴だと思ひ乍ら……チト逆上して居るのだらう、餘り逆らつては能くなからう……と心の中に思ひ乍ら、よい加減にあしらひつつ、帽子ヶ嶽を目當てに登り行く事とはなりける。

(大正一一・八・二〇 舊六・二八 松村眞澄録)

第二十五章 會合（八九一）

國依別は安彦、宗彦兩人と共に、樹木鬱蒼たる森林を越え、谷を涉り、小山を幾つか越えて、漸くに屏風山脈の最高所と聞えたる帽子ヶ嶽の頂上に登りつき、秋山別、モリス兩人の此處に來り會するを待ちつつ、樞の木の根元に神言を奏上し乍ら待合せ居たりけり。

此時山の背後より宣傳歌の聲聞え來たれり。

神が表に現はれて 善と惡とを立わける

此世を造り玉ひたる 國治立大神は

豊國姫と諸共に 豊葦原の瑞穂國

青人草を始めとし 鳥獸や魚に蟲

草の片葉に至るまで 生たる命を與へつつ

各其處を得せしめて 此世に清く美はしく

茂らせ玉ふ有難さ

さは去り乍らブラジルの

此神國は廣くして

高山三方に立ちめぐり

東に荒波狂ひ立つ

大海原を控へたる

人跡稀なる國なれば

酷の曲津は各自に

先を争ひ寄り來り

アマゾン河を始めとし

時雨の森に集まりて

牙を光らせ爪を研ぎ

時々山を乗り越えて

アルゼンチンやテルの國

ヒル、カル其他の國々へ

現はれ來り曲の業

青人草の安全を

破りて此世を脅かす

其曲神を三五の

清き御水火に言向けて

天が下には鬼もなく

醜の大蛇や曲神の

影をば絶ちて千早振る

神の依さしの神業に

清めむものと葦原の

中津御國を後にして

荒波猛る海原を

國依別と諸共に

すす すす
進み進みてテルの國くに テル山峠やまたうげを乗越えてのりこ

かむすさのをのおほかみ
神素盞鳴大神の 八人乙女の末子姫すゑこひめ

しづ
鎮まりゐますウズ國くにの 神かみの都みやこに現はれてあら

しば ひつぎ とど
暫し蹕を止めしが 神素盞鳴大神は

はるばる浪路なみぢを打わたり イソの館やかたを後にしてあと

うづ みたま うづ くに
珍の御靈の宇都の國 現はれ來り宣たまはくきたの

ひとひ はや
一日も早くアマゾンの 河かはに沿そひたる森林しんりんに

なんぢことよりわけのかみ
汝言依別神 二三にさんの伴ともを引連れてひきつ

すす すす はやす
進めや進め早進め 屏風びやうぶの如ごとく南北なんぼくに

た なら あそがき
立ち並びたる青垣の 大山脈だいさんみやくの最高地さいかうち

ぼうしがだけ くによりわけ
帽子ヶ嶽に國依別の 教のりの司つかさの一行いっかうが

きた なんぢ ま
來りて汝を待つならむ 此神言このかみことを畏かしこみて

あまた つきひ けみ
數多の月日を閲しつ 山野やまのを渡り川かはを越えこ

やうや こ こ きた
漸く此處に來りけり あゝ惟神々々かむながらかむながら

御靈幸はひましまして 國依別に巡り會ひ

力を合せ村肝の 心を一つに固めつつ

神の依さしの神業に 仕へ奉りてアマゾンの

時雨の森に迷ひたる 鷹依姫の一行や

高姫、常彦、春彦の 危難を救ひ森林に

蟠まりたる惡神を 伊吹の狭霧に吹き散らし

生言靈の神力に 惡魔を善に宣り直し

言向和し一日も 早く神業成し遂げて

神素盞鳴大神の 御前に復命させ玉へ

旭はてるとも曇るとも 月はみつともかくるとも

時雨の森の惡神は いかに勢猛くとも

嚴の御靈の大神が 依さしの言をどこ迄も

楯に飽く迄戦はむ あゝ惟神々々

御靈幸はひましませよ

帽子ヶ嶽の東方を登り来る宣傳使は、此歌に現はれたる言依別命の一行にぞありける。

國依別は此宣傳歌を聞いて、大に喜び、百萬の援軍を得たる如き心地して、襟を正して待ち居たり。安彦は嬉しげに、

「宣傳使様、今の宣傳歌は何とも知れぬ清涼な言靈で、大變な強味のある音聲では御座いませぬか。此様な高山へ三五教の宣傳使が出て來うとは夢にも思ひませぬが、誰がやつて來るのでせうかなア」

「誰だかチツとも分らぬが、大方神様が御越しになるのだらう。サー行儀よくして、ここに坐つて、御迎へしたがよからうぞ」

「ハイ、畏まりました。併乍ら、秋山別、モリスの兩人は大變に遅いぢやありませんか。大方一昨日の烈風に吹きまくられて、どつかへ散つて了つたのぢや御座いますまいかな。實に案じられた者です。宣傳使様は如何御考へなさいますか」

「あの二人はまだ十分の改心が出來てゐないから、故意とに南の谷を登らせたのだよ。キツといういろの神様の試練に會うて魂を研ぎ、立派な人間になつて、こ

こへやつて来るから、お前達二人も餘程しつかりせないと、恥しいことが出て来るよ」

「しつかりせいと仰有つても宗彦は、是以上如何したらよいのですか。あれ丈猛獸の聲が聞えても、又襲來されても、レコード破りの大風が吹いてもビリとせぜず、一生懸命に御神力に依つて胴をすゑて來た吾々ぢや御座いませぬか」

「まだどこやらに、胴のすわらない所が、國依別の目から見れば澤山あるよ。これから時雨の森へ行かねばならぬが、あれ位の事が何ともなかつたと云つて、我慢をするやうな事では、到底、ドエライ奴に出會した時には、恠へ切れないやうなことが出て来るよ。お前が胴をすゑて居つたといふのも、吾々が居つたからだよ。單獨であの坂を越えて、胴が据わつてををつたなら、モウ大丈夫だが、三人の眞中に立つて、やうやうここまでやつて來たお前の腕前、案じられたものだよ」と話して居る折しも、モリスは秋山別の手を引いて漸く此處に登り來り、國依別の一行を見るや、餘りの嬉しさに嗚咽涕泣久しうし、漸くに口を開いて、

「國依別様、誠に有難う御座いました。南の谷間を、汝等兩人通つて行け……と

仰せられた時は、何とも云へぬ淋みしさを感^{かん}じ、又幾分^{またいくぶん}か貴方^{あなた}を恨^{うら}んで居^をりました。たが、イヤ實^{じつ}に結構^{けつこう}なお神德^{かかげ}を頂^{いた}きまして、始^{はじ}めて、神様^{かみさま}や貴方^{あなた}の御仁慈^{ごじんじ}の御心^{おこころ}が分^{わか}りました。吾々^{われわれ}兩人^{りやうにん}は未^まだ身魂^{みたま}に曇^{くもり}が多く、到底^{たうてい}アマゾン河^{がは}の言靈戰^{ことたません}に參^{さん}加^かする資格^{しかく}は御座^{ござ}りませなかつたが、どうやら、斯^こうやら、ヤツと及^{きふ}第點^{だいてん}を得^えられた様な^{やう}感^{かん}じが致^{いた}します。今更^{いまあらた}めて厚^{あつ}く感謝^{かんしゃ}し奉^{たてまつ}ります。』

と兩人^{りやうにん}は土^{つち}の上^{うへ}に手^てをついて、嬉^{うれ}し涙^{なみだ}にくれてゐる。

宣^{せん}傳^{でん}歌^かの聲^{こゑ}は追^{おひ}々^{おひ}近^ち付^{かづ}きしと見^みる間^まに、言^{こと}依^{より}別^{わけ}命^{のみこと}は先^{せん}頭^{とう}に、二^に三^{さん}人^{にん}の伴^{とも}人^{びと}と共^{とも}に、國^{くに}依^{より}別^{わけ}が端^{たん}坐^ざし待^まち居^ゐたる榎^{かや}の大^{たい}木^{ぼく}の側^{そば}近^{ちか}く進^{すす}み來^{きた}る。

是^{これ}より言^{こと}依^{より}別^{わけ}命^{のみこと}、國^{くに}依^{より}別^{わけ}の兩^{りやう}將^{しやう}はこを策^{さく}源^{げん}地^ちとなし、いよいよ時^し雨^{ぐれ}の森^{もり}の魔^{まし}神^んに對^{たい}し、言^{こと}向^む戰^{せん}を始^{かい}始^しすることとはなりぬ。此^{この}物^{もの}語^{がたり}は紙^し面^{めん}の都^つ合^{がふ}に依^より、未^{ひつじ}の卷^{まき}に口^{くち}述^{じゆつ}する事^{こと}とせり。

惟^{かむ}神^な靈^ら幸^ち倍^は坐^ま世^せ。

(大正一一・八・二〇 舊六・二八 松村眞澄録)

(昭和九・一二・一九 於北陸路 王仁校正)

靈界物語 第三卷 海洋萬里 午の卷
終り